川柳塔

創刊大正十三年　通巻一一〇四号

日川協加盟

第7回 春の川柳塔まつり誌上大会

No.1104

五月号

暑中見舞広告募集

本誌七月号に掲載する暑中見舞広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各句会（川柳会）のアピール及び誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願い申し上げます。

★個　人　一口　1／9頁　二、〇〇〇円
　　1／6頁　三、〇〇〇円
（巻末の台紙に原稿を貼付または記入してお申込み下さい。）

★団　体　次の四種といたします。
①　1／3頁　六、〇〇〇円
②　1／2頁　九、〇〇〇円
③　2／3頁　一二、〇〇〇円
④　1　頁　一八、〇〇〇円

▼原稿締切　五月二〇日

川柳塔社

心を尽くし　思いを尽くし　知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団　湯川胃腸病院

消化器科　放射線科　脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設

大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2　TEL 06-6771-4861
http://www.yukawa.or.jp

ＮＨＫと造幣局と

小島蘭幸

川柳の楽しさをアピールするチャンスだとお引き受けした〝ＮＨＫひるまえ川柳〟中国地方の川柳塔社同人、誌友、柳友の皆さまのご支援、ご応募に支えられて五年目を迎えることになりました。平成最後のお題は「新」4月11日、生放送でした。入選句は16句、同人の作品を紹介致します。

カフェテリア紳士の手には新語辞書　　くにこ
新しい時代の風が背を押す　　楓花

杉浦圭子アナウンサーとのコンビも二年目を迎えました。「川柳に癒されています」という視聴者の声を励みに、これからも文芸としての川柳を発信致します。

生放送を終えて、広島駅から電車で造幣局広島支局へ行きました。〝花のまわりみち〟、ここには〝桜の通り抜け〟で有名な大阪の造幣局から順次移植された、63品種２１６本の八重桜が咲き誇っていました。

〝花のまわりみち〟には、俳句と川柳の応募箱が備えられていて、私は川柳の部の選者を務めていますので、今年の花「紅笠」を是非見ておきたかったのです。会場には、昨年の入賞作品26句と選者吟が掲示されていました。

忖度をしない桜は散っていた　　てん平
あの世にも届けたくなる福禄寿　　彰
福禄寿のまるさの中にいるひとり　　蘭幸

川柳と俳句の担当をされている方と少しだけ話しをすることが出来ましたが、年々、海外、遠方からの入場者が増えているとのことでした。そして今年は二ヵ所で販売している貨幣セットが好評ですぐに売り切れたとのことでした。平成最後の記念に私も欲しかったのですが残念でした。

元号が令和となって初めての〝ＮＨＫひるまえ川柳〟は5月4日、ＮＨＫひろしま放送局でゲストを迎えて公開録画を行います。誰でも入場出来ますので、フラワーフェスティバルの見物を兼ねてお越しいただければ嬉しく思います。私も公開録画は初めてなので、今からワクワクドキドキ、とても楽しみです。

座右の句
俺に似よ俺に似るなと子を思ひ　（路郎）
私の句
人間を裏切りにんげんに縋る　鴨田昭紀

川柳塔 五月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「五月の風・埼玉小川町」

■巻頭言　ＮＨＫと造幣局と……小島蘭幸…(1)
地を這う龍に御座候……都倉求芽…(2)
川柳塔（同人吟）……小島蘭幸選…(4)
川柳塔の川柳讃歌㉒……木津川計…(41)
自選集……(42)
句集の森……(45)
温故知新……(45)
水煙抄……西出楓楽選…(46)
橘高薫風句抄……(63)
誹風柳多留一二篇研究 71……(64)
愛染帖……新家完司選…(66)
檸檬抄「草」……川端一歩・山岡冨美子共選…(70)
英語 de Senryu ㊽……吉村侑久代…(73)

地を這う龍に御座候

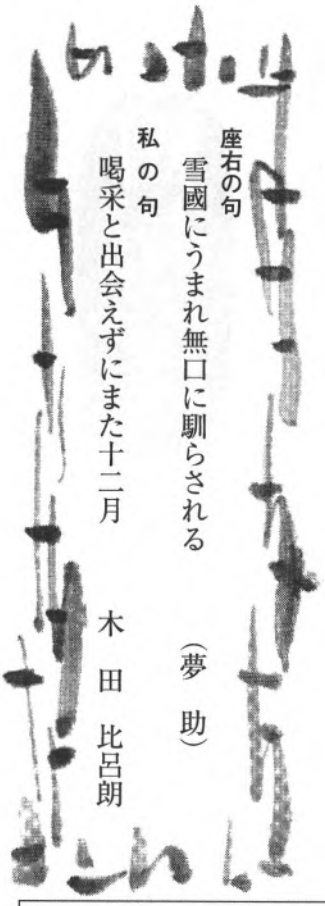
都倉求芽

昭和3年辰年生まれ。誕生日で91歳になる。若い時は虚弱体質でとてもこの歳まで生きるとは思いもよらなかった。結婚当初、養命酒を飲んでいた。妻はそんなもん飲まんでもいい体にしてあげると言った。料理に腕を自認の彼女は当時まだ乏しい食材から料理を考案してくれた。

おかげさまで私の体は次第によくなっていった。それが程度を越えてまでよくなり過ぎていつしか肥満体になっていた。

49歳だったか定期検診で糖尿病発見。空腹時で血糖値が290。即、教育入院。最初の夕食がハム一枚、レタス一枚、ご飯110グラム。食器の底に静まりかえっている。暗然たる気持ちになった。当時はまだビデオもなく、8ミリ映画を幾度となく見せてくれた。君達の体はうわべは健康そうに見えるが実体はあと二、四年のものだ。今のままでいけばみんなこんな体になる。目は網膜症、足首切断、その他

一路集（「雫」……夏目一粋選…(74)
「レンズ」……安田忠子選…(75)
初歩教室「先　生」……髙瀬霜石…(76)
川柳塔鑑賞……古久保和代…(78)
水煙抄鑑賞……稲見則彦…(80)
せんりゅう飛行船㉑……新家完司…(81)
インスピレーション・ナビ　印象吟……大西泰世…(82)
第七回　春の川柳塔まつり誌上大会……(84)
四月本社句会……(106)
句会燦燦……板垣孝志…(110)
川柳塔WEB句会「書　く」……島田駱舟・斉尾くにこ共選…(111)
各地柳壇（佳句地十選／片山かずお・川崎ひかり）……(112)
五月各地句会案内……(126)
柳界展望……(128)
■編集後記（ひとこと／伊藤嘉昭）……朱夏・眞澄…(130)



座右の句
雪國にうまれ無口に馴らされる　（夢　助）

私の句
喝采と出会えずにまた十二月　木田比呂朗

腎臓、脳梗塞、見ての通り。これが嫌なら私の言う通りにしなさい。女の先生は厳しかった。一年以内に10キロ痩せろ。食べるものは一覧表以外制限。退院してからも食事療法を教えられる。食べる者より作る者が肝心だと妻を同伴。一週ごとにノートに書いて見せに行く。嘘を書いても血液検査ですぐバレる。一年が過ぎた。体重は8キロは減った。血液検査もまずまずのところ。先生は褒めてくれた。とにかく歩け、通勤も乗るな。

いつしかそれが日常的に体が馴らされて、これほどではないがある程度自然的にしみついている。ラーメンなどはここ40年ほど食べたことはない。

しかしもう体はだいぶん弱ってきた。特に足が。

狭い家つたい歩きに丁度いい　求　芽

弱かった私がこの歳まで生きてこられたのは当時の先生のおかげ。お名前も忘れてしまった。お礼を申し上げたいが、所在もわからない。申し訳ございません。

卒寿なお地を這う龍に御座候　求　芽

川柳塔

小島蘭幸選

被災地のブルーシートの褪せて春
丁寧な字で書き写す師の句集
ポストまで　なずな　たんぽぽ　ほとけのざ
冬眠から覚めたまっ赤なスニーカー
雛囲む作法に遠い抹茶碗
梅まつり脱いだダウンが手に余る

箕面市　中山春代

節分の夜の鬼たちとホームレス
片隅でレイテ戦記を読む初老
ここからの沈黙はもう愛じゃない
七十年生きれば当然のゆがみ
三月の海からフクシマを臨む
三陸の沖に魚跳ね鳥遊ぶ

橿原市　居谷真理子

明け方の夢を一日なぞっている
過去形で見える山河は美しい
耳栓がポトリ桜が開花する

倉吉市　牧野芳光

貧しさを抜ける机にかじりつく
机からつながっている導火線
目力が失せても海に目を向ける

茨木市　(故)島田誠一

ユーモアのセンスで掴む初対面
接待ゴルフ慣れてスコアも出しゃばらぬ
新元号平成の傷労りつ
眼を出して洗いたい日が春と来る
ありがたや時給千円神楽舞う
オレオレを信じた耳が責められぬ

松山市　柳田かおる

時を抱くこわれぬように　こぼさぬように
ふり返るデコボコ道をだきしめる
広げすぎた羽をじょうずに畳めない
結局はわたしを変えるだけのこと
荒波をくぐり一級品になる
うわさにならぬ小ちゃな恋の物語

千葉市　海老池　洋

咲く花の順を知ってる万歩計
いたずらで済ましておけぬバイトテロ
いろいろの音の混ざって温い街
捨てる筈ないのに書類見つからぬ
日曜日待ってた頃が華でした
起承転結びの結が難しい

大阪市　平井美智子

ふるさとの母から雨の日の電話
ほほえんだ豆腐一丁買ってくる
裏おもてどちらが出ても諦めぬ
遅咲きの羽化だと古希の腕まくり
菜の花の海にあの日の潮溜り
新しい春です　鍵を変えました

藤井寺市　鴨谷瑠美子

生き方の違いかアドリブが出ない
笑いの裏の涙はわたしには見える
寄せ書きのまん中達筆が目立つ
白木蓮ほど嫋やかに散れるかな
夕凪にモネの小さい舟が出る
春の愁いシグナルの点滅つづく

長岡京市　山田葉子

家事育児そこそこしたと思いたい
じっと顔見てから席を譲られる
母になってもまだまだ恋をするんだね
ドラマ見ているようお向かいの離婚
叫んでも呟も返らない遥か
ヨレヨレのヘロヘロでも冬が越せた

神戸市　細川花門

外灯が点る夜霧の猫の恋
菜園の旬の恵みを皿に盛る
さみどりの風に染まってゆく山家
紅椿ぽとりと音を立てました
初花を仰ぐ両手にゴミ袋
永久の愛円周率のようなもの

鈴鹿市　小河柳女

足跡の哀しいまでに蛇行する
一日を走り一日を失う
鉛筆に熱い心を入れている
坂道を転がっていく春暦
無になると里の景色がふんわりと
茶を点てるさぶさぶとひとり飲む

岡山市　工藤千代子

神さまがお描きになった夕日です
健康も長寿も神に祈らない
背なに風忘れなさいと肩に雨
平凡な夫と夕日浴びている
このままを受け入れ空が晴れてくる
老い方を春の嵐に問うてみる

米子市　吉田陽子

待ち切れず花屋の春へ逢いに行く
永遠を打ち消す落花絶え間なし
解放感よりも孤独な一人旅
断捨離の後で大事な物捜す
プロだった日を覚えてるお針箱
春だよと私の太鼓打ち鳴らす

松山市　栗田忠士

背伸びしても逆立ちしても私です
なるようになるさ肩の荷を下ろす
内緒にしてあげると脅しかけてくる
反対をすると責任者に推され
野に生きる犬の自由を知らぬポチ
七巡目神に感謝の鈴を振る

札幌市　三浦強一

独酌じゃないです月と差向い
極楽じゃもっと呆けちゃうなと思う
オレオレにワタシワタシと言ってやる
３６５連休よわたし
名披講十七音に皆しびれ
逆転を夢見ていつか米寿越え

大阪市　谷口義

息抜きに生きてるぅうなもんですわ
懸賞金も付かぬことだし休む
肉離れ浮世離れのこの世かな
いつでもええねんけどすぐ医者に行く
野性に戻らないよう飴をなめている
全身が桜になっていくさくら

西予市　西田美恵子

雨の日は雨の雫で絵を画こう
一面の菜の花村に子が居ない
お金の匂い嗅ぎ分ける鼻持っている
古里の風を土産に母帰る
訃報聞く受話器冷たい風を抱く
表面張力あなたの愛は溢れない

和歌山市　福井菜摘

盟友も悪友もいて生きる張り
殻やぶる勇気をくれた友の檄
まだ逝けぬこの世に恩が山とある
ふる里の山が私を巻き戻す
不揃いの器も温し三世代
嬉しさを夕餉の膳に盛り分ける

大洲市　中居善信

人撃った傷が癒えない父だった
群青の海へ嘘などつけようか
傷つけてジョークジョークは無いもんだ
諦めか悟りか腹も立たないね
木村好夫のギターがハートくすぐった
穴場探して放浪癖の吉田類

はじまりはミルクを湯煎するように
諦めるつもりでキスをした額
別人の臭いと汚れ作業服
着火した痕に優しくふれられる
絶頂の顔のどこにもないパトス
ふたりしか知らない知恵の実のその後

沖縄県　森山文切

良く噛めば私の味が分かります
許すとは言わぬがビール冷えている
缶ビール軽い命を撫でてやる
作り笑い君も淋しい人なんだ
父の遺言白紙の謎が未だ解けぬ
雨宿りあなたも迷い子なんですね

寝屋川市　伊達郁夫

輪の中の定席にいる安堵感
少年の夢ポケットはLサイズ
枕干す喜怒哀楽の虹が出る
ふかふかの枯葉あしたの森になる
人間だけに国境がある地球
犬かきで平均寿命泳ぎ切る

大阪市(故)　升成好

春うらら相撲相手は五七五
九十三　気炎吐いたり怯んだり
脳天が嫌々をして働かぬ

大阪市　津村志華子

螺旋階段人にかくれて泣いたとこ
ヘルパーさんが明るい人で救われる
歯科医の庭に痛みなだめる八重桜

豊中市　松尾美智代

老いの呪縛この苦しさは何だろう
出口探してひとり蹲いている私
全部放り出せれば楽になれるのに
目を閉じて見たくない物見ない主義
今日一日を反省してるロゼワイン
ほどほどに楽しんでます夫婦箸

河内長野市　森田旅人

亡母の手を借りて選者となる着物
深呼吸大丈夫だと風の声
八十路にも伸びしろはあるスクワット
おりあいをつけて大人の赤と黒
人違い背に抱きついてのそれから
狼に還る月夜の独り鍋

大阪市　寺井弘子

家中の瞳受験の背を押す
通学路青葉若葉の応援歌
信用で続く老舗の灯が温い
春兆すプラス思考へ切り替える
退院日生き方変えて第一歩
言葉では慰められず手を握る

札幌市　小沢　淳

毎日が日曜だけど暇はない
人の世に詩に救いの海がある
台湾に二十五年の川柳史
兄弟に格差がついて仲違い
ＡＩ俳句人の心を掴めるか

男鹿市　伊藤　のぶよし

悦びの春咲くもハナ散るもハナ
うき草の性を見習うちぎれ雲
心意気きょうもセッセと蟻の列
余生では済まぬ長寿に叱られる
もうチョット生きてみようかもうチョット

弘前市　浅田　隆樹

口ゲンカ孫がいったんコマーシャル
寒村の誰も渡らぬ青信号
身の回り整理しとこか不整脈
葬儀まで手もちぶさたという酒も
私ならいくらだろうか保釈金

弘前市　稲見　則彦

リンゴって真っ赤でなけりゃダメですか
雪室がわたしを眠りから覚ます
りんご追分聴いてひばりと差しで飲む
だからってボーっと生きておりませぬ
新元号やきもきさせる雀たち

弘前市　今　愁女

新元号馴染めば良いに決まってる
今更に旅行できまいヨーロッパ
地元でも美術鑑賞ぐらい出来
博物館へ独り自分を取り戻す
今年また逢える楽しみ夕桜

弘前市　髙橋　洋子

願わくば笑って逝きたい花畑
老人斑ひとつひとつにある思い
ここはどこふっと忘れた旅の宿
心の中に真っすぐ入る母の文
アナログに戻りたくなる近代化

塩竈市　木田　比呂朗

図書館も旗日にデカいマル印
連休にパソコン何故か不整脈
妻の留守ひときわ高い電子音
道の駅地産地消を前に出す
すっきりと背筋伸ばせというサプリ

横浜市　菊地　政勝

パワハラにされたら困る愛の鞭
票と言う媚薬に酔って威張り出す
人柄が偲ばれそうな上手い文字
方言を包み里から荷が届く
女房が行く気になった美人の湯

名画座で若き日の自分と出会う
子ども等の声が聞こえる廃校で
半世紀今も先生のひと言
民意無視話しても分からないこと
再稼働国民の投票がいい

さいたま市　星野育子

氷柱の清いオーラー寄りがたい
清流の魚は視力よさそうだ
春がきたベランダの鉢さわぎだす
亡夫から孫に贈ったお雛様
若者の気持知りたいバイトテロ

朝霞市　前田洋子

介護ばかりさせてる少しつらい春
病室の真正面にある夕陽
お見舞の夫と握手で別れます
クリスマスローズ咲いたとはずむ声
妹にいい子だと娘をほめられる

上尾市　中村伸子

鬼捨ててみれば優しくなれますか
残月と歩く昨日のことなどと
陽だまりの中にいるよな君の笑み
花々に負けぬ帽子で春の街
キーポイント少しずれててご愛嬌

八王子市　川名洋子

友達から丸い地球の写メが来る
山笑う日本人で感謝する
一日の予定犬にも説明す
ホーホケキョまだ頑張るか聞いている
桜咲く君の合図と受けとめる

東京都　川本真理子

公園の隅で小猫の声がする
捨て猫の声が止まった雨の午後
兄ちゃんが猫の穴掘る庭の隅
目印に白い小さな石を置く
母さんにナイショ指切りした二人

富山市　島ひかる

日脚のび夕餉だんだん遅くなる
暖房の部屋で聞いてる花だより
思い出の桜切ろうか切るまいか
しのび寄る老いの恐怖にたち向う
快眠快食憎まれ口もつい

可児市　板山まみ子

雨予報気にせぬ私晴れ女
どこへでもひょいとリュックとスニーカー
気がつけば年中マスク放せない
難しいなあ気配りの匙加減
これからの前哨戦のようなケガ

犬山市　金子美千代

犬山市　関本かつ子

真っ白なページにペンもひと休み
こんなにもお年だったか訃報欄
あったかい話が出来る夫婦仲
変装をしてもゴーンの鋭い目
思春期の孫に裏口開けてある

愛知県　早川遡行

平成が終り波乱の幕開けか
安倍に替わる誰が居るというのかね
一人では敵わぬ妻を連れていく
咳をして周りの人を遠ざける
ピカピカのトイレ日本は素晴しい

奈良市　阿部紀子

東京はホーム着くなりくしゃみする
豊洲市場やたら広くて寒いです
豊洲で握り食べるの並んでる
防災と介護に力奈良市入れ
富士山も年取り傾斜なだらかに

奈良市　宇賀史郎

より重い任務給料据え置かれ
容姿から考えられぬ語り口
にこにこと過去を語らぬ丸い石
二杯目でしゃべり始めた過去少し
酒煙草身体壊した金時間

奈良市　大久保眞澄

お遊びが過ぎます国も大阪も
本物の長老は窓際にいる
怒り続ける体力がありません
よその子はちょっと見ぬ間にお年頃
好奇心に体が付いていけません

奈良市　髙橋敬子

家族葬済ませましたと回覧板
膝痛に庭の雑草伸びたまま
母訪ね話聞くのが用となる
ひょっとして家もあったかアポ電話
立ち話もめる気配に用作る

奈良市　辻内げんえい

朝の主夫済ませて今日も用事ない
国会中継音量下げて昼寝する
寒肥を今年もやれた老い二人
好きだったマドンナも歳俺も歳
子を飛ばし孫につなげる僕の趣味

奈良市　山本昌代

背にリュック両手フリーにして歩く
ほほえんで席をゆずってくれたボク
腕まくり嫌なことから手をつける
孫せがむ散歩ブランコすべり台
久しぶり遊んだあとのいいだるさ

奈良市　米田恭昌

異国語に慣れ親しんだ奈良の鹿
校外スケッチ野次馬ならぬ鹿のぞく
粋な野次淀む空気をかきまぜる
堅物も男　色香にけつまずく
改元より十連休を待つ子供

生駒市　飛永ふりこ

山坂を越えた皺です気風いい
水仙の律儀に性根入れ替える
ユーチューブ千春の声で息を抜く
この場所でまともに転ける腑甲斐無さ
私らしくめげずピンクの羽で飛ぶ

香芝市　大内朝子

大空を味方に豊かなる心
菜の花の匂いへふる里が匂う
寂しい夜亡母の手紙を抱いて寝る
横丁の昭和レトロに迷い込む
男の情と女の情が擦れ違う

香芝市　山下純子

青春の仲間青春連れてくる
春の風私の野性開花する
禁断の実をたべ二人闇に舞う
平等に千手観音愛注ぐ
告知受けた友を黙って肩を抱く

奈良県　安福和夫

時事吟でアップデートの語彙在庫
物知り顔せずに周りの事象観る
クイズ王物知り過ぎて違和感が
偏った知識欲には警鐘を
川柳のお陰で今は語彙に幅

奈良県　谷川憲

入社式みんな期待の星だった
近隣国百年の棘抜けぬまま
餓鬼大将ケンカの加減知っていた
起きるなとそっと寝かしている持病
堂々と残して欲しい公文書

奈良県　長谷川崇明

イカナゴの恵みを奪う温暖化
離れてもスマホが繋ぐ家族の輪
さすが妻ランチに化けた残り物
お下がりを知らない今の一人っ子
弥陀の手に乗って告知に耐える友

奈良県　渡辺富子

家中へ花の香満たし母を待つ
断捨離を横目で今日も妻は翔ぶ
妻の機嫌読んで適度な車間距離
人生のおぼろを花で埋めていく
山のかなたのろのろ消えた夢ひとつ

和歌山市　磯部義雄

慇懃な言葉の端に含むトゲ
真っ二つ割れた意見に物申す
トンコレラ忘れた頃に食べる性
潮が引くように記念日去ってゆく
元号は変れど僕は僕である

和歌山市　上田紀子

大丈夫所どころがまだ元気
駆け抜けた平成耐えていた昭和
転た寝のこんな贅沢春の午後
猛練習重ね弱点追い払う
葱坊主兄弟みんな里を出る

和歌山市　喜田准一

ゆとりより焦りがきつい締切日
待っている順には届かない便り
太陽が昇る下界を見降ろして
下の句が出ないここらで四股を踏む
吟行で気分新たに句も進む

和歌山市　坂部紀久子

米寿でもまだ女ですひなの軸
誰かスイッチ入れてほしいな重い腰
好きですと言われた過去に浸ってる
唯一の弱音吐く場の置き炬燵
賞味期限切れると叫ぶ冷蔵庫

和歌山市　武本碧

善人の役それなりの顔になる
ぴかぴかもいいがやっぱり燻し銀
畳みかけないで内気な脳回路
花野への道は調べがついている
膝痛い話一日盛り上がる

和歌山市　土屋起世子

日暮れまで春を満喫独り者
幸せの目盛も緩くなるゆとり
鮮やかな借景ひとりティータイム
難聴を笑顔つくって擦り抜ける
インターホン鳴らぬ一日ペン弾む

和歌山市　古久保和子

シャープペンの芯ほど繊細になれぬ
泣くまいと決めてもペンが雫する
躓いた石のことなどすぐ忘れ
冬と春同居しているペダル踏む
予定から未定に変えた菜種梅雨

和歌山市　堀冨美子

たかが趣味されど届かぬ遠い道
スケジュール傘寿の春も忙しない
空き腹のデパ地下試食美味ばかり
ファミリーでカニ鍋みんな無口です
見栄張って老醜を消す満足度

和歌山市　松原寿子

足るを知る女ひとりの暮し向き
思い切り歩いて気分変えていく
趣味ひとつ心にゆとり絶やさない
矢印に逃げ道などは書いてない
約束が満たされた日の春の使者

岩出市　藤原ほのか

茶の香りほんのり心あたたまる
茶番だと言われてみても真剣だ
でがらしも深く味わうことにする
はめられてここまで来たが幸せだ
雑草は岩をくだいて生き延びる

海南市　小谷小雪

アオムシも僕も変身できる春
爪も髪も伸び放題に冬終える
ようこその春へ鏡を拭いてみる
罵られて寒さこたえる骨である
雪溶けの音にとぼけた顔の熊

海南市　堂上泰女

見回りに来る弟へ出すチップ
広告をスキップさせて選る動画
入り口は明るく出口素っ気無い
なる程と聞けば素敵なビートルズ
ほろ酔いが説いて聞かせるビートルズ

紀の川市　楠原富香

紆余曲折あって人間磨かれる
慈しみ持って全うする介護
役職の消えた名刺が風邪を引く
母の辞書時代遅れの味がする
顔色を読んで二人の歩が揃う

紀の川市　山東日出男

健忘症オートロックに遊ばれる
豪雪も百人力のラッセル車
ドヤ顔の少年の手にオニヤンマ
母ちゃん韓流父ちゃん時代劇
CMを早送りして観るドラマ

橋本市　石田隆彦

光るまで磨きをかけている野心
ぼんやりと十連休のニュース見る
祝日の価値がうすれる十連休
足の向くままの旅路で知る史跡
妻に感謝だけどことばでよう言わぬ

京都市　清水英旺

啓蟄に老いの衣を脱ぎ捨てる
よい事は全て昭和にあった僕
大方の人　歩に甘んじて生きている
これからも歩く行きつく処まで
うまい料理妻蘊蓄を披露する

京都市　藤井文代

ふり向けば反省ばかり己が影
そこそこで会得の積もり後で泣く
記憶器が付いた補聴器夢に見る
家計と呼吸バランス崩す消費税
この便利さ越えた先にはずぼら癖

京都市　桝本宏子

やさし過ぎ少しいじ悪したくなる
花粉症と春がふんわりやって来た
お守りを三つ入れてた空財布
いい顔は沢山ためてある遺影
母業をたたんでからの女坂

八幡市　今井万紗子

鶯が鳴いたと夫が呼びに来る
娘らもまた娘を産みし雛祭り
そこそこの寿命であの世所望する
自分史に楽しい記憶だけ書こう
夫が入れる湯たんぽそっと抱いて寝る

大阪市　磯島福貴子

雨だけどポイント5倍行かなくちゃ
天の配剤私長生き出来そうよ
老老介護互いが互い思いやり
足が拒否見上げため息歩道橋
杉桧花粉を飛ばし命継ぐ

大阪市　井丸昌紀

付き出しはサービスやろて甘いなあ
体に悪い料理やっぱり旨い
相談はせぬよう児童相談所
正論をかざす男が崩した和
この喧嘩なかったことにしてあげる

大阪市　岩崎玲子

心配があまたあるのに肥えてます
冷蔵庫いろんなメモがここかしこ
家計簿に喜怒哀楽が詰まってる
五十年たまたま波長合いました
自慢話少し許そか卒寿なら

大阪市　内田志津子

姉傘寿ルージュとゆれるイヤリング
10歳の孫に完敗嬉しい日
病癒え二人で祝う赤ワイン
果てもなく歩いた道に新芽出る
担担と今日一日を担担と

大阪市　宇都満知子

ふわっと包みにやってくる春風
正直な意見ばかりでまとまらぬ
あなたの無口晩酌に溶けている
簡単明瞭息子からのライン
あなたへの反論はしかめっ面で

大阪市　江島谷　勝弘

私のガンコ長女が継いでくれている
お金持ちでないとできぬライザップ
あれこれとぼんやりしてるヒマがない
ユニクロも無印もピッタリの僕
年金から引かれるものが増えている

大阪市　榎本　日の出

美人には生れなくって安上がり
歳取れば脳に皺よる音がする
大胆に生きよう百はちょっと無理
マイナンバー写真入りでも用がなし
平凡と言う幸せに今気付く

大阪市　榎本　舞夢

誕生日済んで終活第一歩
ひな祭娘孫来る久しぶり
来年米寿どう過ごすのか花が咲く
趣味健康近所付合い大切に
いきなり二通結婚通知飛んで来た

大阪市　大川　桃花

桃の枝買って独りの雛まつり
もう八年まだ汚染土は被災地に
手かえ品変え有料サービスつけるガス
キャッシュレスかなりドタバタする予感
希林さん今も書店で人気者

大阪市　大治　重信

蛇穴を出でてまぶしく日は新た
寒空に鬼が春つれ戸を開ける
次の世は知らぬ事だと蜆汁
統計は不正と決めて世間みる
頑固だが父とは違う歳をとり

大阪市　奥村　五月

ありがとう言う間も無しに妻は逝く
叱る妻消えて昔にかえる酒
夕食に妻の料理が目に浮かぶ
叫びたい妻よ帰れと大声で
強運の妻も短命先に逝く

大阪市　小野　雅美

詮索はしないで薔薇の独り言
グレーから黒へとわたくしの涙
遅咲きの花に潜んでいた嫉妬
虹色の吐息手紙に滲ませて
片想いやっぱり夢も片想い

大阪市　笠嶋　恵美

歯科の椅子倒れる時にああめまい
耳鳴りのすごさ実感まず内科
無理をせず流れにまかせ生きていこ
奈良ホテルの刺繍の布巾もらう幸
電話から天女のような友の声

大阪市　金川宣子

アレとソレだけで成り立つ老いの日々
スーパーのチラシがほしいデジタル版
遠目でも夫とわかる後頭部
春の花一雨毎に芽吹き出し
趣味仲間手抜きがあって長続き

大阪市　川端一歩

毎日が黄色い旗と言うわが家
新元号日本の夜明けなって欲し
参加する意義も大切句会出る
うるさいが娘が近くいる安堵
いい友だ座ればすぐに出るビール

大阪市　古今堂蕉子

入学祝い年玉あげたばかりです
心眼の衰え術中にはまる
上品にも色気にも縁なきわたし
とんでもないしつこく覚えているおんな
こともなげに忘れるのが得意　おとこ

大阪市　近藤正

マイペース守っています酒の量
改憲は徴兵制が忍び寄る
大勢の流れに抗し異論吐く
ありのまま示す統計まで歪め
トランプをノーベル賞に推した安倍

大阪市　坂裕之

気取らずに生きているので怖くない
成長が当たり前ではないと知る
おっちゃんがリュック背負ってお買い物
国産はやっぱり違うこの強さ
息子から電話がくるとパスワード

大阪市　髙杉力

忘れたいことありひとり旅に出る
接待を終えて仲間と飲み直し
営業の名残りか今も早いめし
たこ焼きの土産に寝た子起きてくる
切り抜いた料理なかなか出てこない

大阪市　髙杉千歩

明日また逢う約束を車椅子
親友から便り五十年を振り返り
幸せなら手を叩こうホーム誕生日
大正昭和平成まだ欲があり九十三
鉛筆がない一大事です九十三

大阪市　田中廣子

運命の出会いがあって今がある
古希過ぎて過去振り返る楽しみだ
嫁に来た家具もそのまま年をとり
贅沢なランチで老いを祝います
孫達が立派に育ち文句なし

大阪市　田中ゆみ子

一心に蟻のようには働けぬ
さよならの理由完璧な人でした
ライバルが元気ないので退屈だ
草餅は祖母の素朴が一番だ
殺人はしてないけれど傍観者

大阪市　寺本実

ただひとつ先立つものがありません
幸せは冷凍保存しています
年齢は聞かずちゃっかり干支を聞く
葬送はマーチにすると決めている
がんばれと気軽に重荷背負わされ

大阪市　中井萠

そろそろと我が人生の棚卸し
心得ております妻の発火点
切々と説く子聞く親老いを知る
されるまま赤児に似たり病む夫
生きる事あたりまえでは無いと知る

大阪市　原田すみ子

幸せなんだやさしい眉が語ってる
便利に馴れ脳も手足も甘えだす
諦めた形のままで投げた夢
人混みに交じり流れの中ひとり
普通の日重ね軸足太くなる

大阪市　平賀国和

川柳の源流訪ね龍宝寺
八右衛門の大志を思う辞世の句
川柳への思い新たに柄井の碑
3・11傷は深くてまだ癒えず
震災禍明日は我が身と戒める

大阪市　藤田武人

世相突くジョークを秘めた四コマ目
人間の嘘に隠れていた本音
フレーズを集め毎日噛み砕く
拘りもここまでくれば頑固者
三行にぐっと思いの筆無精

大阪市　藤原千恵子

火の用心深夜に起きて一巡り
生け花の動きに合わせバイオリン
お腹一杯音楽食べて茶漬けする
こんな日は花に水やり布団干す
ずぶ濡れでシート被せるドライバー

大阪市　山本加お里

歩くのが薬とおもう風の街
大草原命はぐくみ蘇る
コンピューター悪魔の手にも作動する
明日があるそれだからこそほどほどに
介護した親の生きざま見て育つ

大阪市　吉内タカ子

独り居も春の誘いの好奇心
笑いあい愚痴吐き合える友と居る
新元号わたしも卒寿いき燃やす
河内弁とび散る幸の同期会
身の丈は油断ゆるせぬ日程表

大阪市　若本安代

歩みまで軽くいきいき更衣
まだやれる熱い両手のある限り
いとおしく深く皺ある象の鼻
日脚伸び花屋の前の立ち話
蝶二匹見付けて欲しいかくれんぼ

堺市　奥時雄

身長は十年前のままで言う
衰えを全く見せぬ胴回り
贅肉の厚み万年雪となる
飲んで寝て筋肉できる訳がない
焼肉にビール昔を羨まず

堺市　柿花和夫

暖まって行きませんかと落葉焚き
ルンバ無理ブルースならば大丈夫
現場ではもう聞かれない労働歌
伝言板がほっこりさせる無人駅
ラーメン屋にランクを付けて牛丼屋

堺市　加島由一

生きてみせ戦ってみせ鯉のぼり
昼からは昼カラオケののど自慢
爺さんになっても女難花嵐
天気でも雨でもうまい朝ご飯
ふるさとは海だけ跳ねるさくら鯛

堺市　源田八千代

グレーヘヤー赤やピンクの服似合う
塾通い済んでスマホに嵌まってる
駅名表示英語ハングル中国語
転勤でやっと家族と暮らせます
一皿に三種のアイス三人で

堺市　坂上淳司

震災後八年汚染土は野積み
嵩上げの街だが人影は疎ら
大津波の遺構の前で手を合わす
ガタガタに南海トラフかと怯え
節電をするから原発は要らぬ

堺市　澤井敏治

本気なら野火を跨いで飛んで来い
俺が先いいえわたしと言わぬ妻
ご近所に朝採れ配るうわさ好き
歯車と言わせるもんか雑魚の意地
エシカルな風を掴んでするおしゃれ

堺市　遠山唯教

日溜りが春のよろこびつくりだす
旅にでて好きなおんせん見つけよう
ストレスが飛び散る泡の日本海
ながらえた娑婆には悔いが無かりしか
残照にみるしあわせを離さない

堺市　内藤憲彦

そう言えばあれプロポーズだったのか
断捨離の手始め僕のお小遣い
人生百年まだ伸びしろ有るつもり
校長にはＳＯＳが聞えぬか
お人好し見抜かれてから忙しない

堺市　矢倉五月

外科内科かかり付け医もお歳召す
その痛み解る解ると同い年
記念樹は大木となり子等遠く
心にゆとりある日ゆっくりマニキュアを
時々は恋に恋してするおしゃれ

池田市　栗田久子

新しい年号を待つ八十路の身
朝刊で今日の日付けを意識する
研ぎすます感覚老いを遠ざける
進む老い日々行動を確かめる
快方へ向かう体調春近く

貝塚市　石田ひろ子

立ち止まる余裕無かった半世紀
食べるのが好きでまめに料理する
考える力を貰う五七五
譲るべきは譲って丸い三世帯
ウォーキングサプリのように続けてる

河内長野市　大島ともこ

ビルの谷間昭和ひっそり息を吐く
ぷくぷくの初孫笑うラ・フランス
本当は好きだから目を合わせない
欠礼を詫びる墓前のワンカップ
本心じゃない言葉ばかりが口に出る

河内長野市　梶原弘光

つまんだりつついたりして鬼の首
トイレから鼻唄一句出来たかい
マラソンの梯子僕には出来ません
朝晩のノルマ開脚ストレッチ
虐待にしつけとルビを打った鬼

河内長野市　木見谷孝代

体型の崩れを嘆く春の服
野遊びのかくれスポットわらび採り
関白だった人と思えぬ背の丸さ
意識せず息吸うことのありがたみ
会える時に会っておこうとクラス会

河内長野市　黒岩靖博

空返事してると妻の稲光
聞く耳もたず知らぬ存ぜぬ妻の癖
入学が決まり家庭も春の風
句会後にわいわい喋る酒の宴
ヒートショック恐れて一番風呂止める

河内長野市　辻村ヒロ

窓際で一人のランチ至福どき
夢の中無口な亡夫顔を出す
自己紹介病名並べ趣味のよう
悔しさのバネも錆びつき愚痴になる
もう少し耕してみる好奇心

河内長野市　藤塚克三

自分史は大げさに書き盛り上げる
元気だなあ古い日記の一日は
反省文正直書いて悔やんでる
胸襟を開き弱みを握られる
手のひらに乗せられ崩れゆく私

河内長野市　村上直樹

熱燗二合ゆるんだ脳に灯がともる
監視カメラ増えていつでも檻の中
ＩＰＳ百寿ますます近くなる
妥協せず駆け引きもせず逃げもせず
息切れなんかしては居れないまだ傘寿

河内長野市　山岡冨美子

そのうちにピタパで乗れる宇宙船
天体の解明ＳＦが消える
いつからか隠れ蓑です亡父の書庫
頑張れに素直になれぬ足の肉刺
栄光はひととき記念碑も褪せる

河内長野市　山室光弘

不惑から迷いが我の友となり
変化球受けて思わずしっぽ出す
皇室の門戸開いた美智子様
米朝の脅しと騙し成りたたず
夫婦喧嘩握手するのに一ヶ月

岸和田市　岩佐ダン吉

しこたまの汗にだんだん満ちるもの
言葉飾りだんだん僕が痩せていく
汗のこと話さず運が良いとだけ
言いたい事ほんとに言うておりますか
書く喋るそんな自由は離さない

岸和田市　雪本珠子

病室のわたしを癒す茜雲
残された命の重み噛み締める
抱き合って喜ぶ貴方もういない
差出人の名が無い手紙ひょっとして
何げなく余命を医者に告げられる

四條畷市　吉岡　修

ひとはひとそっとしといてやるがいい
ゆるゆるとしておいでやが芯がある
大国にペアだペアだとおだてられ
へらへらと外面だけの党もある
着て脱いで妻の仕度を待たされる

吹田市　木下敏子

平凡な道真っ直ぐに進む背な
成り行きに任せ平和な日を送る
人並に爪は伸びます右左
大人しく笑って済ます太っ腹
人間の積りで食べている御飯

吹田市　野下之男

大統領二人も居ては困るなあ
若いなあ総理の髪はまだ黒い
採決で負けは判るがまた出そう
外国語頼りは息子たのみます
気持ち良く話すが他人笑うてる

高槻市　指宿千枝子

和やかに新元号を待っている
お花見を楽しみに待つ老人会
弁当は手作り亡母のかっぽう着
さくらさくら残りの人生たのしまん
新しい様式もよし墓じまい

高槻市　片山かずお

忘れては買うからハンカチが溜る
お彼岸と盆だけはする墓参り
バスの便ダイヤ改正されて減る
予報士に言われてコート脱いで出る
笑顔でいれば誰でもみんな美男美女

高槻市　島田千鶴子

梅林にやさしい風の通り道
人住まぬ荒れた庭にも花は咲く
登校の子らの声聞く朝の窓
仮想通貨理解不能で手は出さぬ
昼日中バスは通過の辻地蔵

高槻市　初代正彦

好奇心つめた袋を持ち歩く
惑わずに歩む道です寒桜
じっくりと決めたらよろしまあ飲もう
スクワットしてる間も子は育つ
作業着もお似合いですね眉きりり

高槻市　杉本義昭

真っ青な空だレモンを振りかける
一〇秒を競う選手は風となる
気を抜いたとたん無常の風が吹く
眩しくてああ眩しくて片思い
島一つアジアの中でせめぎ合う

ワレ卒寿いつまで続く残り道
雛人形並べりゃ時代で顔かたち
駅ホームマスクの戦士次々と
久し振り細胞喜ぶ露天風呂
もうゴルフ眺めるだけの車椅子

高槻市　富田美義

まだ若いマウス右手に遊ぶ喜寿
お若いと言われちょっぴり無理をする
一生を力仕事で終えた父
特急の座席ほかほかみな寝てる
川柳で漢字能力つける手も

高槻市　富田保子

膝頭の愚痴もたまには聞いてやる
手土産もないのに奥へ通される
腹減っているので今日は妥協する
一片のチョコでヴィトンが釣れるとは
隣との会話はいつもゴミ置き場

高槻市　原洋志

ご先祖の苦労が棚田百選に
お化粧を電車の中で総仕上げ
飲み放題わたし的にはウエルカム
とりあえず百歳くらい目処にする
熱燗も良いが昼間はコーヒーで

高槻市　松岡篤

何事もほどほどにして元気です
息止めて二〇秒迄まだいける
未熟児と言われし孫も優良児
母の物処分出来ずにそのまんま
お見舞に相好くずす老いた姉

高槻市　安田忠子

一年生雨の日もある登校日
筆書きの名札だったと昭和の子
パパの本絵本に席を奪われる
遠い日の桜確かにそこに居た
マンションになって実家の門消える

豊中市　池田純子

手の内を読まれて今日も妻の勝ち
老いらくの恋に血潮が騒ぎ出す
生命線じっと見つめる手術前
待合室元気な人の憩いの場
カラオケで鍛えたノドで訓示する

豊中市　上出修

悪口を言われなくなるのも寂し
ラフスケッチしながら歩むいい余生
句会ではどなたもいつも同じ席
拾ったばかりに一円玉と交番へ
反省の後に味わう赤ワイン

豊中市　藤井則彦

豊中市　水野黒兎

外に出て弾みなさいとさくら咲く
雛まつり子らは巣立ってロゼワイン
のら猫に会いに散歩のコース変え
くねくねと女性の仕種まだ五歳
出会いから始まる別れさくら散る

富田林市　片岡智恵子

敗戦で自由になれた風見鶏
ありふれた話はいつか湯けむりに
帽子だけ見えて口笛消えてゆき
水ごくり死ぬまで女銀の皿
鷗みな春の鼓動に沖を恋う

富田林市　関　よしみ

天心に誠を語る藤の花
核心を突いたかロマンさわぎ出す
咲き誇る孫の鉢植え赤白黄
自画像はパステルカラーポーズとる
樹木医と桜の絆ゆさゆさり

富田林市　中村　恵

本気だと言えば言うほど嘘になる
鬼とでも不本意ながら手を繋ぐ
春なのにわたしの心花曇り
ため息をつくたび重くなる荷物
言い勝った枕熱くて眠らせぬ

富田林市　山野寿之

手間暇の嵩だけ育つ自家野菜
小さな幸会話が弾む湯気は鍋
嘘のないわたしがひとり影法師
ユーモアが円やかにする場の空気
温泉の中に疲れを置いてきた浴衣

寝屋川市　籠島恵子

齢重ねた人の会話にあるレール
思い出のひとつ真如堂の馬酔木
この角のカーブミラーにある死角
ふるさとの山はさびしき杉ばかり
山ざくら愛でてた父の背がふっと

寝屋川市　冨山ルイ子

時にせつなく時に優しく日が過ぎる
少しだけ予定を決めて今日済ます
今日と言う日後悔をせぬよう生きる
夕食の片付け一人台所
明日と言う日楽しみにして床に就く

寝屋川市　平松かすみ

梅田までサーカス五十五年振り
ひょっこりと町内さんと逢った列
百五十分乙女に返るイリュージョン
縞馬の縞に感心してみたり
検査値は上上花が咲きました

寝屋川市　森　茜

ここちよく句座へ誘う梅一輪
オリオンを指さす悲しみがふっと
百歳の元気は今朝も太極拳
まん中に小象サバンナ行く家族
ゴビ越えた黄砂が残るボンネット

羽曳野市　安芸田　泰子

鶯が春の台詞を淀みなく
還暦の雛人形が箱に住む
お日様が浚って行った雪だるま
思い出が断捨離の手を鈍らせる
悪口は書かないでおく日記帳

羽曳野市　宇都宮　ちづる

お日さまの匂いがしない乾燥機
啓蟄の庭にすずめが二羽遊ぶ
女子会を開花予報に合わせ決め
おのろけを言わなくなって四十年
パン派ごはん派勝手に作る老いの朝

羽曳野市　徳　山　みつこ

万物に原発ノーを誓う日だ（3.11　2句）
5.2万人へ忘れぬ黙祷
ネオポリス半世紀経て歴史持つ
頑張った昭和子孫へ鍵の束
生年月日ふつうに言えてまだ元気

羽曳野市　中　川　ひろ介

奈良まちに椿の造花鮮やかに
大松明火の粉振るのも熟練度
タンポポの踏まれ上手が場所を得て
桜の下車座になり手話ゲーム
椿咲く寒風の日もボランティア

羽曳野市　藤　原　大　子

木蓮が咲いてふる里離れた日
和箪笥で日の目見れずに泣く着物
隠し事あるが謎の人とは言われない
新しい言葉に出合う囲み記事
ふらふらと決めれぬ心持て余す

羽曳野市　三　好　専　平

勝つ極意忘れることと憶えたり
孤独死の棺の上に菊一輪
反骨の五歳の鬼と将棋指す
人もモノもみんな売られて捨てられる
先生はいらんスマホがあればいい

羽曳野市　吉　村　久仁雄

力こぶ妻が我が家を支えてる
カニすきフグちり今日は家族でちゃんこ鍋
あきらめの悪さがいつか咲かす花
有限の命忘れるための酒
不器用を笑い飛ばしてくれる妻

東大阪市　北村賢子

前を向く命へプランめじろ押し
不器用にただまっとうに生きる雑魚
行きたいとこ行く足保つ万歩計
身の丈をそれなり生きる小さな幸
長いトンネルまだ抜け出せぬ被災の地

東大阪市　佐々木満作

娘が嫁ぎでんとピアノの置き土産
ひと呼吸おいて状況見極める
勝ち急ぎ相手の術中にはまる
手の届かぬところへ巣立つ子を憂う
大銀杏ナニワの街を闊歩する

枚方市　丹後屋肇

変容に今浦島が立ち惑う
出生の地にコンビニの灯が点る
折れた傘放さなかった峠みち
石段に苔を生やした鎮守様
ぽつねんの駅へ母のにぎりめし

枚方市　二宮山久

夕焼けに染まるウォークの老い二人
ハーモニカ吹いてストレス晴らす丘
妻の持つひもの長さにある自由
沈黙を守り通した太っ腹
前向きに生きた人生友多し

枚方市　二宮紫鳳

里帰り抱かれて眠る母の海
うっかりと言った言葉にうそはない
慰めのことばがでない背を撫でる
瀬戸の海水仙の香に迎えられ
春うらら座り直してまたしゃべり

枚方市　藤村亜成

瀬戸際の生命に秒針が走る
見通しが悪いこの壁除かねば
過去の亡霊見たくないから前を向く
甘えられ甘える人の居る至福
欲深くならぬと執着心湧かぬ

枚方市　山口弘委智

大海を知らず策練る一夜漬
終電車一斉スマホ檻の中
老いてなお達者な便り欲を添え
あやつられ妻の掌生かされる
シャツの背に激戦の皺終電車

藤井寺市　太田扶美代

わたしの庭を選んでくれた蝶々
ちびまるこの声で夫に口答え
ほんのほんのほんの僅かな恋ごころ
二章目はあなたのためにだけ走る
唯一の長所がわたくしの弱味

藤井寺市　鈴木いさお

ステーキより刺身ボジョレより大吟醸
二世帯の掟見ぬふり聞かぬふり
気取らない人だ友だちになりたい
爺ちゃんにだってあったよ反抗期
はにかみを覚えて孫は十二歳

藤井寺市　髙田美代子

平成が始まった日よ終わる日よ
ざらついた国会なんか見たくない
齢とはこんなものかなオンとオフ
マトリョーシカの中の一つが見当たらぬ
寒いなあ風が覗いているらしい

藤井寺市　吉田喜代子

短冊に雛書いた友今は亡く
行き帰り自分の足で歩けた日
怪我をした我れに優しい人ばかり
思い切り大声を出す春の歌
生きて行く新元号に期待して

箕面市　酒井紀華

制服の自転車の先春萌える
道なりに歩きなさいと垂れ梅
おとなしい妻が秘めてる活火山
苦しくても逃げない男ゲットする
山男に惚れた私の登山靴

箕面市　出口セツ子

日々検査危険に同意書書かされる
嫌な予感検査で腎臓悪くなる
心労と多忙眠れぬ日々続く
長男と相談をする退院後
長男をすぐに頼りにして老いる

箕面市　広島巴子

ドスコイと相撲稽古に気を貰う
ちゃんこなべ太ってもいいお代わりを
力士殿私の脂肪あげましょう
だんだんと遠く感じる里の墓
足取りが軽やかになる花便り

八尾市　内海幸生

栞忌が巡る新緑鮮やかに
欠伸して妻の遺影と苦笑い
病院で節分だなと分かる膳
鬼さんよ此処で俺と遊ばぬか
仏像の笑顔で元気涌き出した

八尾市　宮﨑シマ子

春休み孫のプランに乗ってやる
高砂となったは叔母のお骨折り
春寒に一枚羽織り夜桜へ
差し向って話もあらず春ごたつ
ヒヤシンス五株競い合ってるよ

八尾市　村上ミツ子

なるほどと納得してもすぐ忘れ
スーパーの味にだんだん慣れていく
アポ電へ金目の物はないと言う
ボツの句を娘はいい句だとほめてくれ
冬には春を夏には秋を待つくらし

大阪府　米澤俶子

駄菓子屋も生家も遠い日のおぼろ
婆ちゃんは居眠りしても聞いている
真紅の血歳はとってもそのまんま
脳回路疲れています物忘れ
せめてもの残りの頁汚すまい

神戸市　上田和宏

本寄贈畳一枚広くなる
録画して見たい番組だけ見てる
休刊日一応ポスト確かめる
吉か凶か免許更新無事に出来
ダンスのため散歩川柳のため散歩

神戸市　奥澤洋次郎

程程の貧乏暮しにボケもせず
百歳が一生ものと背広買う
霞が関影法師ない人の群
人生は遊びだったと今頃に
ふるさとの山野は怖し愛おしし

神戸市　冨永恭子

暮らしたい場所で根を張る背を伸ばす
ヒヨドリを諭す沈丁花の香り
母にだけは釘煮を送りたいのです
姉らしく仲を取り持ってもやれず
宅配荷ゆるんだ紐は母の技

神戸市　能勢利子

改元に二度も立合う昭和の子
新元号予想しながら五七五
黄水仙庭に咲いたら春になる
十連休ディズニーランド小三と
毎日がラストチャンスと生きている

神戸市　山口光久

苦しい時に父の背中が目に浮かぶ
時々は日向ぼっこでリフレッシュ
当てもなくぶらり一日家出する
酔うほどに過去がじわじわ責めてくる
好奇心がきっと明日を変えるだろう

神戸市　山口美穂

うれしいね今年も会えたお雛様
美しい雛さまわたしは老いました
うぐいすの励まし聞きつ一歩づつ
躓きが悔し何にもないとこで
探しもの自分に腹が立ってくる

父ゆずり愚直に生きた深い皺
子の個性伸ばしてますか躾糸
ほどほどに弛ませておく赤い糸
それにしても長すぎません安倍総理
亡父の背が不言実行せよと檄

神戸市　山崎武彦

カーテンが揺れるあなたはもう居ない
何もかも許す気になる発車ベル
そよ風が遠出を誘う春の地図
背がかゆい指が2センチ伸びたなら
人間の興味で青にされたバラ

明石市　糀谷和郎

白黒を付けた一人が浮いている
我を通し一人ぼっちで飲むお酒
菜の花の中に元気なランドセル
働く手さぼる手みんな私の手
ふる里に集う仲間の手が温い

芦屋市　竹山千賀子

騙されてやろう惚けたふりをする
花芽もう待ちきれなくて脱ぐ兆し
削っても削ってもなお母の愛
仏様縺れた糸を紡ぐ指
美しい人だ静かに消えていく

尼崎市　加川靖鬼

ハズキルーペCM代を買っている
平成の灯もその内にぼんやりと
終活に落ちは付けない四コマ目
アドバイス裏に指図が見え隠れ
断捨離で諭吉に化けたルイビトン

尼崎市　永田紀恵

東京弁少しまじり息子が帰省
横道にそれた話に座が和む
病人へ嘘しか言えぬ時もある
正論を言ってまわりを困らせる
マイペースで生きていくにもいる勇気

尼崎市　藤井宏造

癌封じの御神酒いただく列にいる
八十歳うふふ汁粉屋のデート
御蔭様で暖冬ですとリン鳴らす
孤独死も想定内という気楽
ばあちゃんのそのばあちゃんの土の雛

尼崎市　山田耕治

御退位の陛下に感謝謹みて
オイと呼びハイと答える小津映画
三センチ歩幅広げてウォーキング
コンビニで朝のコーヒー飲む散歩
自販機で釣銭取って缶忘れ

川西市　大坪一徳

川西市　山口不動

暖房費節約のため早く寝る
庭の柚絞って今日は鍋とする
小正月華やぎもとめ梅田まで
思いやる新皇后を娘のごとく
三病とつかず離れず生きている

三田市　足立つな子

あと十年埋めつくしたい日記帳
板前の清潔感に酔う私
深入りは避けて挨拶だけの仲
棺の主は見事な態の百二歳
手伝ってほしい気持を言い出せぬ

三田市　上田ひとみ

何ひとつ同じではない春である
痛いとこたくさんあって緩くなる
これくらい越えてきたでしょ去年まで
年上で前向きでその明るさで
何度でも掬い上げるよ君の夢

三田市　尾崎一子

慈しむこころ昭和の女像
ママ美人パパゴジラ子供はパパ似
子がたずねる母さん大阪に来ないか
ふる里の空家対策せまる波
就活へ果敢に挑む春疾風

三田市　北野哲男

古里の無人駅にも春が来た
燕来る表札変ったこと知らず
赤ちゃんの握り拳は花の種
愛想良い新規開業したお医者
諦めることがだんだん増えて来る

三田市　久保田千代

ふくらんだ蕾に母の顔を見る
自然とて無限でないと悟る春
風のような男に惚れたさくら草
女まだ男に賭ける夢を持つ
鼻柱折られてからの人間味

三田市　多田雅尚

雛人形飾った記憶無い家系
復興に願いを込めた撥溯き
更地にも心の傷は消えぬまま
八年の月日で何を学んだか
マイナンバー持たず使わず悔いもなく

三田市　谷口修平

心配は無いと貰った借用書
異常だと思うが普通に暮す基地
延命をされて普通に死ねぬ人
露天風呂猿の混浴見てる月
ぼんやりとしてたら地球温暖化

三田市　野口真桜子

見栄はれば張った分だけ重い肩
熟れすぎた二人雪下の種のごとく生き
涙の数だけ背中と心丸くなる
伸びしろを残して生きる風は凪ぎ
知恵の輪の最後の一手まだとけず

三田市　福田好文

福ちゃんと呼ばれて育つも福知らず
食べ放題その内蟹も絶滅種
自分史は生存中は世に出せぬ
深々と頭下げさす理髪店
背伸びした分だけ肩の荷が重い

三田市　堀正和

ときどきは我家でも聞くホーホケキョ
お水取り過ぎればビールうまくなる
はるばるとギョーザ包みに孫が来る
憧れの一人住いへサクラサク
ワンコインで済む話ならOKだ

三田市　村田博

国宝の仏に触れて夢心地
春の風ペダルを踏めば付いてくる
新入社員にお局様の品定め
表札を出さない家が増えてきた
AIの進化に付いて行けぬ脳

高砂市　松尾柳右子

鯉のぼり喜々と家族の夢弾む
テレビから笑顔授かるひとりぼち
のど飴を欠かせぬ八十路575
デイケアー送迎されて梅桜
カラオケと作句ありがたい老後

宝塚市　丸山孔一

木村好夫ギター聴きつつ牌混ぜる
金銀と湯気にきらめく有馬の湯
日暮れ時早く帰れと寺の鐘
落葉舞う見慣れぬ木の葉樹を探す
ランドセル「おはよう」の声清清し

丹波篠山市　北澤稠民

田舎でも隣の人と久しぶり
米づくり災害くるな祈りつつ
人生の裏を見てきた目を洗う
病院で友と出合ってめし行こう
捨てきれぬ未練を山と積みあげる

丹波篠山市　酒井健二

先輩の破天荒にはよく学ぶ
謙虚だと大統領はつとまらぬ
善悪を問わずススキは揺れている
お試しの人生あればいま一度
旅ならば祭りと映る雪の舞い

西宮市　秋元てる

見てる間に移る世界に立ち竦む
横断も見知らぬ方に助けられ
先ず今日の足の御機嫌確かめて
もう百歳やっと百歳梅雨しとど
各々方政治にもっと〝物言い〟を

西宮市　緒方美津子

にっこりと春を迎えた時計台
ポニーテール揺らして春を蹴る若さ
父になり母になり雲からエール
丸い鼻そして守銭奴いい嫁御
もたついてたらお迎えの舟がくる

西宮市　亀岡哲子

誕生日今年は桜舞うらしい
ママチャリで山坂越えてきた強み
それぞれの校歌に山のそびえ春
うぐいすの姿確認しだれ梅
鏡拭き今日のわたしも磨かねば

西宮市　福島弘子

素朴な味亡母のおはぎをもう一度
六甲が見え出し安堵旅終る
畑の草抜く老父の背に春日射す
点滴のリズムに明日の夢を見る
顕微鏡意外に可愛いスギ花粉

西宮市　福田正彦

億光年銀河に宿る夢無限
緩いなあ全ての平和何時になる
憎悪から未来思考は生まれない
積ん読にプライドないと蔵書泣く
目力にプラス思考が溢れてる

西脇市　七反田順子

輝いて平均台に立っている
ポロネーズ聞いて眠りは深くなり
千五百年楠凛とふるさとに
呑気そう呑気な人がついくる
働いた汗が老後を守りきる

西あわじ市　萩原狸月

大臣のおバカ不安なオ・モ・テ・ナ・シ
知るほどに不満がつのる世の歪み
こつこつを積んで小さき今日の幸
十連休遊べ使えとコマーシャル
見るものがないとテレビを観る無趣味

広島市　岸本清

すぐ切れる人は後先考えず
お花見は車中で済ます花粉症
安倍総理万事グレーで切り抜ける
少子化とともに気になる草食化
物覚えよりも激しい物忘れ

竹原市　石原淑子

平成の象徴艱苦いかばかり
新元号を待つ誕生日無心
美人に撮れますスマホのカメラです
雛膳をかこむ笑顔の喜寿傘寿
チューリップ一番咲きは愛犬の塚

竹原市　岩本笑子

午前五時起きねばならぬ今日術日
休みたい日もあり主婦のベレー帽
後悔はしない薬を三度三度
待って下さい春が化粧しています
負けたくは無い私の杖である

三原市　鴨田昭紀

愛情に満ちた親父の大目玉
婆ちゃんの背中で聴いた数え歌
力んでも組織の歯車に過ぎぬ
これからをふと考える余命表
後ろから見るとにんげんらしいのに

宇部市　平田実男

句のヒント見付けて弾む万歩計
バツ一が生き生きしてるクラス会
妻入院あれもこれもの大変さ
妻入院一人淋しく夜を食べ
お隣が今日も内よりいい匂い

下松市　有海静枝

空気読めずただ立ちつくす不器用さ
散る前は奔放になるチューリップ
めでたしめでたしから大人の童話
まあいいか御浄土までの仮住まい
春うらら花粉対策にて読書

防府市　坂本加代

五を掛けて一〇〇歳になる猫と住む
偏った本が出回るテロリスト
面影を偲んで作る追悼句
逢いに行く恋に恋する乙女なら
もう恥じることなし御浄土は近い

鳥取市　池澤大鯰

花粉症レンズがくもり朧月
カウントダウン雫の音が追いつめる
自己満足マンネリばかり先見えず
草餅が好きな老妻蓬摘む
三日留守草盛りあがり道隠す

鳥取市　奥田由美

ささやきの夢がさめたら無い預金
次の世も一緒にいたい人が居る
千円で半日過ごす映画館
記念樹のサクラが守る留守屋敷
みな逝きて一人ぼっちの寂しき夜

鳥取市　加藤茶人

沈黙は美徳波風立てず済み
団塊は皆貧乏の麦の飯
妻が又過去を持ち出し又怒る
役職の長名心地よく響く
星空に漫画のような亡母は居ず

鳥取市　岸本宏章

いい余生だった平成ありがとう
熱帯の魚が捕れる日本海
丁重に断る老いの社交術
カーナビが教えてくれる現在地
最新の詐欺の手法も知っておく

鳥取市　岸本孝子

雪国が雪掻きせずに春になり
おしゃべりも脳トレもしてボケ防止
悪の芽が絶えることない詐欺の知恵
拝啓と書いて袴着た手紙
老人はぞくぞくしても熱は出ぬ

鳥取市　倉益一瑤

真実を知らぬ幸せだってある
人憎む日の鏡など見たくない
苦労性重箱の隅よく見える
筋道を通せば誰か傷がつく
わかってる嘘を許して雨になる

鳥取市　田中天翔

長靴が出番ないまま春になり
自分チョコ買ってワクワク四コマ目
ぺったんこになってしまった知恵袋
懐かしいキミと呼ばれた青春譜
背の君に街でばったり会釈する

鳥取市　棚田大

日々変わる空を眺めて元気湧く
空からも人生道を教えられ
あせるなよその言いっぷりあせってる
降る雪も俺を鍛えて消えて行く
人生の基地は我が家だありがとう

鳥取市　谷口回春子

老いがきた空念仏も板につく
もろくなる涙血管記憶力
じわじわと疲れしみ出る露天風呂
経験知だんだん底をついてきた
この思い届けとばかり愚痴を詠む

鳥取市　永原昌鼓

あせってもこの世変らぬ高齢化
あせるけど息子の嫁が決まらない
子の笑顔副作用などない薬
さらさらと流れて欲しい血も水も
この腰じゃ役に立たないボランティア

鳥取市　中村金祥

絵手紙に込めた私の人生譜
仮設した家にも入る鬼がいる
平和憲法守る不戦の自衛隊
四コマに喜怒哀楽が溢れてる
儲かるとますます欲が深くなり

鳥取市　夏目一粋

ありがとう労うことは知っている
苦と楽は交互に来るよありがたい
老い二人会話は少しづつ細る
無視という凶器は無言手に負えぬ
墓じまい曾孫が出来て活気づく

鳥取市　平尾菜美

修行する道具ぴかぴか新米さん
夫介護いらいら止める手が欲しい
死の影のイメージ払い介護する
空振りの気配り明日へ抱いて寝る
平常心和むわが家へ辿りつき

鳥取市　福西茶子

介護などへっちゃら馬鹿になればよい
程程は知っていたのにまた過ぎた
喋る食うよろよろ歩きまだ出来る
許すまで時間たっぷり要りました
二拍二礼少し気長になれるよう

鳥取市　前田楓花

百年はもたないと知る足や腰
快晴の空何となくつまらない
汚してはならぬ私の白いシャツ
狂うほど愛せないからワタシなの
やんわりと釘刺す母の知恵袋

鳥取市　山下凱柳

市町村合併過疎化押し進め
人情だけはどこにも負けぬおらが村
話題なく刺激なお無し老い二人
丸くなる背に人生映しだす
どうしたら思い通じるのか妻よ

鳥取市　吉田孔美子

口角を上げても哀れなる皇女
面接だったのかホホホの口紅
やっちゃったしびれが切れて口火切る
お手玉よ女系家族が舞い踊る
ダイヤ婚までタイトルはどうしよう

鳥取市　吉田弘子

範囲内できる幸せ噛みしめる
平均寿命越えた別れに慣れてきた
炬燵守り夫の書棚読みあさる
脳トレの一つソロバンいつも傍
欲張って次は万博目指してる

ため息をもらす影法師を叱る
上見ても下覗いても切りが無い
口止めを頼み弱味を握られる
天動説信じたままに父が逝く
ふる里の頑固がなぜか心地よい

鳥取市　両川無限

自分ファースト他人を上手く愛せない
消費増税予告予告で馴らされる
生きてゆくには年齢と共にパワー要る
天皇陛下御退位叶い安堵され
地震後二年いまだ傷跡抱え込む

倉吉市　猪川由美子

強がりも孫には弱い蝶になる
生きてます自問自答の日がつづく
もう駄目と腹をくくって診察へ
血色はよいが半分死んでいる
プレバトへいろいろ知恵を競い合う

倉吉市　山中康子

お寺さん話が上手仕事です
高野山訪ねて柿の葉ずしを買う
おばあちゃん何かというとナムアミダブツ
信心がゆらりゆらりと寺まいり
草ひきがなかなか出来ぬ墓まいり

米子市　後藤宏之

冬の陽の匂う布団に抱かれてる
議論あれど君が代口にする世代
歳取らぬビデオテープは宝物
友が逝く平均寿命こないのに
人柄のアピール無用滲み出る

米子市　後藤美恵子

直球もくせ球もある酒のくせ
メロディーが心のなかに住む昭和
健康法テレビが言えば直ぐ真似る
忘れずに薬飲んだかカレンダー
飛行機は早く着いても出られない

米子市　竹村紀の治

遂に来た米寿笑顔でノックする
五輪まで生きる楽観先ずは寝る
躓いた石が過信を戒める
他人より自分自身と勝負する
終わるまで緊張続く日が長い

米子市　中原章子

初対面何も言わずに帰宅した
さらさらと水に流して立ち直る
手を合わせ宗派の違う経を読む
賢いか吠えない犬だ老いぼれか
今朝の軽率右左違う靴

米子市　成田雨奇

鳥取県　石谷美恵子

少しよくなると忘れている薬
あせるなよ子には子の考えがある
幸せな見本のような友の家
裏の顔見て見ぬ振りをして上げる
行く当てもないのに予報ばかり見る

鳥取県　斉尾くにこ

だれでもが歌える歌が歌えない
青空でないと笑わないタンポポ
努力とはちがう楽しみの早起き
お手軽なジョークふたつをポケットに
しあわせは何事もなく終わる今日

鳥取県　竹信照彦

朝起き後テレビ体操して十年
新聞を読むのも朝の一仕事
締切りの迫る課題が背を押す
投句するハガキに封書みな手書き
ケータイも持たずもっぱら電話番

鳥取県　細田裕花

風やさしぽかんと遠い山を見る
蔵の中雛人形のロスタイム
北帰行白鳥の顔引き締まる
春なのに俯いて咲く花がある
原因がわかり薬が効いてくる

鳥取県　松川行男

気がかりな沖縄かかえ眠れない
外出を見られているぞ八十路過ぎ
気が早い四月の雪はどうなるか
二つ買う甥や姪への手土産に
補聴器を買うはめになる店歩き

鳥取県　山下節子

時々は自分をほめて老いの主婦
あせっても足も頭もついて来ぬ
好奇心裏をのぞいてみたくなる
うっかりと小銭を持たずバスに乗る
あらくたい会話ゆきかう楽屋裏

松江市　石橋芳山

ぼったくりみたいに雨が降っている
立ち読みのミーアキャットが見てる明日
逆流性胃炎ですからポロロッカ
フィンガーボールたくさん浮いている微罪
まだるっこい話に絡む異邦人

松江市　藤井寿代

いつからか手足ゆっくり畳む癖
ブーメラン明日を信じてサケ茶漬け
ピーポーが走ってこの世姦しい
胃カメラに私の未来覗かれる
終活という宿題が渡される

松江市　松本知恵子

ジャガイモが日陰で芽出す負けられぬ
松江城春の茶店で蕎麦二段
猫二匹残し夫逝き七回忌
捨てられぬ夫のケータイ鳴らしてる
七回忌ふっ切れる頃なんてウソ

松江市　松本文子

どう料理しようか退屈な時間
哀しみを隠してくれる雪が降る
椿ぽとりぽとり逝くなと言ったのに
時代が流れる宍道湖に佇んで
もういいかい　もういいかい誰も返事をしてくれぬ

出雲市　伊藤玲峰

単線のすれちがい駅ドラマ生む
草臥れた右眼二重になって見え
友が逝く春の足音聞こえるに
蛇口全開哀しみ流し歩きだす
遅咲きの紅白の梅祝う如（今年米寿）

出雲市　岸桂子

忘れ傘わたしを待っていてくれた
教育の教と育との肉ばなれ
汚された海に抱かれてゆく夕日
良心に時々肩を叩かれる
ピン札に世間知らずの角がある

雲南市　菅田かつ子

メモ帳と仲良く明日も歩きたい
おしゃべりにおいでと誘うさくら餅
これ見よと烏ステップして通る
会いたいネ電話の声は若いまま
親の丈越す後継が居てくれる

雲南市　松本昌

義理堅い人で過疎地の人格者
ただ生きるそれだけですか医師が聞き
過疎なれば風にゆれてる蕗の薹
赤い花咲いていました事故現場
悲しみは終りがないと手を合わす

島根県　伊藤寿美

「一切なりゆき」その含蓄を噛みしめる
3．11今年も咲いた黄水仙
あれから八年震災遺構見る祷り
わたくしを忘れた老母と日向ぼこ
ソノハナシサッキキイタヨオバアチャン

岡山市　丹下凱夫

曖昧に笑っていつも損をする
よしもとの笑いに馴れて阿呆になり
お笑いが足りないようで肩が凝る
ボク用のみやげに地酒買っている
オレオレの人情劇に騙される

潮目から春の生まれる音がする
行跡をなぞり七回忌の微笑
いまさらに父がほんとに好きでした
腕も掌も亡父の匂いの中に居る
遺影横愛馬の仁と樫若葉

岡山市　永見心咲

梅に目白やっぱり春はやってきた
機械好き人の断捨離もらう夫
これからは夫しか叱る人いない
人形に喋り過ぎだと叱られる
叱られた父母に会いたい古稀の春

岡山市　前田恵美子

寄りかかる愛なら僕が支えます
幸せにする権利なら僕が持つ
完全擁壁に眠っている君
非常識ほど面白い句ができる
簡単に干支のイノシシ駆除される

笠岡市　藤井智史

名も知らぬ輸入の花が店かざる
役立ちたいと友の愚痴きく寒椿
歳のせいにできぬ失言追いかける
お散歩も徘徊と心配される
楽しいこと悲しいことも霧の中

岡山県　高岡茂子

春光の瀬音に伸びて行く歩幅
幸せのおすそ分けです春の虹
茹で玉子の黄身は揃って臍まがり
がらくたの歴史は知らぬ天袋
いざと言う時を頭に入れて寝る

岡山県　田中恵

無人駅風に送られ迎えられ
天窓の明かりの下に老い二人
大船に乗った気にさす姐御肌
庭いじり花の悩みも聞きながら
風船と追っ駆けっこをした野原

岡山県　山懸のぶ子

いつだって私信じてくれた亡夫
弟妹と競った父の肩車
二泊三日あれが最後の夫婦旅
思い出の人の名を見る受章欄
母娘旅値切って買った萩茶碗

東かがわ市　川崎ひかり

わらびぜんまい疑問を持って顔を出す
火の車ハンドル捌き上手い妻
あんた誰妻に言うかも知れません
一強多弱で平和です我が家
やがてもう帰るキップのない旅路

松山市　古手川光

にっこりの顔を鏡へ日に幾度
不完全燃焼だった夢の中
頑張りは止せと支援の手が届く
有難く上手にプロの手を借りる
川柳へ今からお礼言っておく

松山市　宮尾みのり

どの窓枠も額縁一幅の絵画
庭園一望一等席に小カフェ
藁ぼっちに抱かれほっこり寒牡丹
また買ってしまった好きな牡丹苗
出雲大社に着いた途端に二重虹

西予市　黒田茂代

福助の足袋は近頃見かけない
四十年うんざりしても側に居る
白内障別れたひとがよく見える
難民のくらし支えるワンコイン
農民の実り邪魔する戦闘機

高知市　小澤幸泉

静寂の夜に聞こえる鳥の声
考えた時から悩むことになる
野良猫が眼を逸らさない初対面
じっと耳澄まして初音聴く二月
新しい明日を暗示して眠る

土佐清水市　辻内次根

美人だと言われお化粧長くなる
避けているのに近寄って来る苦手
祝日に国旗掲げている勇気
痩せ我慢少しは出来る程の老い
願わくば盃伏せてではさらば

唐津市　坂本蜂朗

独裁と独占埋まらぬ溝がある
百日の祝いへ祖父が編む草履
四大奇書三冊までは読みおわる
街の灯にとけてアリバイ無いひと夜
骨までも愛してなんて欲ばりな

熊本市　杉野羅天

ノスタルジア遠いあの日の朧月
ハチマキにベレーどちらも似合います
ほどほどもいいなあ古希の酒と恋
二十歳の手これを盛りと美しい
台風も嫌　地吹雪はもっと嫌

熊本県　岩切康子

平成と同時退職まだ生きる
繰返す肌には毒の化粧する
良くないと解っているが風呂即寝
台所立てば亡母さん話する
重ね着と靴下二枚抜けて春

北九州市　小松紀子

我慢がならぬ幼児虐待の親
なん時も大丈夫だいじょうぶ君へ
ウィンドウ曲った背中ちとのばし
鏡みる今朝もいい顔みがきます
骨密度一つ上がって軽い靴

西海抄

（つづき）

岡山市　大石洋子

右を見て左を見ても渡れない
ヒヨドリが梅をけちらし春がくる
春風をまともに受けてざんばら髪
あとはよろしくそんなシナリオ知りません

岡山県　大杉敏夫

通販がまた年金を剥いでゆく
七十路は下座へ座るおらが村
まだ元気八十路をすぎた角隠し
平凡な丸いお鼻に惚れました

岡山県　折鶴翔

夕焼けが明日の希望を聞きにくる
終電へひたすら走る千鳥足
菜の花を嫌いな蝶もきっといる
全没が明日に繋ぐ潤滑油

竹原市　土井輝恵

喧嘩して地蔵に愚痴を洩らしてる
通販のCMに乗りゴミ増やす
アナログの私に用事回らない
ふっくらの風に包まれ夫婦雛

竹原市　六田半徳

白サギは河口を目ざし高く飛ぶ
庭で咲くしだれ梅に鳥が来た
我がカープ今年も元気よろしくね
夕ぐれに月と金星西の空

三原市　笹重耕三

人間の欲見返りを期待する
また欲が出ましたひとつ年を取る
ひらめきが欲しくて爪を切っている
潤滑油足そう四月のカレンダー

山口市　中前幸子

春の絵に葬めいている乱気流
遠い日の記憶へ潮騒のロマン
鼻歌うたう音程はまだ確か
敗北の背なひょっとこの面吊るす

第172回 大阪川柳の会

日時　6月5日（水）午後1時開場・午後2時締切
場所　大阪市北区梅田　駅前第二ビル5階
　　大阪市立総合生涯学習センター　第一研修室
宿題　（各題2句）
　△「夜明け」赤井　花城選　△「午　後」大西　泰世選
　△「まるで」大久保真澄選　△「弱　い」森中惠美子選
会費　1000円
欠席投句　（8句切手5枚同封）6月4日到着分まで　会員に限る
会員募集　年会費千円　会報を年6回奇数月にお届けします。
〒532-0025　大阪市淀川区新北野1-3-4-706
本田　智彦　宛

川柳塔の川柳讃歌 ⑫

上方芸能評論家　木津川　計

蛇行した水だ優しい味がする

伊達郁夫

上方落語の「壺算」は水壺をめぐることばの魔術で訳が分からなくなる咄だ。明治年間までどこの家庭にも水壺があった。水道が普及し始める明治30年代まで町中（まちなか）では井戸水を使った。如何せん海が近いから塩気がする。だから飲料水を売る水屋が忙しかった。その水を溜めるのが水壺だった。水屋は淀川から水を汲んで売った。淀川は京都から蛇行して流れる。だから「優しい味」になった。郁夫さん、人間も蛇行の人生で優しくなるのです。

押さないでまだまだ未練あるこの世

両川無限

大阪一代の洒落名人・乙田東洋司は「幼稚園児が乗っている。押さないで押さないで（幼いで幼いで）」のことば遊びを作った。が、この句は年寄りばっかりの大集団を「押さないで押さないで」と叫んでいるのだ。高齢化社会とは65歳以上が人口の21％以上をいうのだが日本はすでに28・1％、2025年には30％が予測される超高齢国だから年寄りは溜まる一方だ。無限さん、「未練あるこの世」は押し合いへし合いです。押さないで押さないで。

申し分のない人だけど妻がいる

前田洋子

「お座敷小唄」がヒットした60年代、「お金も着物もいらないわ／貴方ひとりが欲しいのよ」を早速に変形して「お金も着物も欲しいのよ」と祇園の芸者連が唄い出し、日本一の花街がグレードを下げた。その小唄は「好きで好きで大好きで／死ぬほど好きなお方でも／妻という字にゃ勝てやせぬ／泣いて別れた河原町」と嘆いた。察するに洋子さんの娘さんが恋をした。「申し分のない人」だけど「妻がいる」と判って洋子さんも娘さんと嘆く。

晴れならば参加しますと言う返事

堀正和

「一人語り劇場」を主宰する私である。口演日の天候をそのたび案じる。雨が降ると確実に参加が減る。ときに講演に行く。同様に案じる。私自身、参る予定の行事でも雨天ならやめることがある。「生きてたら参加しますという返事」もある。なにしろ80代は一月ごとに老化するから数か月先の約束も危ぶまれる。日一日死に向かう90代よりは余裕があると言い条、半年後の約束は私も恐る恐るである。正和さんは雨や槍が降ってもの意気で。

夕焼けにギュッと抱かれてまた明日

平井美智子

「はなれ瞽女おりん」はある日、手引きしてくれる大男と川に浸り、水浴している。背景は美しい夕焼け。おりんが立ち上った。上半身裸の岩下志麻の乳房が二つ見えた。大男が叫ぶ。「おまん、そのまま、じっとしていりゃ。夕焼けに染まって仏さまのようじゃ」。夕陽を背に茜色に包まれた女人は仏さまになるのだ。美智子さん、夕焼けに抱かれた貴方も仏さまです。僕はただ合掌するのみです。

定年後延長戦が待っている

坂本加代

高校野球が12回で延長戦ストップ、13回から無死1、2塁で続行するタイブレーク制になって面白くなくなった。昭和8年、明石中対中京商は延長実に25回、中京商が1対0で勝ったが両投手とも完投だった。昭和33年、西鉄ライオンズの投手・稲尾和久は3連敗後の4連投で日本シリーズ優勝！「神様仏様稲尾様」と称えられた。当節は選手を大事にして無理をさせなくなった。が、人の世にはどこまでもの延長戦が。加代さん、これは辛い。

自選集

小島蘭幸

医師も驚いた昏睡から覚めた
奇跡です一時帰宅を許される
一時帰宅命縮めるかも知れぬ
一時帰宅の母が笑った亡父が笑った
一時帰宅の母の覚悟が見えてくる

津守柳伸

三寒四温神にゆだねて恙無し
足音が響くみどりとつくしんぼ
現実を把握しかねている湯舟
菜の花がバックに豪快な笑顔
梅見頃にわか詩人があちこちに

都倉求芽

認知症にもなれずもの忘れ健在
ある時はコントも混ぜているひとり
ひきこもり句作今日もお昼抜き
明日は明日今日が大事と米を研ぐ
紅椿こぼれて早春の日を集め

土橋螢

待たすこと待つこと平気ビール飲む
梅雨ごもりにくまれ口を言われつつ
春灯に踵を返す女あり
燃え尽きてきりしまの緋の幹太し
美しい女と歩く花吹雪

西出楓楽

春炬燵昔ばなしがしたくなる
休肝日日が暮れるのが恐ろしい
なるようになってわたしの今がある
うつらうつら目下宇宙と交信中
着脹れてネガティブになる物思い

仁部四郎

新年度おいらも試す離れ技
サーカスも人間がする離れ技
顔つきをポストで変える離れ技
死ぬ時をえらべた彼の離れ技
カタログに合わせて生きる離れ技

春満開遠いポストへ足が向く
何人もの百歳に会う川柳誌
聡太君師匠と競う幸運児
神様が仲人だった妻と僕
マンネリという幸せな日をつい忘れ

前　たもつ

老いた樹を思わず撫でてみたくなる
散ってゆく桜無念なことだろう
白髪にふわっと止まる桜花
すれ違う女から花の香が洩れる
城山にもう登れない歳になり

政岡日枝子

私を甘やかしすぎる私
私にいつも同情してしまう
私を過信しすぎているのです
私といつも葛藤しています
私を褒めて叱って慰める

三宅保州

津軽残照　食は細いが生きている
人ひとり居ればドラマが一つある
皮を剥くミカンの愚痴を聴いてやる
切り札の涙に弱いお人好し
出る杭の悩みを聞いている銚子

福士慕情

下心ばかりで春の絵が画けぬ
一滴の水に詩あり回復期
独身の日日目標高くする
一歩ずつ歩けば景色かわる奈良
錯覚のまんま一緒に濡れる傘

宮西弥生

失言をしても居座る鉄面皮
お粗末な統計に乗せられている
政官産にまかり通っている不正
インフルとハシカについで花粉症
白内障手術をしても飛蚊症

村上玄也

ちょっぴりの欲を溶かした春の色
擦れ違っただけ僅かな後れ髪
染み付いた噂話を削ぎ落とす
侍は踏ん張れ逃げるのは卑怯
頼りない洗濯挟みよく弛む

森山盛桜

遠回り
ブレーキの多い私の春でした
一度だけの見合は単線のレール
子を二人育てて道も見えてきた
そして逢う椿と大切な仲間
そして引返すよりも選んだ遠回り

八木千代

毎年想う今年の桜格別だ
春寒しふるさとにない我が生家
つぶやきを記す鉛筆ふところに
日本のこれから一票を握りしめ
現実は何も変らぬ十連休

山本希久子

付き纏う影を刻んでいるナイフ
アポ電に小銭隠している財布
極楽の裏を見に行く一人旅
仏壇の酒を盗んでいるネズミ
ゆっくりと夜行列車で行く白寿

板尾岳人

まだ嘗めているたらればが溶けぬから
考え過ぎるとお茶まで不味くなる
ポイントカードに病名を溜めている
負けてばかりいる本気になってから
残高はゼロでも可能性はある

川上大輪

風みどり少年少女眉上げよ
春や憂し　拓郎　森魚　陽水も
ぶらんこを漕ぐ真夜中の風小僧
夢に逢う白馬の騎士はちちだった
夢は夢で終わった青い薔薇だった

木本朱夏

鉛筆を削りに立って吸う緑
指揮棒の向こうに森の小鳥たち
決め球も見抜くさすがは強打者だ
五線譜に連なる春の音符たち
巣立つ子の視野に大草原がある

斉藤劦

まだ古稀と思っていたら喜寿だった
ドレミドレミドレミファソ～と出るツクシ
午後五時のチャイムに腹がグーと鳴る
あたたかい歌を奏でる飯の湯気
二次会もいいがフラフラせぬように

新家完司

風景遺産水田のうつくしさ
金の卵と呼ばれたこともありました
総論賛成各論反対　野暮
ライバルが沢庵噛んでいる負けた
古希一歩手前で抜けるあれやこれ

髙瀬霜石

生かされて今日も似たよな日を畳む
巡る季の中で違った風に会う
難民も移民も持っている命
百年の人生生きる上手下手
節々の痛みエールとして生きる

竹治ちかし

句集の森

『中原諷人遺句集』

中原諷人（なかはらふうじん）

花になり実になり踊り抜く系譜
一番重い水甕だいて生きている
酸素携帯旅人の絵となりぬ
強かに生きる三重苦もいのち
一行の詩人に長い旅がある
生きて今あり黄昏れた身を憶う
滅ぶものの声を風には任せない
夢百夜あやして母のまんまるし
この辺で黄ばんだ本を読み返す
往く背なに太陽のこえ人の声
腹式呼吸している大仏さんの前
流された時間に僕が浮いていた
誇らしゅう枝垂れ櫻の笑いだす
臍という尊い場所に油断せず
夕焼ける森へ翼の子守り唄

（2016年9月25日　発行）

温故知新

小出智子川柳集『蕗の薹』から

春ほどに真正直に生きられず
にぎりめし母の祈りのかたちして
男には裸になれる家があり
人を指す不遜な指ももちあわせ
それは初恋自転車で坂登り切る
鏡拭く私を偽らないために
思いがけない楽しさがある冷蔵庫
母親に九月の解放感がある
幸せすぎて風鈴を二つ買う
夕立去る人に訣れがあるように
何でも話せるひとと夕べの柿を剥く
ホームドラマの母に共鳴してしまう
安心をしてもいいかい息子たち
ほどほどというむつかしい塀があり
お隣の犬も他人に違いなし
西瓜割るときの期待が今もある
俎板の裏をいまだに疎んじる

西出楓楽選

気の合った人とどら焼半分こ
道中が楽しかったねバス旅行
召し上がれの前に戴くそんな仲

松山市　郷田みや

添え木した垂れ桃にも春が来た
菜の花は分かっています風の色
未決箱もう覗かないことにする

黒石市　北山まみどり

雪解けがすすんでいます雨の音
まだ少し冷たい雨が春を呼ぶ
ことさらに静かにしみる雨の音

三田市　中山昭美

庭先の芽がおもむろに顔を出す
木の枝もにぎやかになるさえずりに
これからを託して土のあたたかさ

どのサプリ効いているやら元気です
売り言葉笑顔で包み倍返し
ご遺影の笑顔にそっとありがとう

飴一つもらってあげてもう仲間
話合い面子もち寄りまとまらず
日めくりをめくってるので日が分かる

大阪府　奥野健一郎

信念がないから軸が揺れ動く
白手袋添えれば書画に箔が付き
ついヨイショしたらたちまち図に乗られ

趣味の会みんな逃げ腰幹事役
のほほんとしてれば誰も怒らない
沈黙が見事オーラを醸してる

豊橋市　小松くみ子

悶悶と羊数えた夜もある
ぬくぬくと二度寝ができる日曜日
時どきは齧ってみたいかりん糖

見くびるとチクリ刺すとかボケの花
匂いから春を知らせる沈丁花
気休めの効果も信じ飲むサプリ

四月待つ眉大人びて社会人
デジタル時計ゆとり一秒許さない
父母祖父母夢に出てきた何かある
取り敢えず無茶はするなと言うことか
同好会一人増えても一人死に
人生の後半直球で勝負

神戸市　米田　利惠子

年重ね薬にサプリ手離せず
改元だ心ひとつに世直しを
かけ出しの川柳作家気どってる
世直しができるといいなみんなして
思い出に生きる勇気をもらってる
川柳に魅せられ平和主張する

出雲市　黒目　ひでお

青春の鍵を開けてる同窓会
落し穴忘れて走る有頂天
素人が知ったかぶりで大火傷
嘘ひとつそれから全て狂いだす
覗いたら鍵穴からも目が見える
ありがとうついにあなたも流れ星

岡山県　小野　美那子

十連休サービス業は十連勤
新人類言われた俺もベテランだ
卒業は新たな道の始まりだ

吹田市　岩口　のぞみ

桜道ランドセルが歩いてる
運動会レンズの中に咲く笑顔
いつからか度を強めても字が読めず

奈良市　加藤　江里子

薄氷を見つけて夫子に戻る
聞き流す術を知ってる強い人
机の下盲導犬も講義聴く
色褪せたノートに綴る独り言
窓ガラスに激突してる猫の恋
電子音いつもどこかで鳴っている

境港市　中井　虎尾

平成は戦ないけど荒れて去る
春の歌唄って波が浜に寄る
牛の目の中をのぞけば俺が居た
春の雨ぬれて行こうかやめようか
八十路来て後ふりかえりゃ何もなし
さようなら二度ない今日が去って行く

三田市　九村　義徳

定年後妻が指導者平和です
今日もまた妻は元気にタクト振る
羽ばたけと巣立つ背中に里の風
立つ位置を変えれば見える妥協案
復興へ絆を杖に立ち上がる
最下位で両手をあげてゴールイン

自分では可愛いもんだと健忘症
太陽の笑顔をもらいやる気出る
楽しさをかみしめている老いの坂
独り居も寂しい想いしていない
八十路まで生きてこられた今日の幸

松江市　山根邦代

気楽さは等身大の人と居る
考えておくを本気にしてしまう
全没の今日は私の誕生日
ユーモアを足して心を軽くする
ボールペンだけは拘りのを使う

大洲市　花岡順子

恋だって出来そうボクの余命表
自分史で無口なボクはよく喋る
凍りつく月を見ている隠居部屋
冬の水ゴクリ呑んでる老い一人
いつだってボクには音のない拍手

阿南市　小畑定弘

転ぶなら上手にころべと介護士は
声が出ぬ何たることか声が出ぬ
発声法筋肉萎縮声を出せ
草餅のゆかしさ祖母の手作りで
庭の木に鶯鳴いて春を呼び

唐津市　岩崎實

潮満ちるときの話が面白い
じわじわとくる奥行きのある手紙
こっそりと予約オアシス行きのバス
声を聞きたくて無口になっている
風化せぬように禁句を抱いている

佐賀県　真島久美子

隅っこに個人差ありと効能書
老いをネタに詠んでるうちは元気です
飯仕度忘れて妻の長電話
リモコンは何処と探せば腹の下
クロッカス土の中から春告げる

富士見市　中島通則

かくれんぼ大事な書類探す日々
煽てられ孫の弁当作ってる
クローバー四つ葉探してみたくなる
老犬も花粉症かもくしゃみする
神様はどうして差別作ったの

横浜市　巌田かず枝

健やかになれる答に汗がある
祝うこと多く持ちたい人生に
その先に予約がしたくなるロマン
私を洗ってくれる大自然
余裕持ち時間と対話したくなる

名古屋市　冨田末男

大阪市　柴本ばっは

疑いを微塵ももたず呱呱の声
いじけない性格孫に残したい
残り火の如く母の血娘や孫に
いらっしゃい五月の山が呼んでいる
一と畝は花も咲かせている余裕

大阪市　降幡弘美

憎むより愛する方が幸せだ
ドキドキしつないだ手から静電気
家中を探しふと見りゃ足元に
柵の中ゴリラは客をどう見てる
花見して夜は花粉に悩まされ

大阪市　森田遊子

女だってオオカミになる今日の月
夕暮れになると一気に歳をとる
朝ごとの鏡に笑いかけてみる
秋よりも春の愁いは気だるくて
彼岸の人微笑むだけで答えない

大阪市　森廣子

昼寝から覚めてもやはり一人きり
思うほど他人優しくありません
誤魔化して何とか通り抜けた穴
私の本音草の根元にそっと置く
偽装して本音がどれか見失う

大阪市　横山里子

釘煮着く今年限りと友も老い
初音聴く何年ぶりの山遊び
大師堂御詠歌流れ春彼岸
過ぎた日は追うまい先が見えてきた
故里に誰もいなくて墓じまい

池田市　上山堅坊

無事目覚め新たな命もらう幸
君の傍ほんに明るい風が吹く
美しい虹も見逃すサングラス
ボクと医者パソコンだけが繋いでる
お得ですと言われついつい手が伸びる

池田市　太田省三

クイズにも東大生のテレビ馴れ
すき焼きをネギから食べる戦中派
リフォームは手すりが続くトイレまで
押し花の重しにピタリ広辞苑
病室の匂いを消した桜餅

貝塚市　吉道あかね

花丸が多い四月のカレンダー
オブラートに包む話は夫婦にも
子がなくてゆらりゆらりと行くこの世
十人十色嫌いな色と好きな色
古稀の肌まだまだ水を弾いてる

新元号へ人生をやり直す
夕焼けに昭和を思う歩道橋
卓袱台が家族を丸くした昭和
無口になった遺影へ話す内緒事
丁寧に今日もひとりの米を研ぐ

門真市　坂本星雨

頑固さも消えて白寿の顔になる
蹲けばチコちゃんのごと叱る石
なんやかや一息入れてばかりいる
土を割り小さな春が躍り出る
取り込んだ布団が放つ陽の香り

河内長野市　中島一彌

体重を計る時だけ超薄着
選挙時の議員の顔は別の顔
孫の友挨拶くれる通学路
トランプは政治家よりもディーラーだ
同じ鍵三つあっても見つからず

高槻市　三谷白黒

前のことむしかえされて大ゲンカ
逆らえず妻の好みを着せられる
芯の弱さ見せないままに母は逝き
誤魔化しの言い訳じっとり脂汗
老いの恋すぐに火が付きすぐ消える

豊中市　貝塚正子

いちごケーキが一番目立つショーケース
タレントばかりで盛り上ってるテレビジョン
よその孫名前聞いてもすぐ忘れ
ハムスターの名ぽちと付けてもかまわない
なまはげのせいで悪夢をみる子供

豊中市　木藤こみつ

良い知らせ弾む心を隠せない
期限切れ勿体なくて火を通す
利き酒に考えるふりして買わず
肉じゃがで胃袋つかむ自信あり
朝刊より折込チラシ待つ女房

豊中市　齋藤奈津子

年金者元気なだけが金儲け
妻だけが定年延長待ってます
愛の鞭無くなるこの世恐ろしさ
はやぶさよ無事持ち帰れ玉手箱
災害がとうとうスマホ登校へ

八尾市　田邊浩三

統計不正ないか我が家の年度末
プレバトの句を聞き我が句ヒント得る
もうと未だ繰り返される震災忌
長寿国光と影の困窮者
浪花の乱悪知恵使うクロス選

八尾市　前田紀雄

大阪府　畑中節子

一人居の一日は長く季は早い
散歩道草木も春のロマン追う
野良仕事まだやる気あり農具買う
太陽が元気出せよとさそい出す
旅帰り畑が私を待っている

神戸市　斎藤隆浩

一日一句作ると決めたお正月
出不精が心ウキウキ句会の日
僅差でも勝ちは勝ちだと奢らされ
シルバー割元が取れないバイキング
酌み交わす相手が欲しい一人旅

神戸市　山根弘華

食卓で愚痴を聞いてる青リンゴ
我がままに生きて卒寿の坂をこえ
さくら咲く返事待ちつつ指を折る
あこがれのハワイ遺影を連れていく
本心を明かさぬままに友が逝く

尼崎市　清水久美子

篤志家の寄付でオープン尼崎城
受験子を一服させる夜泣きそば
愛情に飢えて握手もハグもする
昼寝して夜通しビデオ観る日長
わんどにも跋扈している外来種

伊丹市　延寿庵野鶴

ジワジワと花粉が私食べに来る
ファゴットで盛り上げているバースデー
相槌を打っていずれか返事待ち
瘡蓋の破れに覗く身の不覚
生き様の轍へ夢の種を蒔き

篠山市　久保木剛

ひと言で同郷と知る国訛り
生意気にいつ覚えたか孫が酒
健康に注意と書いて売るタバコ
聴診器あてて町医者希少価値
諍って罪滅ぼしの風呂掃除

三田市　森玲子

孫見せについでに娘羽根伸ばす
孫見たさ両手に荷物お昼付き
待合いは右も左もマスクマン
暇よりも忙しいのが私好き
寒い日は時計横目で二度寝する

宝塚市　太田としお

お医者さま老化ですねとすっと言う
臆病が過ぎてやがては引きこもり
サッカー応援まるでプロレス観るように
お金は恐い人の気持を狂わせる
同じなら笑ってゆこうあの世まで

シンプルな暮らしの中に夢を詰め
手間かけた料理五分で空となる
手作りの明石たこ焼昼ごはん
赤い実をムクドリの群れ食べつくす
ひとり言くよくよするなあわてるな

奈良市　尾畑なを江

昨年の猛暑のツケは杉花粉
犬猫もお猿さんまで花粉症
花粉症マスクの娘皆美人
四島を追う日本は二島得ず
改元の後に待ってる消費税

生駒市　児玉規雄

凛と咲く白梅ひとつ冬を脱ぐ
生きるため通うスーパーコンビニへ
春風に色鉛筆が踊りだす
道端も春だたんぽぽイヌフグリ
曖昧でいいの正せば角が立つ

和歌山市　倉橋悦子

新元号どうなりますか日本は
おだてられ腕まくりする台所
快晴に猫も私も天日干し
年金日今日の財布は平和です
背伸びして二ミリ身長取りもどす

和歌山市　定松宏枝

延延とエチュードだけが続く恋
三センチ身長低くなっていた
震度四咄嗟に猫を抱き締める
電話鳴り手櫛で直す乱れ髪
プライドを捨てたらお腹減りました

和歌山市　西川千鶴

かすみ草主役脇役ハマリ役
レム睡眠いっそ徹夜を選ぶ闇
かくれんぼあえてわたしは鬼でいる
いささかの有縁でライン続く仲
氷ごと時間も溶けるハイボール

和歌山市　まつもと（松本雅子改め）もとこ

女子会になっても続くクラス会
春色のちらし寿しです仏さま
バランスが微妙に崩れ出す老化
たまに食べるコンビニ弁当は美味い
いろいろなドラマが隣近所にも

和歌山県　森下よりこ

気兼ね無い時間が今日の宝物
眠れない夜色あせた羊達
人間は弱いくらいで丁度良い
矢面に立って男を磨いている
写真にはまともな顔で起立する

鳥取市　山野すみれ

リラックスし過ぎて一歩遅れとる

倉吉市　大羽雄大

悠々と構え見せない火の車
蹟いても転けない力千鳥足
鯛焼きを頬張りながら春の町
啓蟄に合わせ芽を出すチューリップ

倉吉市　宮田風露

ロボットが人間支配する予感
訃報続き年金目減り先細る
川柳と出合って老後が潤い
捨てた恋欠片が胸でくすぶって
逝く時は何も彼も捨て灰になる

米子市　伊塚美枝子

ポカポカの陽気さそわれ土筆出る
ふくらんだ蕾見上げて待つ開花
春風に微笑み残し散る桜
検診日体重計はパスしたい
病んで知る人の優しさあたたかさ

米子市　生田和之

雪のない一月二月春早し
クラス会欠けた友増え想い増え
自転車が玄関先で朽ちて行く
妻の愚痴罪は俺だと突き刺さる
ダメ虎を見捨てて逝けぬ因果な身

後期高齢引き立て役に徹してる

米子市　野川宣子

味は次インスタ映えのキャラ弁だ
昭和平成支えてくれた一升釜
まるい背を鏡が正す寒い朝
忙しいなんと便利な言い訳だ

松江市　相見柳歩

疲れない君の励まし受けてから
ささやくと「大きな声でもう一度」
ときめきを重ね重ねて顔のツヤ
消費税なくす党には票入れる
急いでも光の速さには勝てぬ

島根県　原徳利

丹田のツボを温める熱い燗
雀の子泣いた分だけ餌貰う
手相など信じるものかじっと見る
心臓に直接貼れぬ貼り薬
フルコースよりもB級グルメ旅

瀬戸内市　宮宅比佐恵

ひ孫の手夢を握ってはなさない
寂聴の法話聞きつつ寝ています
春ですね私のハートピンク色
天命をふわりと生きて花見する
幸せと思えば幸せ寄ってくる

岡山県　藤澤照代

鏡ふく明日も美人に映るよう
撓むこと知らぬ竹すくすく育つ
内緒事たっぷり聞いた古時計
ふるさとのさかな銀色うみのいろ
今日の顔つくる秘術の化粧台

広島市　田桑恵子

尾道を恋うる碑ありて芙美子像
押し入れに今年も寝てたお雛さま
来季こそお招きします陽の座敷
喜寿祝いたまにはいいか子の散財
けつまずくやはり歳だと知らされる

広島市　松尾信彦

言い訳を見つけてからのリラックス
価値観に忖度ありてよき夫婦
鈍行の窓に飛び込む里の春
ともすればいつか役立つ皮下脂肪
気がつけば干しただけでも名は珍味

尾道市　小畑宣之

スーパーに石焼き芋の香が満ちる
土竜叩き五歳の孫に敵わない
到来の木の芽を和えて吟醸酒
土を掘る蛙飛び出すすまんすまん
毛髪も抜ければ植える時代なり

尾道市　日谷寛

両手ひろげて逢いにきました花時計
両手ひろげて許す愛と憎しみ
両手ひろげて掴む恋の星屑
両手ひろげて受け入れている誤解
両手ひろげて見送る母の思いやり

竹原市　若年幸子

ひばりの唄昭和街道まっしぐら
貧しさも贅も知ってるアプレです
夫婦喧嘩猫も顔色見比べる
登山鉄道笑顔弾けて軽やかに
春彼岸君偲ばせる沈丁花

府中市　岸田武

冬から春神のシナリオだと思う
春耕の遠目に赤のトラクター
芽吹かせるためか春雨降りつづく
さりげない親切だから沁みてくる
しばらくは掃かずにおこう落ち椿

山口市　青木隆子

十連休我が生活に変化無し
胸襟を開き優しい助言得る
ひと息に階段駆けた日は遠い
笑う叔父亡父の面影そのまんま
亡き父に導き頼む迷い道

余命表知りたい知りたくないような
惚け防止アンテナ高く高く張り
何もない日記何にもない平和
空白が続く定年後の日記

西予市　井関　はるえ

ばあちゃんの軽四キティ揺れて行く
グルメにはついてゆけない昭和人
うまいかいほかの言い方言うてみて
真夜中にごそごそ起きて一句メモ

高知市　三谷　松太郎

年相応しみしわそれでいいじゃない
メーテルの銀河鉄道夢いくつ
久しぶり孫はお絵描きそっぽ向き
青春の欠片がひとつ写真帳

福岡県　本田　さくら

今はもうスタイル作り金次第
嘘ばれる寝言で知った胸の内
咄家の最後の落ちでほろり泣く
気持ちだけ前に進んでもつれ足

沖縄県　あら　さくら

サークルは生きるくすりと百五歳
十年目薄紅付けて初桜
幼な児と共に成長若返り
平和連れ新元号のお迎えを

沖縄県　禱　モモト

時代かな遊びもネット引き籠もり
知性的メガネはずせば野性的
憧れのヒーロー今も胸の中
意地張ったそれも人生糧となる

沖縄県　下地　香代子

雨の色透明傘がさらけ出す
家中のめざまし時計六時さす
チョイ右よむずむず背中かいてくれ
はねる雨素足にからみ靴の中

沖縄県　宮　すみれ

背にカイロ腹に焼き芋津軽冬
懐の大きい奴についてゆく
種火なら星の数ほど抱えてる
津軽にはリンゴ訛の褒降る

弘前市　髙森　一呑

それはそれとして達磨に目を入れる
残されたものは似合わぬ服ばかり
時々行ってみる忘れたい場所へ
食べて寝て不器用ですはないでしょう

仙台市　月波与生

尻尾振る猫を布団へ入れてやる
調律の乱れた声で張る虚勢
木は見えて森が見えなくなるも老い
清流で洗ってみたいほうれん草

白河市　鈴木　たけし

千葉県　廣瀬良磨

平成に残したものが何もない
着地点決まらないままジャンプする
願い事鏡だけには打ち明ける
へそくりを予定通りに貯めている

横浜市　川島良子

オレオレを沈黙させた合言葉
変装保釈またも炎上するメディア
焦るほど見失ってく平常心
お勉強嫌いだけれど皆勤賞

静岡市　渡辺芳子

私であり続ける事心して
その昔三人娘も今はババ
三人の信じる友で幸せを
九十年変らぬ心電図にタダ感謝

名古屋市　山本三樹夫

花冷えに燗酒うましするめ焼く
ファンタジー追えば追う程逃げる影
深緑の霊気で心禊ぎする
神経をチクチク攻める嫁姑

江南市　脇田雅美

氷張るメダカ気になり割ってみる
狭くてもカプセルホテル無になれる
金と時間独身貴族余裕あり
褒め上手人を動かす苦労人

豊橋市　西郷紀美代

朝ドラに合わせて起きる老いふたり
なんにでも面白がって希林流
孫の留守淋しさつのり増える酒
孫と風呂ふたりで叩く腹太鼓

京都市　櫻﨑篤子

逢う度に大人になって行く孫よ
遠く住む孫にもちゃんとお年玉
新年号世間が明るくなるように
ワインなど呑んで祝おう新年号

舞鶴市　伊藤恒

籤運はないが見てくれ美人妻
るんるんの時もあったか爺と婆
女房がイエローカードをちらつかす
子供から小言言われて惚けたふり

京都府　北野クニオ

春場所が難波の町を盛り上げる
現状で満足すれば進歩なし
受験期は神様多忙寺お暇
受験生滑る落ちるはタブーです

大阪市　松田聰

忖度や虚偽がはびこり不信増す
民主主義どこに行ったか自民党
自民党三回生は困りもの
寄りそうと軽い言葉で民意無視

春が来て食事の楽しみちらし鮨
学校へ何故行くのかと子の疑問
国会もデートも遅刻許されぬ
大相撲新大関の出る期待

大阪市　前川善之

セーターを片づけとかな夏が来る
冬帽子深々かぶるノーメイク
国民を苛める政治子に連鎖
雛仕舞う和室で香るナフタリン

泉大津市　助川和美

目覚めなさいと窓で囀る春の使者
春の野へ誘われ少女脱皮する
樹を響かせていっせいに咲く桜
励ましの風を集めて突き進む

河内長野市　原熊知津子

田舎暮し道頓堀は異空間
一万円崩れ財布が厚くなる
鉛筆で書いては消して育てる句
見栄を捨て背筋伸ばして若返る

河内長野市　穂口正子

小四が白黒つけたプロの道
都構想政党意地の泥試合
スーパーのカートはわしの押し車
地震保険半信半疑又更新

河内長野市　渡邊修

老いの坂悪気ないけど加速増す
偶に角出し夫操縦効き目有り
ぼんやりだが財布のひもはしっかりと
知ってるが知らぬ振りする思いやり

堺市　楠井輝子

一言が心の闇を光らせる
二日酔い飲んだ相手が悪かった
価値観は時代と人で様々に
調べ事使い古した紙の辞書

堺市　羽田野洋介

禁煙中淋しき口におやつ責め
夕食のおかずを聞いて酒種決め
鯖缶も人気出すぎて品切れた
オペなしでこのままあの世に行けるかも

堺市　古川光雄

カジノから生れるものは依存症
在職日長くなるだけ民は泣く
あの人は怨差の怒り聞いてない
不況でも統計いじり好景気

堺市　大和峯二

子はいても孫なくちょっと味気ない
諦めずやりたい夢が良薬に
地下室で演奏会の趣味仲間
正確さ自慢息子の腹時計

豊中市　荒木郁子

猫よりも鈴をつけたい妻の口
年金と妻の健康だけでよい
会議後の居酒屋で出るいい答え
定年後あるようでない俺の価値

寝屋川市　岡本　勲

誕生日ケーキ笑顔でうたいだす
初節句孫の泣き声褒めてやる
着ぶくれも薄くなってる遊びすぎ
草延びてまだ残念なつくしんぼ

寝屋川市　坂本ミヨノ

新茶摘む八十八夜子に教え
野焼きの匂残る畦道老夫婦
絆も愛もすべてありますこの街に
百歳で孫等にバトン渡したい

羽曳野市　磯本洋一

川柳で脳みそ充たし元気です
このわしは嫁と姑と板ばさみ
嗚呼無常命有限欲無限
孫の前諍いよそう嫁と母

枚方市　谷　英也

年齢でドナー登録ことわられ
孫達へ祝の行列春嵐
もう限界毎年上がる体脂肪
病み上がりテニスコートで転けまくる

八尾市　山川　寧

古里の風は私を憶えてる
初恋の空気漂う同窓会
切磋琢磨の汗で幸せ掴む
東風吹けば行きつ戻りつ早春賦

大阪府　川本信子

淡雪はこんなもんやと地に落ちる
猫だって番茶も出花の膝が好き
遣る事は沢山あって今無職
人も花も言い訳有るね戻り花

大阪府　髙木道子

冬籠りしてますお声掛けないで
寅さんの切手で届くシャイな文
ドッコイショ一息入れる八合目
卓袱台もお櫃七輪知ってます

神戸市　大頭としお

譲られた座席に残るあったかさ
わだかまり解けて心の窓開く
着れる内元気な内と袖通す
人生のさてこれからの夢探す

神戸市　玄番美恵子

軽口の苦さに悔む視線の矢
閉じたシャッターいらっしゃいの声ひびいてる
義理を欠く礼服につく不義理じわ
売り込みの甲高い声代替り

神戸市　輿水　弘

老人を狙う非道が許せない
長生きの秘訣昨日を忘れ去る
初鳴きを聞いて抜け出す春炬燵
自家製の草もち食べてああ昭和

神戸市　近藤勝正

ふる里はセピア色した雨が降る
地獄にもオアシスはある金次第
二の足を踏んだら来ない女神サマ
人間でいよう約束破っても

神戸市　田本古鈴

アウトレットまだまだ歩く欲がある
春の日ざしマスク美人を引きたてる
孫五歳マウスクリック知っている
草野球勝って飲みまた負けて飲む

神戸市　敏森廣光

寂聴法話ゆるりとほどくものがある
読破して得た知恵は葉の雫ほど
つるりつるりと今日も夕陽が落ちる
手のひらでぷっと弾ける夢ひとつ

伊丹市　岡村風琴

嫁貰い家事を始めた我が息子
停電だ家電全てがリセットに
自由です好きに暮して医者通い
お出かけだ妻は一人で温泉へ

伊丹市　平井富夫

締切日せまってもまだ浮かばぬ句
会計という雑用が時奪う
割り切れぬ一円困る対処法
誕生日皺も一本増えている

加西市　山端なつみ

お似合のメガネ美人を横目見る
わらべ歌孫へと伝え年刻む
ライスよりごはんと言えば味がでる
理屈抜きだから本音にたどり着く

丹波篠山市　澤良子

揺れた日も咲いてたね庭の水仙
空冴えて一人で見るに惜しい月
篠山に丹波を足して春が来る
花咲けば世界は丸くならないか

丹波篠山市　長谷川善輔

バックシャン振り向かないで夫言う
淡味が良いと言いつつ妻は外
胸さわぎカラスよく鳴くうちの屋根
妻は留守コンビニ覗き先ずビール

三田市　生田えい子

電車に乗り席を譲られ老いを知る
忠告を聞く耳もたず匙を投げ
貯金なし腹の脂肪は貯まります
持ちなれたカバンとお別れ定年だ

三田市　大西重男

草だって春待つプラン練っている
ボーと生きチコちゃん目玉くらう日々
跡継ぎなく家業絶えるも世の流れ
嫁入りの水屋今ではアンティーク

三田市　幸田厚子

山里に住んでよかった季節感
山の木々新芽を纏い春のショー
語り部が歴史を好きにしてくれる
若女将老舗継ぐのもしんどいね

三田市　住吉美和子

認知症たまにプライド顔を出す
スマホにし右左脳活気出しかける
起きよかと起こし自分は二度寝する
再検査二の足ふます恐怖心

三田市　辻開子

パクついてスイーツ好きでスリムな子
総領の甚六まあそれなりに親の跡
指揃う句作りのため大事な手
断捨離と惜しいが揺れる弥次郎兵衛

三田市　東内美智子

誕生日黄泉の国から祝電が
まだ逝かぬ癌と取り組み粘り腰
風邪治る届いた便り雨水過ぎ
送りたい鞍馬天狗を国会に

三田市　中山寅男

誕生日またまた冥土近くなる
歳重ね目出度くもないバースデー
福は内鬼さんすまん逃げてんか
Gゴルフシルバー族の社交場

三田市　馬場貴美江

菜の花忌この地通った遼太郎
前の席薄着の美女の大くしゃみ
土俵際もっと粘れよ大相撲
鍵かけた金庫の中はほぼ空だ

三田市　松本ゆかり

もう消せぬ知ってしまった隠し事
山焼きの炎の中の君の顔
今日は今日しかし僕には明日がある
夫留守がいいでもたまに居るのもいい

奈良県　中堀優

何にもないふるさとだけど恋しかり
愚痴言わぬひとの笑顔が愛おしい
旬のものいただく幸の舌鼓
烏兎匆匆おぼろのままに花が舞う

和歌山市　北原昭枝

洋画にみる帽子華やぐ競馬場
男が占め暗い日本の競馬場
今ウマジョ日本も変わる競馬場
人間癒す犬の尻尾も孤独です

和歌山市　佐藤まき

おしゃれして軽くスキップ赤い靴
恐いもの知らずなんでも試せた頃
もういらぬ思いつつ手に新調が
粧ってランチお喋り春うらら

和歌山市　鍋嶋　澄子

菜園の玉葱新芽空を指す
世の景気パッとしないと花見てる
坪庭の撒き餌にやっと小鳥来る
皐月まで目鼻喉とも戦闘す

和歌山市　福島　一雄

恙なく黄昏満喫出来る幸
温情の気配を肌で知る後期
オールマスク待合室にある恐怖
娘から届いたカイロの温いこと

岩出市　村中　悦男

春雷に目覚めた霰舞い戻る
旅の空やたら飲み食い太っ腹
血管を探って滑る超音波
出席簿一番目ではさぼれない

鳥取市　上山　一平

温度差があって話の面白さ
苦の次は楽が来るぞと信じつつ
リズムよく鍬を打ち込み種を蒔く
おむすびを結ぶ両手はいきいきと

鳥取市　大前　安子

荒っぽい話に耳もそっぽ向き
乱暴と躾の狭間ある命
お誘いがあれば行きます月旅行
空白のページに理由など書けぬ

鳥取市　田賀　八千代

我が知識まだ役に立つ孫の理科
胃カメラで心の中も探られる
相談にすぐに答えるグーグル君
地味な歩が勝利を左右将棋道

鳥取市　副井　裕

もう来るな地震の片づけやっと終え
風呂新た地震の余波に感謝する
七十はまだ若いわと九十言う
悲劇の児終ったあとに「何故」はない

倉吉市　伊藤　嘉昭

百歳の命結んで母が逝く
縁結びほどいてならぬ夫婦愛
白髪をセンスよく切る老美人
夫婦仲いつもほがらか元気だよ

倉吉市　田中　紀美恵

北帰行コハクチョウ飛ぶまたおいで
待ってたよ春っていいね歌も出る
ありがとうやさしい響きありがとう
ヒューヒューと今夜も風が戸を叩く

倉吉市　堀　かずこ

米子市　池田美穂

酒税だけうんと払っている我が家
演技賞頂けそうな聞いたふり
元号が変わる私も変わらなきゃ
知らぬ間に片目瞑って生きている

米子市　川本美津子

私にも名前があると夫に言う
妻カイロ夫は湿布腰に貼る
渡り鳥地図を持たない北帰行
押し入れに孫が秘密の基地作る

米子市　黒田紀美江

インフルと花粉恐くて閉じこもり
あせります寝坊の朝にチャイム鳴る
酒いらぬ偶に聞きたい夫の口
アベノミクス達成ならず色褪せる

鳥取県　門村幸子

天才はすごい努力のできる人
廃屋の気づいて欲しと梅香る
リラックスしたい時には料理本
残り時間意識するからよく生きる

鳥取県　下田茂登子

一番に濃い兄弟仲悪い
元号で言って欲しいと思う老婆
親と息子一緒に暮らすこのつらさ
娘が一人いたらと思う八十五

（大石洋子さん、大杉敏夫さん、折鶴翔さん、土井輝恵さん、六田半德さん、笹重耕三さん、中前幸子さんは40頁にあります）

鳥取県　西谷悦子

生真面目が予定立てたら破れない
気の持ちようで良くも悪くもなる結果
こうだからこうなるのよと意地を張る
冬木立春の息吹きに奮い立つ

鳥取県　橋本整

あるがままに生きて楽しい九十坂
生きていることが楽しい青い空
老いの日々仕事といえば五七五
性懲りもなく川柳に溺れてる

松江市　中筋弘充

葬式前なら談笑してもいい他人
孫自慢する人も居る通夜の席
増税前に買っておきたい紙おむつ
学級崩壊のような予算委員会

雲南市　永見安子

〆切りがあって一年早く行き
最近は鬼もいないとまかぬ豆
鳥の声日差しが増して元気出て
夕暮れに風のささやき春まじか

倉吉市　岡﨑美知江

知恵袋叩いてみたらまだ出そう
おはようの声でエンジンかかり出す
産土神へとどけとチャリンお賽銭
金星の裏には努力かくれてる

橘高薫風句抄

（『橘高薫風川柳句集』平成十三年発刊）

少年のように近頃夜が怖し
タンポポはタンポポという河内弁
タンポポの絮と僕との宇宙観
路郎忌のわれよき友と旅にあり
路郎忌の氷も白い炎かな
あの女ほたほた炎落し行く
敗戦日分水嶺の如くあり
敗戦日われ人生を二つ生き
ハンカチを黙って渡す妻の汗
百匹になると鰻も修羅になる
手榴弾かつて握りし掌にレモン
浴衣着て又一段と名妓たり
空腹も贅の一つよ名月よ
恩師矍鑠槍さびを口ずさみ
菊の日の白い炎に焼かれける
八百長相撲も礼にはじまり礼に終る
喃妻よ鮎まで値切ることはない
老桜のほつほつと咲く童心か
水仙が並び口開く聖歌隊
こんな恋ならと百人一首かな
養命酒汚辱のいのち養えり
淋しさは前行く犬の足の裏
この花にあのような実が四月馬鹿
海底の都は憂きか平家蟹
風渡る愛の伝わりゆくさまに
落ち武者の強さ髷切れてから
おぞましき議員の胸の赤い羽根
鉄砲玉もひょうろく玉も定年か
真相は大根になる貝割菜
家元のお供で寺の昼を食べ
黒百合を見てこの旅はこれでよし

青森行き　四句

梅雨ついてブルートレイン青深め
親しさはねぶたの顔でお出迎え
恐山四人四本の死人花
恐山空焼けるとき恐山

誹風柳多留一二篇研究 71

石川道子・小栗清吾
細井龍夫・伊吹和男
山田昭夫
清博美

605 **地ごくにて知る人にあふ延喜帝**

石川 藤原時平の讒言を入れ菅原道真を太宰府に追いやった醍醐天皇（延喜帝）はこのことによって地獄へ落ちた。醍醐天皇はここで、地獄巡りをし十三日を経て蘇生する日蔵上人に出会い、道真の供養を依頼したという。

日蔵へ此通りだとおりだとみことのり　拾五13

日蔵に面目もない延喜帝　一〇30

地こくからことづてをするゑんぎ帝　天四仁3

清 賛。

606 **供が内みるがやぶ入くろうなり**

石川 お屋敷奉公の娘であろう、藪入りにはお屋敷からお供をつけてくれ、家まで送られて帰省するのだが、彼女にとってはお供に生家の貧しさ等をみられるのは大変な苦痛である。

藪入りの供に母おやのらを見せ　明三桜4

雪隠ンへ行を宿下りくろうにし　明二礼4

清 賛。

607 **他人の中を見て来たハけんとうし**

石川 他人は、他国の人、外国人。他人の中を見せるは、世間を知るため他人の中の生活を経験させること（『日本国語大辞典』）の由。遣唐使といえば、まさに他人の中を見て来た人たちである。

他人の中でよんだのも一首入れ　安四仁2

頼光の弓の師匠は他人なり　一五20

清 賛。

608 **おくさまをほめて御人のあきがなし**

石川 不明の句。まず「御人」がわからない。奥様のことをほめて、側女が入る余地がない？

小栗 わかりません。奥様が何でも頑張ってしまう立派な人なので使用人がいらない？

山田 御人は「①客人や、よそから来た使者を敬っていう語」（『日国』）で、その人が明き、つまり「①空白」（『日国』）なく、おべんちゃらを言っているというのではないか。

清 成る程、山田説のようにも読めるのだが。

609 **楠ハつくりの方のひいきする**

石川 楠のつくりは南。楠木正成といえば南朝に組し千早赤阪城によって挙兵して幕府の大軍を敗り、建武新政が行われた。

名木をごたいこ帝ハ壱本もち　天三満1

楠ハつくりの方ゥへ御味方　四七14

清 賛。

610 **安うぶぎさぎとすつぽん舞遊ひ**

石川 お宮参りの産着にはおめでたい鶴・亀の刺しゅう等が多い。職人は鶴と亀のつもりで刺しゅうし、呉服屋もそのつもりで売り、娘の実家の親でもあろうか、そのつもりで買って贈ったのだが、安いだけに驚とスッポンが舞い遊んでいるようにしか見えない。

御うぶ着と雛を持込ム にきやかさ　明七礼1

ごくこんい鳴のうぶきをかつてやり　安五桜2

うぶきともいわれませんと里の母　安九鶴2

清 賛。

611 **伯父がわせたであきらかな紅葉也**

石川 わせるは、来るの尊敬語、来られる、いらっしゃる（『江戸語の辞典』）。

息子がいう紅葉見物は紅葉は付け足し、遊所が目的だが、伯父さんが来るのであればこれは間違いなくまっとうな紅葉見物である。息子にすればこれも浮世の義理と思い決してついて行くのであろう。

すみた川い、見せものハ伯父ト行キ　天六梅2

紅葉狩リどつちへ出ても魔所斗リ　三6

おれをさへ弐分かたつたと伯父ハいゝ　九32

清 賛。

612 **吉広を月夜に買ふハ急な事**

石川 吉広は、大山石尊の納太刀のこと。木太刀。

月夜は、盆（陰暦七月）一五日の夜。

七月は盆の節季払いがある。支払いができそうにもなく、掛け取りから逃れるために大山に詣で留守にすることにし、あわてて石尊に納める太刀（吉広）を買ったというのであろう。日にちからみて七月一四日から一七日の間の盆山であろう。

らんぴんでよしひろをぼつこんて行キ　一六18

盆山ハ欠落らしい人はかり　初24

大山へどうかしあいにまいるよふ　三一18

しよせんたりないと大山さして行　一七36

清 賛。

613 **いち時に立てちよき舟しかられる**

石川 猪牙舟は大きな舟ではなく、乗るのも一人からせいぜい数人である。吉原か深川通いの猪牙であろう。岸に着けるといっせいに立ち上がったため、それじゃあ転覆するよ、と船頭にしかられた。

猪牙舟でうこぎの取ぬ角力取　七五12

猪牙舟も小馬鹿にならぬ荷をこなし　四15

清 賛。

614 **聟をおわへて白髭で壱分かり**

石川 おわへては、追いかけて。愛媛県では今も使っていると思います。

白髭は、白髭大明神。向島隅田川畔に安置されている。

花見か何かで隅田川堤に来た。これで帰る手はない、繰り込もう、ということになったが手元不如意。そこで、一人繰り込むことなく帰路についた聟を白髭大明神あたりまで追いかけて、吉原で遊ぶにはカツカツの一歩借りた。

仲人も義理て六郷までおわへ　安五松5

角田川ころばぬ奴ハかへるなり　明四礼7

清 賛。

愛染帖

新家 完司 選

（投句279名）

レンジには昨日チンしたままの菜

（評）開けたとたんに「ボーっと生きてんじゃねーよ！」と冷え切った惣菜の声。このようなことが何度も続くようなら要注意！

富田林市　中村　恵

手と足の指反り返る歯の治療

（評）まるで拷問を受けているような、脳天に突き刺さる音と痛み。誰の所為でもないので誰にも苦情が言えず、ただ耐えるのみ。

河内長野市　藤塚　克三

認知症の遺伝子もって生きている

（評）認知症は遺伝性の疾患ではないので心配ご無用だが、ボーと生きていると罹る恐れあり。川柳に取り組んでおれば大丈夫！

鳥取県　門村　幸子

息災で子供孝行しています

（評）誰しも、いずれは介護を受けることになるが、元気を持続して「三日ほど介護をさせてやってピンコロリ」が子供孝行か？

尼崎市　山田　耕治

春先のぼんやりが好き猫抱いて

（評）厳しい冬や夏を好む人は少数派。寂しい秋も苦手、となれば春がベスト。春霞に包まれボンヤリ抱かれている猫も幸せ者。

大阪市　森　廣子

私も金正恩も脂肪肝

（評）あの腹は間違いなく脂肪肝だろう。毎日ご馳走をたらふく食っているに違いない。キムさんに見せたい大胆不敵な一句。

豊中市　木藤こみつ

カラオケヘジョッキ一杯ドーピング

（評）シャイな男はシラフでは歌えない。で、ついついドーピング。と言っても禁止薬物ではなくて生ビール。これで勇気百倍！

札幌市　三浦　強一

遠慮する美徳を知らぬ子に育つ

（評）遠慮や謙遜は日本人の伝統的な美徳であったが、欧米では積極的な姿勢が評価される。最近の子は国際的になってきたのだ。

米子市　中原　章子

なまんだぶ唱えていればいいと言う

（評）人事を尽くして天命を待つ、だけでは不安なので「なまんだぶ」を唱える。念のために「アーメン」も加えると万全だろう。

府中市　岸田　武

入院の夫にハッパかけに行く

（評）元気な夫だったが、入院してから少し弱気になっている。ハッパをかけて「弱気が大好きな疫病神」を追っ払ってやろう。

寝屋川市　籠島　恵子

下戸の医者なんでも酒の所為にする

尼崎市　永田　紀恵

いい医者だ薬の量が減りました

横浜市　川島　良子

血圧を下げた主治医の頭が高い

松江市　中筋　弘充

往診は応じてくれぬ歯医者さん

大阪市　小野　雅美

動物消しゴムくれる歯医者に孫は行く

羽曳野市　宇都宮ちづる

病院のはしごと決めた冬の晴れ

三田市　野口真桜子

その所作で学術的に見える医者

米子市　成田　雨奇

こんにゃくでいたい日もある曇り空

黒石市　北山まみどり

のらりくらり生きているのもいいもんだ

大阪市　谷口　義

月旅行よりも桃源郷巡り

倉吉市　牧野　芳光

血統書犬に貼り付け散歩する

岡山市　永見　心咲

持ち歩く顔に自信がまだ持てぬ

大洲市　中居　善信

悔しさがまだ湧いてくる八十歳

和歌山県　森下よりこ

三田市　丹羽　美恵
隣からハワイ土産が届く頃

堺　市　内藤　憲彦
統計によると良い国らしいけど

岡山県　山縣のぶ子
スカンピンの頭を少し寝かせよう

寝屋川市　伊達　郁夫
ぼんやりとしてたらサプリ買わされる

河内長野市　森田　旅人
野の獅子に見える米寿の指揮の背な

伊丹市　延寿庵野鶴
山門を出ると五欲の海が待つ
ひとりカラオケここだけは宇宙船

上尾市　中村　伸子
着メロはジュトゥヴーですのそれが何
苦しいは若いに似てるそれは何故

三田市　谷口　修平
労働にとても不向きなハイヒール
スクラムを組めば出てくる労働歌

佐賀県　真島久美子
お醤油をかけてはダメですかパスタ
嫉妬心チーズが無駄に伸びている

倉吉市　大羽　雄大
ツーンとくる山葵で脳を浄化する
愚図り声出すなと奥さんが叱る

河内長野市　原熊知津子
きれいごと言ってる人の綺麗な手
多数派に寄りかかり螺子ゆるみだす

大阪市　奥村　五月
一番の助っ人の妻先に逝く

三田市　大西　重男
妻逝ってひとり暮らしはもう飽きた

鳥取市　前田　楓花
B面の私の方がおもしろい

笠岡市　藤井　智史
イノシシとバイク並走する田舎

大阪市　平井美智子
パソコンに御布施の額を聞いている

米子市　竹村紀の治
賽銭が足りなかったか宝くじ
審議拒否しても貰えるお給料

大阪市　古今堂蕉子
はるけくも女の子から老婆へと
離婚を卒婚？　それはないやろ

仙台市　月波　与生
ドライブレコーダーで見る世知辛さ
百歳の人がわが家でも生まれ

西宮市　緒方美津子
拾ったら開いてみたい皮財布
これからはビットコインで縄のれん

高槻市　片山かずお
遣うためにあると言われる金がない
ティッシュと一緒に貰ったチラシすぐ捨てる

堺　市　坂上　淳司
二段ずつ駆け上がり行く赤い靴
一段ずつ両足揃え上がる老い

堺　市　村上　玄也
戦前生まれ古代人かのよう言われ
もう昼かもう寝るのかと日が過ぎる

河内長野市　山岡富美子
春が来た新元号がやってきた
乱読で劣化予防をしています

河内長野市　梶原　弘光
老老男女の公民館まつり
金婚まで2年慌てて豚貯金

鳥取市　山野すみれ
飽きっぽい性格だから生きられる

三田市　堀　正和
衣食住足りて愛だけ欠けている

大阪市　大川　桃花
無いと不便余分は要らぬカレンダー

松江市　石橋　芳山
上等じゃないかと負け犬が吠える

芦屋市　竹山千賀子
体力をカバーしている口の数

神戸市　奥澤洋次郎
「なんなんあの人」おばちゃんの目が追いかける

尼崎市　清水久美子
たこ焼のたこ無しが好き総入れ歯

岡山県　折鶴　翔
弱視です支払いの字が読めません

鳥取県　細田　裕花
見送られ離陸の目線しています

肩書がとれて雅号が増えた春　大阪市　高杉　力

句作りは心の天気予報なり　沖縄県　禱　モモト

川柳と出会い友人様変わり　池田市　上山　堅坊

昼寝して夜川柳を作るクセ　倉吉市　岡崎美知江

学歴の話はしない趣味の会　藤井寺市　鈴木いさお

本心を書くのを迷うペンの先　橋本市　石田　隆彦

全没に自信がついて胸を張る　西脇市　七反田順子

法律の隙間に光る世間の眼　唐津市　仁部　四郎

ふんばって強くなるヒト科のオンナ　和歌山市　まつもともとこ

挑戦を続けるうちは伸びている　防府市　坂本　加代

ケーキ屋を目指した長女古本屋　大阪市　江島谷勝弘

ゆったりと食べていていい朝御飯　鳥取県　斉尾くにこ

ニャンニャンしよう無邪気に笑う子猫　沖縄県　森山　文切

降りる駅見つからぬまま新元号　和歌山市　上田　紀子

年金は目減りしてるがベアも無い　三田市　多田　雅尚

年金のためにとても大事な夫です　大阪府　米澤　俶子

年金の幅を守って飛んでいる　箕面市　中山　春代

百歳時代女ざかりの喜寿傘寿　河内長野市　村上　直樹

年齢を重ねることは大仕事　三田市　上田ひとみ

明日あしたと待つほどでなし九十三　大阪市　高杉　千歩

囀りに万の蕾が呼応する　枚方市　山口弘委智

そこらじゅう道路工事の年度末　岡山県　藤澤　照代

啓蟄というから水虫まで騒ぐ　神戸市　細川　花門

婚前のレターを読んで惚れなおす　篠山市　澤　良子

魚だって釣られて跳ねるこの痛さ　男鹿市　伊藤のぶよし

犬も服着てる間はおとなしい　長岡京市　山田　葉子

ハックション三回続き褒められる　鳥取市　谷口回春子

何もする気のない時間有り余る　八尾市　村上ミツ子

叩かれる木魚の裏も同じ顔　弘前市　福士　慕情

うまそうやつい誘われるコマーシャル　香芝市　大内　朝子

グレーヘアーが流行り白髪も悪くない　大阪市　平賀　国和

山羊の恋頭突きコツンと可愛い目　鳥取市　上山　一平

自慢話の一つ生命線が長い　寝屋川市　川本　信子

老眼鏡置き忘れてもいい在庫　和歌山市　古久保和子

オープン戦やっぱ気になるタイガース　高槻市　初代　正彦

ウィッグと化粧で魔女になるわたし　貝塚市　石田ひろ子

冬帽子シャイな男に見られたく　阿南市　小畑　定弘

山燃えるほどにはならぬ老いの恋　川西市　大坪　一徳

凡人は花より団子もっと欲し　西宮市　福島　弘子

思いきり笑って今日を折りたたむ　門真市　坂本　星雨

まるバツのテストで零は取りにくい　大阪市　藤田　武人

ウエストの位置がはっきりしなくなる　藤井寺市　太田扶美代

松山市　栗田　忠士
花見酒それほど花は見ていない

羽曳野市　吉村久仁雄
心して飲めと桜に叱られる

豊中市　齋藤奈津子
まずビール前座みたいに扱われ

羽曳野市　中川ひろ介
持つべきは金より友と酒の席

熊本市　杉野　羅天
酒少し料理も少し酔い少し

朝霞市　前田　洋子
呑みましたでも大丈夫徒歩だから

弘前市　稲見　則彦
山菜の相手はコップ純米酒

三田市　村田　博
熱燗から人肌燗になる彼岸

大阪市　岩崎　玲子
肩の荷を横に置いてのひとり酒

堺　市　澤井　敏治
スカスカの骨にじわっと酒が染む

三田市　北野　哲男
飲む会もあって兎に角忙しい

紀の川市　辻内　次根
禁酒明けスーパードライの風呂上がり

鳥取県　橋本　整
衣食住足りて寝酒の美味いこと

高槻市　松岡　篤
たまご酒途中でたまご無しで飲む

沖縄県　宮　すみれ
なぜいそぐ人人の交差点

京都市　都倉　求芽
転んでも人には言わぬひとりもの

東大阪市　北村　賢子
成るようになる腹を括っている余生

大阪市　柴本ばっは
なんとかなる取締役お母ちゃん

豊中市　水野　黒兎
一日のけじめの薬六種類

鳥取市　田賀八千代
あせっても心の糸は繋げない

池田市　太田　省三
二代目へ初代の顔がのしかかる

東京都　川本真理子
お互いに謝るべきを一つずつ

丹波篠山市　酒井　健二
ラッパ吹く人は先頭走らない

岡山市　大石　洋子
地中から大根せりだしワッハッハ

鳥取市　岸本　宏章
もてなしが過ぎても尻が落ち着かぬ

箕面市　出口セツ子
立ち止まり沈思黙考する老後

宝塚市　太田としお
合格祈願家内安全五円玉

奈良県　渡辺　富子
夢語る息子の鼻のでかい穴

三原市　笹重　耕三
春一番が吹く　猫が家出する

海南市　小谷　小雪
春雨に山椒は棘を尖らせる

高槻市　島田千鶴子
春なのに雨が嬉しい花粉症

三田市　福田　好文
スノータイヤ一度も雪を見ずチェンジ

鳥取市　大前　安子
春風へ暗い事など預けましょ

奈良市　辻内げんえい
パワハラが気になり部下を叱れない

海南市　堂上　泰女
若返りの薬さくらの歌今日も

三原市　鴨田　昭紀
自己流を貫くカメのマイペース

鳥取市　倉益　一瑤
ムカつく日草をむしる手よく弾む

八尾市　前田　紀雄
百歳時代雑草魂を磨きます

岡山県　田中　恵
黒ぐろと歳を忘れているカラス

和歌山市　磯部　義男
人形といえども照れる蘇生法

河内長野市　木見谷孝代
インプラントでしっかり噛んで元をとる

奈良市　仲西　賛郎
花見会たのしみに待つ炬燵中

共選欄　欅抄

（薫風書、カットとも）

（投句　361名）

「草」　川端一歩選

草の根を分けて見つけた貴女です　河内長野市　梶原　弘光
春ですねちょっと道草しませんか　和歌山市　定松　宏枝
草も樹も命も眠るヒロシマ忌　三原市　笹重　耕三
草茫茫セシウム沈黙したまんま　枚方市　丹後屋　肇
罹災地にたんぽぽポッと咲き春に　西宮市　亀岡　哲子
雑草も生えぬ激しい戦の地　池田市　上山　堅坊
沖縄の雑草基地を許さない　鳥取県　竹信　照彦
蜜蜂を激減させる除草剤　三田市　村田　博
草花に精霊宿る春の宵　名古屋市　山本三樹夫
草原を駆け邪馬台国に着いた　神戸市　細川　花門
雑草の強さよ土を選ばない　藤井寺市　鈴木いさお
爪折れば命が香る春の草　大阪市　平井美智子
満開のペンペン草の誇らし気　香芝市　大内　朝子
草原に溶けだしている空の青　松江市　石橋　芳山
こんなにも可憐な花よいぬふぐり　東大阪市　北村　賢子

「草」　山岡冨美子選

佐保姫は若草色の息吐いて　橿原市　居谷真理子
枯草にどいてどいてと新芽出る　防府市　坂本　加代
雑草の強さ憎らし羨まし　堺　市　矢倉　五月
また草たちとのイクサが始まった　大阪市　江島谷勝弘
草笛を鳴らすと少年の目の父　大阪市　原田すみ子
踏まれやすい場所で雑草らしくなる　沖縄県　森山　文切
雑草の強さよ土を選ばない　藤井寺市　鈴木いさお
草を引くただそれだけの墓参り　大阪市　平井美智子
ふきのとう食べて一気に春の脳　鳥取市　福西　茶子
エチケットを学んでみたいおじぎ草　豊中市　藤井　則彦
食べられる草を探した戦の日　藤井寺市　髙田美代子
草むしり五枚で足りぬ湿布薬　東かがわ市　川崎ひかり
芽を出そういやがられても俺は草　丹波篠山市　長谷川善輔
雑草が意地の根っこを張っている　笠岡市　藤井　智史
雑草と会話して待つ過疎のバス　池田市　奥園　敏昭

露ほどの邪心もないかかすみ草
草々で結ぶ少うしいい気分
露草も平和な朝を謳歌する
道草が教えてくれた四季の花
雑草の中で育った底力
小庭の雑草も財産の一つ
ほどけたり崩れたりしてねむり草
露草のはかないいのち識っている
でしゃばらぬ手本にしたいかすみ草
線路ぎわ危ないけれどつくしんぼ
草に寝て私は青い鳥になる
陽春の戯れ草も躍りだす
エチケットを学んでみたいおじぎ草
スクラムを組んではこべが道を這う
田圃から田螺を消した除草剤
ツバナスカンポ皆お八つにした戦後
チチンプイ草書で書いたラブレター
草冠人に寄り添う花薬
無人駅手を振っている猫じゃらし
道草が楽しくて学校も好き
雑草がちょぼちょぼ野ぼとけも春に
雑草でござるイジメにゃ負けません
草もちに感じる春の隠し味

長岡京市　山田　葉子
和歌山市　武本　碧
箕面市　出口セツ子
羽曳野市　中川ひろ介
三田市　久保田千代
大阪市　江島谷勝弘
富田林市　片岡智恵子
八尾市　村上ミツ子
大阪市　岩崎　玲子
大阪市　柴本ばっは
羽曳野市　徳山みつこ
倉吉市　田中紀美恵
豊中市　藤井　則彦
大阪市　高木　道子
松江市　中筋　弘充
尾道市　大本　和子
岡山県　大杉　敏夫
西宮市　緒方美津子
貝塚市　石田ひろ子
奈良市　大久保眞澄
寝屋川市　森　茜
弘前市　高瀬　霜石
奈良県　長谷川崇明

田の草も混じるキャベツが届く幸
放置田へ我が物顔でいるかずら
春なんだもう春なんだひよこぐさ
飛ばされた土地でたんぽぽ城を建て
草を抜くごめんごめんと言いながら
伸びた草の気ままを許す青い空
不意打の深手をいやす薬草湯
草野球ハイタッチだけ上手くなり
薬草が医者の代りをする過疎地
崖の草ボルダリングのように抜く
草の根に生きて整骨院の主
在来の草は残しておく砂丘
香り立つ練炭火鉢よもぎ餅
ツバナスカンポ皆お八つにした戦後
スクラムを組んではこべが道を這う
草の芽は抜かれ花芽は水もらう
笹鳴きから谷渡りまで草を抜く
どこででも生きる雑草からエール
道草の目の端にある縄のれん
道草のおかげ豊かな定年後
休耕の仕返し手には負えぬ草
雑草といえども疼く固い芯
道草はできぬ八十路の時刻表

神戸市　山崎　武彦
大洲市　中居　善信
岡山市　丹下　凱夫
米子市　竹村紀の治
神戸市　山口　光久
藤井寺市　鴨谷瑠美子
神戸市　冨永　恭子
大阪市　髙杉　力
宇部市　平田　実男
紀の川市　山東日出男
羽曳野市　三好　専平
鳥取市　岸本　宏章
池田市　太田　省三
尾道市　大本　和子
大阪府　髙木　道子
鳥取市　田中　天翔
岡山市　永見　心咲
貝塚市　吉道あかね
京都市　清水　英旺
河内長野市　村上　直樹
大阪府　米澤　俶子
和歌山市　武本　碧
大阪市(故)　升成　好

一度でも雑草の気になってみろ　奈良市　安福　和夫
雪解けは沢で行する座禅草　堺　市　坂上　淳司
しろつめ草孫が冠くれました　大阪市　宇都満知子
草の根を分けても8年目の遺骨　生駒市　飛永ふりこ
道草で拾った知恵が生きてくる　門真市　坂本　星雨
雑草に分別されてから強い　札幌市　小沢　淳
草取りの汗が溶かしたわだかまり　河内長野市　木見谷孝代
草の香の訛りに耳の洗われる　河内長野市　森田　旅人
肥料にも目にも嬉しい蓮華草　大阪市　大川　桃花
愛でられる昼に咲きたい月見草　三田市　谷口　修平
すみれたんぽぽ何処へマンションの丘　大阪市　高杉　千歩
一心にここで咲こうとイヌフグリ　堺　市　内藤　憲彦
はこべらもなずなも食べた戦中派　尼崎市　清水久美子
草むらに安らぎがある兵の墓　八尾市　内海　幸生
実況に訛りが入る草競馬　名古屋市　冨田　末男
草の上蚤は恋の無言劇　堺　市　加島　由一
繁蔞（しろよもぎ）の花は母さんの微笑み　岡山市　永見　心咲
清貧に生きて媚びない葦である　出雲市　竹治ちかし
心の棘抜き取るように草むしり　富士見市　中島　通則

秀　句

かすみ草バラ一本を華にする　羽曳野市　吉村久仁雄
このまんま雑草のまま生きてゆく　三田市　上田ひとみ
飛ばされた土地でたんぽぽ城を建て　米子市　竹村紀の治

野球サッカー子供の汗を見てる草　四條畷市　吉岡　修
雑草と仲よく育つ伸び盛り　京都市　都倉　求芽
振り向けばもう生えている草むしり　鳥取市　吉田　弘子
奈良の鹿に募集かけたい草むしり　奈良市　大久保眞澄
草の根を分けて見つけた貴女です　河内長野市　梶原　弘光
雑草も木綿豆腐も頑固者　岡山市　工藤千代子
生きている幸せを蒸す草団子　島根県　原　徳利
雪消えて草に始まる農日誌　弘前市　浅田　隆樹
草葺きの屋根はさしずめ文化財　鳥取市　池澤　大鯰
ポパイだけホウレン草で強くなる　倉吉市　牧野　芳光
埋め草になろう私で良かったら　西予市　西田美恵子
踏まれてもすぐ立ち上がる草と俺　倉吉市　伊藤　嘉昭
日溜りの幸せを知る名無し草　唐津市　坂本　蜂朗
草深く徒然草の愛読書　土佐清水市　辻内　次根
犬ふぐりヘクソカズラも花可憐　三田市　北野　哲男
道草の歩幅で春に迷い込む　袋屋川市　伊達　郁夫
草むらに安らぎがある兵の墓　八尾市　内海　幸生
雑草を抜き雑草になり生きる　仙台市　月波　与生
雑草になれる力を溜めている　名古屋市　冨田　末男

秀　句

咲けるなら雑草だってかまわない　男鹿市　伊藤のぶよし
草原を駆け邪馬台国に着いた　神戸市　細川　花門
雑草に分別されてから強い　札幌市　小沢　淳

英語 de Senryu㊽

麻生路郎句集『旅　人』

英 訳　吉村　侑久代　Kim Horne

その書棚酔に乗じて買うた本

the book on the shelf
bought under
the influence of alcohol

戀人の匂ひ　香水だけでなし

the smell
of my lover
not always perfume

---

shelf 本棚　*bought* 贖われた (原形 buy 買う)　*influence* 影響　作用　*alcohol*　酒
smell　匂い　香り　*lover*　恋人　*not always*　必ずしも～でない　*perfume* 香水

～リバーウィローのため息～世界の川柳・俳句㉙　すみくらまりこ (日本)

彼女は詩人・エッセイスト・翻訳家で、国内外の現代詩人の作品や日本の古典文学を翻訳し、さらに自身もバイリンガルで詩を発表するというタレントの持ち主です。JUNPA(日本国際詩人協会)代表、「詩の架け橋:天橋」の編集主幹を務めています。オーストリア・ウィーン国際文学祭ミロシュ・ツルニャンスキー賞(2018)、ナジ・ナーマン文学賞(2018)など他、多数の国際賞を受賞。最近、私は彼女によってなされた江戸期の歌人・国学者の橘曙覧の「獨樂吟」の英訳に興味を抱きました。橘曙覧は川柳に通じる人生の楽しみ事を私たちに教えてくれます。彼女の英訳からいくつか紹介しましょう。

たのしみはあき米びつに米いでき今一月はよしといふ時
A great pleasure to me is when/ I fill up an empty rice box and esteem/ it quite enough for a whole month.

たのしみはとぼしきままに人集め酒飲め物を食へといふ時
A great pleasure to me is when/ I invite people to enjoy the drinks and/ meals even at the time of my poverty.

たのしみはいやなる人の来たりしが長くもをらでかへりける時
A great pleasure to me is when/ I saw an abhorrer leave very soon/ without any lingering stay.

「雫」

（投句　228名）

夏目一粋選

一滴の水が命に活入れる　富山市　伴　よしお
しずくから漏れる少女の叫び声　横浜市　川島　良子
雨の音で今夜は眠れそうにない　鳥取県　石谷美恵子
朝露の一滴いのち弾ませる　男鹿市　伊藤のぶよし
ポタポタと雫があけた石の穴　豊橋市　小松くみ子
キャンプの夜星のしずくと語り合う　弘前市　福士　慕情
新しい命の元は一雫　高槻市　初代　正彦
ポトポトとなごり惜しむか傘雫　倉吉市　岡崎美知江
好きな酒ひと雫まで無駄にせぬ　米子市　中原　章子
勘定の内だと雫までも飲み　出雲市　竹治ちかし
付き合いはここまで傘の雫切る　明石市　糀谷　和郎
追伸に薔薇の一滴入れておく　海南市　小谷　小雪
一滴も流しちゃならぬ血の雫　鳥取市　谷口回春子
大泣きの割に涙は雫ほど　米子市　池田　美穂
絞り滓それでも雫秘めている　岡山市　永見　心咲
落ち椿一期一会のひとしずく　青森市　守田　啓子
としとった牛のようにも涎れ垂れ　鳥取市　池澤　大鮫
長年の汗のしずくか退職金　池田市　太田　省三
汗雫介護する身もされる身も　紀の川市　楠原　富香
満天の星の雫を掬い取る　松江市　栂瀬みちを

嫁いびりの母に抗議のひと雫　唐津市　坂本　蜂朗
ひとしずく毎に近づく春の音　倉吉市　牧野　芳光
雫うけヒヤリ神経尖んがった　鳥取市　上山　一平
雫切る様にはゆかぬ血の絆　三田市　北野　哲男
雫まで飲む大盃の祝酒　貝塚市　石田ひろ子
一雫やがて大河の夢を持つ　大阪市　若本　安代
雫ほどの利息が付いている預金　堺　市　村上　玄也
深い愛やがて泉となる雫　笠岡市　藤井　智史
ひと雫待ってましたとカタツムリ　豊中市　上出　修
点滴の雫にもらう明日の夢　池田市　上山　堅坊
ご臨終なみだの雫見逃さず　豊中市　齋藤奈津子
ぽちぽちの雫が掘った岩の穴　大洲市　中居　善信

佳　句

ボランティアの汗の雫よありがとう　大阪市　平賀　国和
沖縄の涙の雫乾かない　米子市　後藤美恵子
愛の雫一滴もろた都市砂漠　海南市　堂上　泰女
一粒の雫に動く場の空気　奈良市　宇賀　史郎
悲しさの一雫には重さあり　西宮市　福田　正彦

人

残されて一人で祝うひと雫　大阪市　榎本日の出

地

年金は涙よ昭和枯れすすき　弘前市　髙瀬　霜石

天

雫ほど愛を下さい生きるため　倉吉市　山中　康子

軸

雨もりの雫の音が眠らせぬ

「レンズ」

（投句　228名）

安田忠子選

搜し物先ずは眼鏡を見つけなきゃ　神戸市　近藤　勝正
水晶体上等なのか眼が老いぬ　上尾市　中村　伸子
良いレンズだ妻がきれいに見えている　高槻市　松岡　篤
愛ゆえか子に向くレンズ曇りがち　大阪市　古今堂蕉子
瞼とじて疲れたレンズ休ませる　豊中市　松尾美智代
ハズキルーペ欲しいと妻のひとり言　藤井寺市　鈴木いさお
カメラに目ついたドローンが人助け　三田市　北野　哲男
新聞もテレビも世相を観るレンズ　唐津市　仁部　四郎
凹凸のレンズめがねに助けられ　鳥取市　夏目　一粋
色めがね潜むと世間狭くする　三田市　久保田千代
顕微鏡覗いただけで失神す　大阪市　榎本　舞夢
見たくないものまで見せる凸レンズ　明石市　糀谷　和郎
虫めがねで約款読むが意味不明　豊中市　水野　黒兎
写ルンですそれはそれなり樹木希林　弘前市　稲見　則彦
望遠のレンズで覗く月の皺　堺　市　村上　玄也
老眼鏡にルーペ重ねてまだ読めず　奈良市　大久保眞澄
レンズ雲見抜いた父だ即下山　大阪市　柴本ばっは
損得に応じレンズを嵌めかえる　三原市　鴨田　昭紀
レンズ通せば可愛い雀こわい蟻　西宮市　緒方美津子
スマホあれば一眼レフはお蔵入り　大阪市　江島谷勝弘

草の根を分けて探したコンタクト　伊丹市　延寿庵野鶴
大宇宙覗くレンズの抱くロマン　出雲市　竹治ちかし
ゴキブリをルーペで見ると恐ろしい　堺　市　奥　時雄
のんびりと生きればいいのメガネ好き　大阪市　榎本日の出
逃げ得は許さぬカメラは撮らえてる　東大阪市　佐々木満作
かぎ裂きを繕う母の鼻メガネ　弘前市　福士　慕情
正直なレンズに嘘は通じない　大阪府　米澤　俶子
いじわるなレンズが暴く皺の数　奈良市　米田　恭昌
胃カメラのレンズ古傷まで暴く　鳥取市　岸本　宏章
顕微鏡未知の世界を切り開く　香芝市　大内　朝子
監視カメラに写されている千鳥足　河内長野市　藤塚　克三
魚眼レンズ君のこころをのぞき見る　奈良県　渡辺　富子

佳　句

頭にメガネ乗せてメガネをまた探す　堺　市　内藤　憲彦
虹色のプリズム浴びる花の旅　生駒市　飛永ふりこ
忖度に曇った官僚のメガネ　札幌市　三浦　強一
言い訳をさがし続ける虫メガネ　大阪市　平井美智子
天眼鏡を覗きうなった占い師　堺　市　坂上　淳司

人

マクロミクロ全ての世界知るレンズ　京都市　桝本　宏子

地

飢餓の子を追えばレンズも涙ぐむ　藤井寺市　太田扶美代

天

平成を魚眼レンズで顧みる　高槻市　初代　正彦

軸

レンズ越し見えない物がよく見える

初歩教室

題―先生

髙瀬霜石

今回の題は「先生」。編集部に、文句を付けるわけじゃないが――と言って、ちゃんと付けている。ここは「初歩(新人)教室」。もっと簡単な、句想が広がる題にして欲しい。

ところで、今の卒業式では「仰げば尊し」を歌わないんだってねえ。仰ぎ見、尊敬するほどの先生がいないってことか。というより、意味が通じないんだな。「オモエバイトトシ」だもの、分かるわけがないわさ。イヤ、ハヤ。

まずは、前回同様に、ジャンル別にチェックしていってみよう。

①言葉を、あっちとこっち、入れ替えてみる。

(▼が原句。▽が参考句)

▼議員さん先生と呼ばれご満悦　(東)美智子

なんだか、ぎこちない。中八でもある。

▽先生と呼ばれてご満悦　議員

参考句も、結構ぎこちない。原句をすっかり崩してしまうのも気が引けるからだ。そのへんのコロアイが、なんとも難しい。

▼師を葬送る我も八十路になりました　風露

「我」がどうにも固い。肩の力を抜きたい。

▽わたくしも八十路になった師を送る

▼当選後先生と呼ばれ反り返り　(澤)良子

ここは「反り返り」をうまく使いユーモア句に仕立てたい。上が重くなったがご勘弁。

▽先生です反り返ります当選後

▼元先生元社長まわりは元ばかり　寧

面白いけど、リズムがイマイチなので、

▽わたしのまわり元先生元社長

▼さすがセンセイうまく質問かわしてる　亜希子

これはこれでOK。文句はないのだが、僕ならば、言葉の順番をちょっと変えたい。

▽さすがセンセイ質問うまくかわしてる

▼選挙前畑の中まで先生来る　こずえ

コレきっと本当のコト。だから面白い。ただリズムがねえ。中八はなるたけ避けたい。

▽畑まで先生が来る選挙前　(戦)

▼医師教師ブラック業と成り果てる　よしおんー。「成り果てる」が、美しくない。

▽ブラックな生業となる医師教師

②助詞を含めた言葉のチェック。

▼あなたからもらった種を発芽させ　雅子

前向きないい句。ただ、下五が気になった。何度も言うが、▽が必ずしも正解ではなく、僕だったら、ココはこうするということ。

▽あなたからもらった種が発芽する

▼思いきり叱られたから師と思う　廣光

▽思いきり叱られてから師と慕う

▼先生と呼ばれて思わず振り向いて　重男

▽先生と呼ばれ思わず振り向いた

▼居眠りの先生もいる国会に　道子

どうにも下五が座りが悪い。ただ、▽の下五も月並みではあるのだけれども。

▽居眠りの先生もいる永田町

▼先生の歳はるか越え未だ未熟　(門)幸子

▽先生の歳をはるかに越え未熟

▼先生も四年に一度の大舞台　みちを

▽先生も四年に一度大勝負

▼先生と言われて背中ピンと伸び　三樹夫

▽先生と呼ばれて背筋ピンと張る

▼先生と呼ばれた過去が少しある　紀美代

「少しある」が思わせぶりで、できれば生かしたいのだが、僕の力では無理。断念。

▽先生と呼ばれた過去がよみがえる

③言い過ぎていないか。余分な言葉を削ってもうちょっとシンプルにならないか。

▼新入生皆ルビがいる出席簿　剛

楽しい句。せっかくだから、もっとシンプルにすると、もっとユーモア度が上がる。

▽新入生ルビがいります出席簿

▼先生もその場限りの神だのみ　嘉昭

▽先生も人の子時に神だのみ

▼世の中に先生と呼ぶ人数多　くみ子

どうせなら、ちょっと大げさにしてみよう。

▽先生と呼べばみんなが振り返る

▼手を焼いた生徒が今は社長職　久直

▽手を焼いた生徒が今は社長です

▼先生に叱られ立たされこわかった　光雄

▽先生に立たされました怖かった

▼先生と煽てられては損な役　ゆき

▽先生と煽てられては損ばかり

▼我が夫婦反面教師しています　美穂

▽わたしたち反面教師しています

▼恩師から寂しい欠席届け着く　開子

よーく分かる。でも、ここ敢えて「寂しい」をカットして、シンプルに。大丈夫、どれでも、寂しさは十分伝わる（はず）。

▽恩師から欠席届け着きました

▼太郎花子懐かしい名の同窓会　洋一

これもまったく一緒。「懐かしい」を敢えてカット。それでも伝わる（はず）。

▽太郎がいます花子もいます同窓会

▼先生と呼んでおいたら間違いない　㊟洋子

思わず笑った。なるほど、心理を突いている。となると、洋子さん、ここはこの際、大胆に遊んでみませんか。

▽とりあえず先生と呼ぶとりあえず

▼3Kの職業に入る教師です　なつみ

▽3Kの職業入りをする教師

▼働き方改革先ずは先生文科省　のぞみ

いいたいこと分かるが、詰め込み過ぎない。

▽働き方改革先ずは教師から

④句の中に、自分がいるか。

▼当選で今日から先生一年生　㊝正子

現代川柳は、自分を詠むことでもある。この句、このままでは他人事。でも、このテーマを、たとえ嘘でも、自分の側に引っ張り込んでしまって、自分として詠むのだ。

▽当選万歳今日からわたし一年生

おめでとう。正子さんは、夢の中で、市会議員、イヤ、国会議員になりましたとさ。

○は佳句。◎は優秀句。

○喜寿すぎて誰が恩師か分からない　奈津子

○先生の斜め後で盗む芸　徳利

○教員になったが職がありません　弘美

◎先生と呼ばれ先生らしくなる　こみつ

◎先生が先に踊って盛り上がる　和之

◎母さんの手抜き料理を見て習う　由紀子

◎俺よりも後に生まれたけど先生　力

◎先生と社長チーママ使い分け　里子

前回同様、今回も卒業生が出た。めでたい。

まずは伊塚美枝子さん（米子市）。㊥美枝子さんは、平均点の高い優等生タイプ。彼女のこれからの課題は、どんどん冒険することだ。

◎先生は畑隣のおじいちゃん　美枝子

◎いたずらの先生役はいつも兄

○五十年過ぎて恩師と酒を酌む

2人目は、大羽雄大さん（倉吉市）。雄大さんは、美枝子さんとは逆に、荒削りが魅力。

○お名前で呼べぬ先生は先生　雄大

この句、反対にしても面白いのでは。

▽先生は先生名前では呼べぬ

◎パソコンと対話しているお医者さん　雄大

◎先生と呼べばだいたい怒らない　雄大

川柳塔鑑賞

同人吟　古久保　和子

―4月号から

幸せのひとつチューリップが咲いた

田中　ゆみ子

小さな喜びを一つ一つ積み重ねて、幸せを実感している作者の、細やかな感性の豊かさや、温かさが伝わってきました。

夢ばかり食べて大きくなりました

酒井　真由

夢を食べて大きくなれるのは、若い証拠です。これからも沢山の夢を食べて、どんどん大きく羽ばたいて下さい。いつも青空のような、大らかなお人柄の方でしょう。

立春という字にホッとする命

辻内　次根

「春」の一字ですべての命が動き出すような気がします。体で感じるよりも文字で感じる春の方がなんとなくワクワクしませんか。外出の楽しい季節、ペンとメモを持って、命を春風に預けに行くのも良いかも知れません。

二人なら握手のできる肩も抱く

亀岡　哲子

人間は、一人では生きられないの一句です。人と人の温もりで支え合い助け合ってこその社会です。温かい人柄の溢れた気持ちのいい句に出会いました。

この世には傘を忘れたままである

谷口　義

忘れた傘を思いつづけるのはまだまだこの世に未練がある証拠、やり残したことがたっぷり有ることは、元気の源かも知れません。傘を開けば、みんな集まってきます。日傘、雨傘みんな開いてこの世をたっぷり楽しみましょう。

百歳の私に手紙書いている

加島　由一

はっきりと目標を持っている人の力強さを感じました。百歳になってもきっと川柳をつくっているはずです。未来の自分にどんなことを書いているのでしょう。

九十四歳一生懸命生きる母

松本　知恵子

年々、今まで軽く出来たはずのことが、そうでなくなる。日々実感していることです。まして、ご高齢のお母様はそれ以上のことでしょうが、見守っている貴方の眼差しのやさしさが伝わってきます。

手ぶらでも行けば喜ぶ老母が居る

平田　実男

何歳になっても親は子を案じるものです。時々顔を出すだけでも親孝行。その親の年齢に近くなっての、実感かもしれません。

さびしかった頃の靴先とがってた

川本　真理子

空回りしている自分に八つ当たりして、ますます自己嫌悪に陥る悪循環は、その尖った靴先で空缶でも蹴ったらスッキリするかもしれません。

結び目に一度ほどいた跡がある

楠原　富香

今ここに立っているのも、様々をくぐり抜けての現在地です。人の巡り合いも紆余曲折を乗り越えてこその硬い絆となるのでしょう。

踏んづけた昨日がそのままで残る

石橋芳山

誰でも、過去は過去と上手く片づけられるものではない。人間の巾は、一夜では出来上がりません。昨日の積み重ねがあればだと思います。「踏んづけた昨日」こそ財産のひとつではないでしょうか。

撥ね返すバネだんだんと緩くなる

米澤俶子

バネの力が緩くなったのではなく、人間の度量が大きくなったのではないのでしょうか。撥ね返す馬力があった頃を懐かしく羨ましく思うのも、今が穏やかであるからです。

銀の雨ドラマのように別れよう

西田美恵子

モノクロ映画のワンシーンのような一句。経験か憧れか、ロマンチックな気分になれる雨でした。

街の灯にとけてアリバイ無いひと夜

山口高明

殿方の願望のようなつぶやきです。コートの襟でも立てて、名優気分で彷徨って下さい。でも、家に帰ったら説明はしっかり出来るようにして下さい。

折鶴になって恋追う再生紙

伊達郁夫

再生紙は「紙」かそれとも「自分」なのか。何度でも挑戦が出来ることは素晴しい事です。掘り下げて味わう楽しい一句です。

規格外ばっかりだけど無農薬

吉田弘子

人間も野菜も無農薬でのびのび育った方が良いはずです。どちらも、自然体で味も笑顔も最高です。

エネルギー口に集まる歳になり

北野哲男

美味しいものを頂き、御喋りを楽しむ、体力はそこそこでも、良き仲間との楽しい一時は宝物です。

重宝なお口で錆びる暇がない

武本碧

「口が錆びる」楽しい表現です。みんな心当たりが有りそうで、ドキッとします。

雨の日は雨と言い聞かせてゴロ寝

糀谷和郎

ごろ寝する理由を上手に見付けて、雨に気の毒な気もしますが、みんな同感の一句、本当に川柳と巡り合っていてこその納得の仕方に、楽しくなりました。

本音しか口にしません一途です

中居善信

堂々と本音が言えるのは、生き方に迷いがないからでしょう。背筋の伸びる思いです。

心まで見抜かれそうな猫に合う

酒井紀華

路地に住む野良猫は人間観察が趣味のよう。どうやら、住民票を持っているらしい。

自然に育てられ自然へと返る

杉野羅天

都会の高層マンションで育った子どもたちは、何処へ返って行くのでしょうか。

健康法だけはいっぱい知っている

髙杉力

知っていても実行をしている人は果してどのくらいいるのやら、知識を一杯詰め込んでも論外です。

半熟卵とろりと梅のほころんで

森茜

作者のゆったりとした暮らしのリズムに合っているのでしょう。

水煙抄鑑賞

―4月号から

稲見則彦

お互いを悪友と呼ぶ飲み仲間

田中辰夫

家内に言わせれば、飲み仲間は大概悪友と分類・評価される。しかし、彼は時と場合により口裏を合わせてくれる、力強い味方でもあります。

ばったりと出会い覚悟の立話

貝塚正子

「お元気で、さようなら」だったら何のことはない。しかし、相手は名うての話好き。覚悟の長い時間が流れます。

職業欄年金暮しと書いておく

小畑定弘

「無職」の二字には一抹の寂しさが漂います。かつて、「主婦」と書いて訂正を余儀なくされた方がいました。

夜が明けたらしい隣の雨戸開く

鈴木たけし

良きにつけ悪しきにつけ毎日のことだから、お隣の存在は大きい。付き合いにもそれ相応の工夫がいる。お裾分けは嬉しいが、ブルの雪塊だけは遠慮したい。

春のこと受験・失恋・喫茶店

相見柳歩

リズミカルな句にのめり込んでしまいます。と同時に、喫茶店で一体何があったのかと、スズメたちは興味津々です。

お雛さま私は古稀になりました

吉道あかね

初節句に贈られたお雛様はちっとも歳をとらないのです。でも私は嘆いていない。そう、長い人生を歩んだのだから。

皆同じ二十四時間持って生き

小栢こずえ

歳とともに一日が早いとつくづく思います。折角だから、その二十四時間を有意義に過ごしたいものです。

いい句ですホメられ二年没の海

輿水弘

「いい句だがここはちょっと」と添削を受け、まるで自分の句ではない一句が残ることがあります。さて、没の海からは、明日の朝日が昇ります。

頬杖をつけば少女に戻るよな

加藤江里子

頬杖をつき溜息一つ。眼裏の「少女」は思春期真只中のわたし。場所は放課後の図書館です。

若いっていいな貴景勝に紀平梨花

森下よりこ

汗流し努力する若い人からは、感動と生きる喜びが伝わってきます。コートからは「大坂なおみ」のオンライン。

やさしさがこころの箍をそっと解き

岡村風琴

優しさを素直に感じられるために、どれ程の時間が流れたのでしょうか。「やさしさ」と「箍」に惹かれます。

手ぶらでと言われ手ぶらで行く勇気

松尾信彦

他家に呼ばれたら、最小限のマナーは必要です。でも、額面通りだとしたら、その勇気に敬意を表します。

恋してはならぬと降車ボタン押す

真島久美子

バスの隣の席に乗り合わせたのは、好きなタイプの子。どきどき、恋の予感がする。咄嗟に、ボタンを押したのです。

101 昭和という時代

この原稿を書いている今は三月中旬。四月一日には新しい元号が発表され、五月一日から新元号に切り替わります。

このような「時代の節目」に居合わせたのは幸運かもしれませんが、昭和がますます遠くなってゆきます。この機会に昭和を詠った句で思い出深い時代を振り返ってみましょう。

口笛がいつも聞こえていた昭和　高杉　千歩
琴線に触れる昭和の流行歌　矢野　良一
振り返る昭和に歌が欠かせない　吉田　陽子
ナツメロが好きで昭和はもっと好き　上野　楽生
昭和残照美空ひばりよモンローよ　河合　成近
CDが昭和の歌を繰り返す　牛尾　緑良

青春時代の思い出はその頃に流行った歌とリンクしていることが多いものです。裕次郎の「口笛が聞こえる港町」は昭和33年の発売。この「いつも聞こえていた」を、「作者が愛した人の口笛」と受け止めることもできますが、やはり、昭和という時代への「懐かしい想い」を象徴したものでしょう。

アンパンのヘソは昭和の生き残り　木本　朱夏
昭和史に芋もかぼちゃも贅のうち　米島　暁子
昭和一桁へバナナが安過ぎる　平田　実男
昭和史の中で兎の肉も食い　土橋　螢
古き良き昭和が残る立ち飲み屋　松岡　篤
輪になって昭和を語るコップ酒　木村柳心児

歌は心に沁みついていますが、食べ物は胃袋に沁みついて生涯忘れません。あの頃のアンパンが超旨かったのは芋やカボチャが有り難かった時代背景があります。バナナは高級品で祭りのご馳走は裏庭で潰した鶏や兎でした。

料理屋とかスナックで旧い話は似合いません。昔話に花を咲かせるのにピッタリなのは立ち飲み屋でしょう。

美しい日本を知っている昭和　神野きっこ
昭和では隣はもっと近かった　甲斐　保子
手加減のあった昭和の子の喧嘩　生田　和之
しみじみと父の昭和を聞く夜釣り　田中　敦子
昭和から時折降ってくる火花　松岡　重子
昭和史の苦さ忘れていいですか　福原　悦子

遠い親戚より近くの他人、向こう三軒両隣はオカズを分け合う程の仲の良さでした。子供たちも集団で走り回っていたのでそれなりのルールがありました。現代の「一人でやるゲーム機」では喧嘩の手加減も身に付かないでしょう。

ただ、楽しい思い出ばかりではありません。残酷な戦争がありました。思い出したくない人も多いことでしょうが、感傷的に美化することなく、自分自身が生きた「時代の証人」として、正確に次世代に語り継ぐのも私たちの役目です。

捨てられぬ昭和がつまる天袋　北野　哲男
押入れの奥にしまってある昭和　鎌田　京子
捨てられぬ昭和の錆びた肥後守　水野　黒兎
公衆電話昭和のかたちして座る　倉益　一瑤
平成の子等に昭和は大昔　村上　玄也
地デジ化でまたも昭和が遠くなる　吉田　弘子
六十年生きた昭和をいとおしむ　桑名　孝雄

（投句２０３名）

いよいよ「令和」の幕が開きました。

新元号が発表されたその瞬間から、さまざまな業界で、その名を入れた商品が売り出されましたが、わが川柳も負けてはいません。

たちまち新元号を読み込んだ句が、句会で、あるいはカルチャー教室で詠まれました。こうして徐々に「れいわ」に馴染んでゆくのでしょうね。

では、ナビを。

譲られた席は素直に坐りましょう

西宮市　福島　弘子

（評）譲った人が坐ってくれないと、バツが悪いものです。そんな歳じゃないのはわかっていますけど。

新元号急に葉っぱも伸びました

大阪市　柴本ばっは

（評）新しい時代の幕開けに、景色が急に変わったように思えます。草木も気配を感じ取ったことでしょう。

無農薬虫が歩いた跡がある

高槻市　島田千鶴子

（評）虫が喰ったではなく、歩いた跡とは恐れ入りました。農薬の心配無く、虫もさぞ喜んだに違いありません。

深呼吸するとアイディアふわり湧く

豊中市　藤井　則彦

（評）深呼吸って、身体にも心にも本当にいいそうです。春の空気、初夏の空気をいっぱい吸いたいものですね。

ご注意は真摯に受けて何もせぬ

四條畷市　吉岡　修

（評）アハハと笑うしかありません。しかし、これはなかなかの強者と感じ入りました。

もったいない皆使い切るおばあちゃん

大阪市　笠嶋　恵美

（評）「おばあちゃんの知恵袋」という本、ありました。生活の達人の知恵に驚かされること多いですねえ。

新入社まず古株に試される

堺　市　遠山　唯教

（評）どこにでもいるんですよね、お局さまは。手荒い歓迎にまず耐え、どうどうと自身も古株に育って欲しいデス。

一人だけ贅沢をしてスミマセン

大阪市　坂　裕之

（評）どんな贅沢かしら。何かと書いてないと、あれこれ想像が膨らんで、よけいに気になってしまいます。

故里の野菜と遊ぶ十連休

羽曳野市　徳山みつこ

（評）十連休、喜んでばかりの人って少ないのでは、と思ってしまいます。でも、野菜相手なんて幸せそう。

ＩＱは高いが常識に欠ける

大阪府　米澤　俶子

（評）キビシイご指摘ですがその通り、失言を繰り返す政治家など見ていると、エエ大学出たんやろと言いたいです。

倉吉市　伊藤　嘉昭

平成と名ある印刷捨てきれず

三田市　野口真桜子

伸びすぎた希望に添木しています

神戸市　上田　和宏

窓際の居心地の良さ知っている

西脇市　七反田順子

三食を忘れたことがないうさぎ

倉吉市　牧野　芳光

説教の切れ目どこにも見つからぬ

八尾市　山根　妙子

月組のステージ見ます羽根つけて

黒石市　北山まみどり

困ったな体がふたつあるみたい

米子市　成田　雨奇

おいしいと思うものしか飲まないもん

大阪市　小野　雅美

寂しくてひとり遊びが上手くなる

寝屋川市　籠島　恵子
ありえへん事が起っているこの世
大洲市　中居　善信
大根も一花咲かす意地を持つ
松山市　柳田かおる
ストローをいま遺伝子が通過中
米子市　八木　千代
モデルチェンジ異常気象のせいかしら
河内長野市　山岡冨美子
もしかしてあの懐かしいちんどん屋
高槻市　片山かずお
春ですね緑を少し濃くしましょ
佐賀県　真島久美子
退化した羽根が私をそそのかす
塩竈市　木田比呂朗
取説の通りに使い毛が生えた
大阪市　原田すみ子
一杯のコーヒーゆとりでき勝てた
橿原市　居谷真理子
大阪弁うどんのだしが利いている
弘前市　髙瀬　霜石
口角を上げると伸びる棒グラフ
寝屋川市　平松かすみ
根っ子から考え直す時が来た
防府市　坂本　加代
命綱しっかり握るコミュニティ
豊中市　木藤こみつ
ポパイみたいになれるホウレン草が好き
香芝市　大内　朝子
アニメだとかぶも食べたり喋ったり
大阪市　古今堂蕉子
無駄とは知りつあえて説教
唐津市　仁部　四郎
九階のベランダに棲む草もある
高槻市　富田　保子
合鍵も未練もポイと拾てた森
豊中市　水野　黒兎
羽根飾りちょっと小粋にパリのカフェ
千葉市　海老池　洋
水耕野菜土の温みに憧れる
豊橋市　西郷紀美代
出来映えは上々でした罰ゲーム
弘前市　髙森　一呑
青い空どこにも嘘がかくせない
寝屋川市　森　茜
泣きべその腕白なりし弟よ
横浜市　菊地　政勝
珍客ヘヌードルというおもてなし
松山市　宮尾みのり
ＡＢＣ私ＸＹＺ
沖縄県　森山　文切
麺をすするのもネットで叩かれる
東大阪市　佐々木満作
一石を投じた案が開花する
奈良市　大久保眞澄
形にははまらない子になりました
仙台市　月波　与生
質問は食事終ってからどうぞ
富士見市　中島　通則
円周率呪文のように続きます
和歌山市　磯部　義雄
しっかりと目に焼き付けて食べましょう
鳥取市　福西　茶子
私の骨など拾わなくて良い
朝霞市　前田　洋子
孤食では半減しますおいしさも
大阪市　寺井　弘子
春を待つプラス思考の彩が好き
三田市　足立つな子
初物をまずは神仏生き仏
鳥取県　斉尾くにこ
てくてくと散歩ひとりの反省会
大阪市　樋口　眞
青汁のお代りをして嫌われる
鳥取市　永原　昌鼓
いい日和ベジタリアンの君と住む
米子市　池田　美穂
ばらばらな家族束ねるのは私
高槻市　松岡　篤
老い二人デートするのは道の駅
三原市　笹重　耕三
蕎麦でも啜ろうか平成の最後

７月号発表
（5月15日締切）

（平本　勝彦　画）
柳箋に２句

第七回　春の川柳塔まつり誌上大会

第七回春の川柳塔まつり誌上大会に際し、北は北海道から南は沖縄まで1道2府41県から769名のご参加を戴きました。有り難うございました。また貴重な誌面に誌上大会要領をご案内、ご掲載賜りました各川柳社、個人的にそれぞれご支援、ご紹介くださいました皆さまのご厚情に心よりお礼を申し上げます。

ご投句戴きました作品は、無記名の句箋のまま6人の選者に送付し、選句をお願い致しました。お忙しい中をご選句戴きました選者の皆さまに深く感謝申し上げます

入選作品は各題とも平抜　110句、秀句　10句、特選　2句、計122句です。なお各題特選にはささやかですが賞品をお送りいたしました。

今後とも皆さま方のご健吟とご活躍をお祈り致します。有り難うございました。

各題特選句

鍵

真島久美子　選

指先の涙認証されません　群馬　伊藤正美

鍵掛けた影だひとりで立っている　高知　辻内次根

三宅保州　選

楽園の鍵を忘れたイブの罪　愛知　猫田千恵子

鍵のない故郷みんな顔見知り　埼玉　根岸方子

顔

岡崎守　選

防犯のカメラにピースして帰る　千葉　日下部敦世

酸欠のビルの谷間の白い顔　宮崎　さとう一徳

山本希久子　選

クローゼットに顔が十ほど吊ってある　奈良　居谷真理子

ATMの前でのっぺらぼうになる　島根　石橋芳山

雑詠

赤松ますみ　選

日溜りで咲いているのはみな仲間　兵庫　吉村めぐみ

笑った日ばかり纏めている輪ゴム　大阪　鴨谷瑠美子

小島蘭幸　選

生きている嬉しさ子らの声がする　兵庫　大黒政子

宇宙船できても地震防げない　大阪　上西啓仁

鍵

真島　久美子　選

真っ向勝負わたしに鍵は不要です　青森　北山まみどり
鍵かけて一人芝居のリハーサル　広島　渡辺　典子
ＱＲコードの中で鍵を解く　静岡　望月　弘
ため息をつかせる鍵に成り果てる　兵庫　河内谷　恵
卒業文集の中に君の鍵　岡山　坪井　新
鍵穴の中で蛹になってゆく　岡山　木下　草風
国境越え繋がる鍵は愛だろう　大阪　出口セツ子
ドアチェーン外せば何か起りそう　兵庫　成定　竹乃
逆転の鍵を拾った帰り道　滋賀　佐久間裕子
鍵のない暮らしに慣れて星を抱く　鹿児島　平瀬　芙蓉
無関心その無をはずす鍵がない　岡山　大石　洋子
パンドラの箱に潜んだキーワード　和歌山　武本　碧
正論に鍵かけておくオフタイム　愛知　高浜　広川
ロック解除　窓へ日差しがあったかい　愛媛　岡山フジエ
過ちの鍵と承知で握りしめ　大阪　坂本　星雨
鍵束をじゃらじゃら鳴らす共犯者　愛知　浅井　典子

合鍵を愛した日々もありました　広島　蔀　帆子
ラの音の鍵を亡くしてから寒い　広島　田辺与志魚
情という鍵ならいつも開けている　岡山　松本　藍
ヒッチコックごと覗き見る鍵の穴　兵庫　幸田　厚子
鍵をした柩どこでもドアとなる　鳥取　斉尾くにこ
形なき鍵がわたしを独りにす　兵庫　佐藤寿美子
コウノトリ落とした鍵を届けます　大阪　壇　信子
合鍵が五分で出来るのも恐い　兵庫　堀　正和
ラララララ　鍵がどこかに行っちゃった　静岡　鈴木千代美
鍵のない過疎の納屋には熊が来る　兵庫　福田　好文
鍵穴の天に散らつく細雪　兵庫　長川　哲夫
母真似て鈴とセットの鍵を持つ　大阪　藤井　裕美
地魚と地酒こころの鍵が開く　大阪　木見谷孝代
成功の鍵泥臭い誠実さ　広島　小畑　宣之
合鍵の一つドラマをこじ開ける　大阪　穐山　常男
舞台裏キーパーソンに顔がない　兵庫　村岡　義博
鍵穴の向こうで花が咲き誇る　和歌山　倉橋　悦子
冬天の真下で探す鍵ひとつ　兵庫　大黒　政子
鍵かけて終身刑にする秘仏　三重　橋倉久美子
神様がマスターキーを持っている　三重　小川はつこ
合鍵を造り恋人募集中　和歌山　酒井　京子
もう一つ鍵があるから気がゆるむ　大阪　太下　和子

宇宙論どれも合わない鍵ばかり　鳥取　牧野　芳光
日記帳の鍵ならとうに捨てました　愛媛　吉松　澄子
幸せの鍵を握って割烹着　岡山　古山はつ子
鍵の束持って迷路に立っている　京都　西山　竹里
無礼講鍵穴のぞくお月さま　兵庫　吉村めぐみ
人間が居るから鍵の音がする　茨城　樫村　日華
恋人の岬に鍵を吊り下げる　和歌山　藤原ほのか
蹲いた鍵はときどき嘘をつく　和歌山　楠原　富香
正体の分からぬ鍵の黙秘権　茨城　岡本　恵
世の鍵をたくさん持った人が勝ち　長野　甲野　美文
握りこぶしハートの鍵で開けましょう　島根　三浦モナカ
以心伝心鍵穴を覗き合う　大阪　梶原　弘光
チコちゃんに叱られぬよう鍵かける　大阪　田中　廣子
牛乳箱に鍵　ふるさとは大らかだ　広島　小島　蘭幸
脱皮するところは見ないスペアキー　岩手　鷹觜　閲雄
板チョコで型どりされたボクの鍵　鹿児島　前田　一天
鍵穴を探す金魚のひとり言　愛媛　越智トシ子
言い訳を許してくれる鍵ひとつ　愛媛　田中　なお
感情を抑えるために鍵かける　兵庫　山口　光久
留守の戸に母の煮物が置いてある　長野　筒井　益子
鍵の束抱えて春に逢いに行く　大阪　関　よしみ
やる気満々第二の鍵を開けている　和歌山　堂上　友紀

別れるつもり全身に鍵かけて　京都　中林　典子
海底に鍵をかくしている人魚　岡山　国塩志保里
オートロック言いたいことは言いました　愛媛　郷田　みや
鍵握る男素うどん啜ってる　大阪　小川賀世子
こころ残りいまだに解けぬキーホルダー　奈良　安土　理恵
沈丁花こころの鍵を開けにくる　大阪　徳山みつこ
鍵穴をスッと抜け出たのはルパン　東京　山田こいし
合鍵はまだ渡せないさむいから　岡山　丸山　威青
幸せの鍵ユニクロで買いました　奈良　西澤　知子
財産もないのにオートロック付き　大阪　内藤　憲彦
鍵っ子がぽつんと夕焼けのベンチ　奈良　笹倉　良一
師の恩に報いる鍵は手離せぬ　広島　日谷　寛
胸襟を開いて見せた鍵の束　佐賀　仁部　四郎
鍵付きの机に青い実を隠す　神奈川　久保田徳子
お互いにひとつの鍵で生きて来た　大阪　吉道あかね
鍵束の一本海へ投げました　京都　阪部　文子
頭から足の先まで生きる鍵　鳥取　吉田　陽子
鍵穴は覗いてみろと言う形　福岡　石田　酎
合鍵で酒が毎晩やってくる　鳥取　竹村紀の治
鍵穴は人を疑う癖がある　大阪　津村志華子
鍵をください僕はあなたの奴隷です　岡山　従野　健一
大泣きをしました鍵のないトイレ　大阪　井上恵津子

鍵よりも守ってくれる人と居る　大阪　原田すみ子
鍵の束 男が男 主張する　愛知　竹内そのみ
マクドで拾った正倉院のカギ　大阪　井上 一筒
色あせたリボン結んだ鍵のこと　兵庫　松本ゆかり
合鍵を持つ女あと一人居る　大阪　河合 陽子
合鍵を返すひとりのホットレモン　島根　藤井 寿代
黒鍵を軽やかに踏む猫と棲む　青森　稲見 則彦
定刻に持ち出す夜を開ける鍵　島根　石橋 芳山
鍵穴に修正液の跡がある　愛媛　鎌倉 俊一
雪の日はショパンと鍵で出来ている　石川　岡本 聡
鍵っ子で悪戯っ子で泣き虫で　大阪　大治 重信
オブジェの街を彷徨っている錆びた鍵　山口　中前 幸子
忍び逢う鍵へ程なく冬の音　岡山　市田 鶴郁
合鍵がなんで合わない片時雨　兵庫　奥澤洋次郎
約束を忘れた鍵が錆びている　香川　嶋村 幸
鍵穴に僕によく似た僕が居る　静岡　佐藤 灯人
本物の鍵穴だけは教えない　千葉　廣瀬 良麿
最初から鍵はなかったことにする　奈良　きむらまさこ
仲直りしましょう鯖缶を開ける　青森　髙瀬 霜石
老いてゆくことを恥じない銀の鍵　栃木　荻原 鹿声
鍵穴をのぞく喜の絵図哀の絵図　大阪　山野 寿之
人生のキーポイントにいつも詩　和歌山　前岡由美子

真実の口にロックがかけられる　和歌山　山東日出男
鍵あける一瞬とおり抜ける風　大阪　神田 良子
結末にやさしい鍵がひとつある　兵庫　青木 公輔
合鍵は返すようやく波の音　愛媛　村山 浩吉
父が居る南京錠の安堵感　福島　安藤 敏彦
へその穴にぴったり嵌る鍵がない　和歌山　田畑 宏

秀句

疑問符の鍵で感嘆符を探す　奈良　居谷真理子
合鍵は爺さんの腹巻の中　静岡　佐野由利子
稜線に合わせて鍵が開いてゆく　長野　西沢 葉火
待つ人もいない扉をコトと開け　京都　都倉 求芽
鍵穴に灰汁がたまってくるのです　愛媛　大内せつ子
大笑いしても独りの鍵の音　広島　山本 恵子
呪文から指紋まである僕の鍵　青森　むらのひとり
川へゆくたび軽くなる鍵の束　福島　斎藤 秀雄
オモチャのチャチャチャ鍵穴を通過中　石川　新保 芳明
わたしを守る私を縛る鍵の束　大阪　山本希久子

特選

指先の涙認証されません　群馬　伊藤 正美
鍵掛けた影だひとりで立っている　高知　辻内 次根

軸吟

地の底に辿り着くまで回す鍵

鍵

三宅保州選

もう使う事ない鍵を捨てられず　大阪　雪本　珠子
鍵閉めて今からツルの恩返し　和歌山　佐藤　倫子
遺伝子の連鎖をはずす鍵がない　岡山　大石　洋子
刺すような別れの決意帯びる鍵　山口　有海　静枝
結末にやさしい鍵がひとつある　兵庫　青木　公輔
気配りの鍵を時々かけなおす　愛媛　佐尾　文子
この鍵は今燃えている愛の崖　奈良　島岡美智子
成功の鍵は努力という二文字　大阪　油谷　克己
鍵っ子は走って帰る事がない　兵庫　福田　好文
日常のはざまに鍵が落ちていた　兵庫　小山　紀乃
井戸端が無くなり鍵の要る暮らし　鳥取　細田　裕花
秘密の部屋鍵はとっくにお蔵入り　静岡　竹平　和枝
合い鍵が呼ぶと未練がうずき出す　長野　武田　香風
秘密持つ鍵をパズルにしたくなる　愛知　冨田　末男
多数決カギ握るのは最後尾　岡山　遠藤　哲平
オブジェの街を彷徨っている錆びた鍵　山口　中前　幸子

鍵付きの机に青い実を隠す　神奈川　久保田徳子
成功の鍵は地道に積んだ汗　富山　宮本　海風
鍵なんかなくても入れる家です　大阪　谷口　義
透明な鍵を見つけるための旅　京都　西山　竹里
合鍵を渡したときは愛でした　愛媛　浜本　光子
鍵持たされ得意満面ランドセル　兵庫　能勢　利子
鍵かけて私にもどるレモンティー　愛媛　鎌田　昌子
淋しさを言えぬ鍵っ子犬拾う　和歌山　上田　紀子
留守番の夫に鍵を掛けて出る　岐阜　武藤　敏子
鍵を無くした晩年のシンデレラ　岡山　安原　博
鍵をください僕はあなたの奴隷です　岡山　従野　健一
脳内に鍵をかけたい場所がある　大阪　神野千恵子
合鍵に自己責任のストラップ　大阪　落葉　ふみ
アナログの鍵っ子昭和懐かしむ　奈良　安福　和夫
人科にも国境という鍵がある　茨城　樫村　日華
愛と憎行きつく先は同じ鍵　静岡　小林ふく子
好きなのに鍵が合わない天邪鬼　岐阜　藤吉　政春
憲法の鍵国民が持っている　島根　田中　堂太
ポリシーの無い男鍵置き忘れ　大阪　西村　哲夫
鍵と錠ときには合わぬこともあり　兵庫　長谷川善輔
荒れる子が探し求める愛の鍵　広島　吉川美佐子
鍵っ子にカップラーメン置いてある　熊本　中原たかお

愛というたった一つのキーワード
まだ在庫ありますスペアキーの恋
真相を闇に包んで鍵かける
夢をみるたびに鍵穴デカくなる
捨てました心に鍵はいりません
鍵穴の向こうはきっとシャングリラ
合鍵がなんで合わない片時雨
朽ちるまであなたの鍵を捜します
身から出た錆の数だけ鍵の穴
合鍵は涙の壺に沈めよう
スペアキー返し見上げた空の青
QRコードの中で鍵を解く
偽の鍵いつもポストに入れてある
合い鍵を心で探す倦怠期
鍵穴に明日の予定を詰めておく
鍵のない檻で自由を持て余す
母さんの笑顔マスターキーですね
わたしを守る私を縛る鍵の束
鍵穴に灰汁がたまってくるのです
卒業文集の中に君の鍵
鍵はどこ音で知らせてくれないか
鍵なんてポツンと山の一軒家

茨城　岡本　恵
東京　星出　冬馬
大阪　冨山ルイ子
大阪　籠島　恵子
大阪　柴田　桂子
愛媛　永井　松柏
兵庫　奥澤洋次郎
富山　滋野百合子
大阪　宮西　弥生
宮崎　間瀬田紋章
兵庫　古橋　茂子
静岡　望月　弘
大阪　谷口　東風
千葉　長谷川庄二郎
香川　嶋村　幸
大阪　吉村久仁雄
岡山　塩谷たえ子
大阪　山本希久子
愛媛　大内せつ子
岡山　坪井　新
鳥取　木村美智子
大阪　中山　春代

鍵穴が合わなくなった倦怠期
鍵みんなかけ徘徊の旅に出る
幸せの鍵はお金と思いやり
お嫁さんに鍵を預けて縮む距離
ドアチェーン外せば何か起りそう
合鍵は甘い余熱を抱いている
初対面の人には鍵をかけている
ホルダーに残る合鍵恋の跡
鍵穴の向こうに君の現在地
鍵かけて引っぱってみる老いの癖
まさかなどないはずの鍵掛け忘れ
思春期の心のカギが開かない
断捨離と勿体無いの鍵ふたつ
生きる限り心の鍵は手放せぬ
呪文から指紋まである僕の鍵
鍵かけたばかりにチャンスよそへ行く
鍵穴の向こうで花が咲き誇る
鍵っ子がスマホタッチでドア開ける
鍵かけた筈の話が漏れている
鍵っ子にごめんと詫びる母の文
ゆっくりと回す心を開く鍵
鍵のない檻から出ない虎である

鹿児島　芳　鉄心
島根　松本　文子
兵庫　太田としお
奈良　加藤江里子
兵庫　成定　竹乃
愛媛　山本　毅
三重　小河　柳女
大分　高木　遊楽
奈良　山田　順啓
兵庫　吉村めぐみ
島根　廣江　敦子
大阪　中井　佳子
大阪　髙木　道子
和歌山　堀　冨美子
青森　むらのひとり
兵庫　冨永　恭子
和歌山　倉橋　悦子
兵庫　丹羽　美恵
大阪　米澤　俶子
愛媛　青野　舞
埼玉　宮本彩太郎
大阪　髙杉　力

虐待へ心の鍵が絡み合う
鍵かけたつもりぐるぐる寝つかれぬ
鍵穴に私のすべて潜ませる
やっとこさ視野の端から鍵の音
鍵に鈴つけて首からさげている
鍵束を持って独りの道を行く
合鍵はポストへ以下は省略で
勝因はこれだ笑顔のおもてなし
スペアキーなどいらぬひとすじの愛
子や孫へ心の鍵は開けたまま
使えない鍵を大事に持っている
春の使者元号連れて鍵開ける
合鍵におんなの声は花模様
鍵かけた心を広くする会話
知らぬ間に鍵が何処かへ歩き出す
我が妻の心を開く鍵はチョコ
キーマンが次々消えるミステリー
東風が吹き心の鍵を開け放つ
年号に合わない鍵で生きていく
リセットを戸惑う鍵のパスワード
スペアキーだけは作らぬ頑固者
定刻に持ち出す夜を開ける鍵

鳥取　中村　金祥
京都　三宅　満子
愛媛　川又　暁子
京都　山本　昌乃
大阪　貝塚　正子
北海道　三浦　強一
島根　藤井　寿代
奈良　木嶋　盛隆
東京　上原　稔
大阪　松尾美智代
大阪　井丸　昌紀
大阪　川本　信子
愛媛　鎌倉　俊一
和歌山　北原　昭枝
大阪　金川　宣子
大阪　阿部　俊八
大阪　上出　修
岡山　赤本富美子
兵庫　春名　恵子
広島　飛田　陽子
奈良　林　ともこ
島根　石橋　芳山

鍵握る男の舌が乾きだす
スペアキー近所に預け独り住む
キーマンとなだめすかして担ぎ出す
鍵穴を覗く瞳の好奇心
さようなら鍵の番号変えておく
私に合わせて鍵もあまくなる

秀　句

燃え尽きる心を癒す愛のキー
神さまのキーホルダーでセコムする
只一つ開けない鍵を父が持つ
パスワードばかり増やして生きている
スマートキー押せばウインクする愛車
キーレスキー世渡り少し急ぎ過ぎ
人知れず心にロックして女
合鍵は返しませんよ　春の雲
楽しんで帰れば家は鍵かかり
きみと僕だけが持ってるキーワード

特　選

楽園の鍵を忘れたイブの罪
鍵のない故郷みんな顔見知り

軸　吟

会社の鍵すべて握っている守衛

愛媛　大河富美子
兵庫　北野　哲男
宮城　木田比呂朗
大阪　初代　正彦
兵庫　飯田　京子
鳥取　政岡日枝子
大阪　鈴木ひさ子
大阪　井上恵津子
愛媛　月原つくし
宮城　月波　与生
福井　西谷　公造
大阪　原　洋志
愛媛　山本カヨ子
奈良　太田のりこ
富山　小西眞沙子
愛媛　栗田　忠士
愛知　猫田千恵子
埼玉　根岸　方子

顔

岡崎　守選

まだ欲があってヘソクリ思案顔　鳥取　橋本　整
名刺捨て顔一つずつ消して今　鳥取　田賀八千代
ありふれた顔ですお安くしときます　岡山　木下　草風
顔写真撮ると凶悪犯になる　三重　小川はつこ
本当の顔は金庫で眠ってる　富山　扇谷　実
奥の手に使う素顔は光らせる　大阪　寺井　弘子
すぐ顔に出る質出世には無縁　広島　山本　恵子
顔のない男で生きる定年後　徳島　小畑　定弘
比べたら河馬の顔には勝っている　大阪　津村志華子
定年でまず一つ目の顔終えた　大阪　吉岡　修
上司には目尻を下げているらしい　和歌山　石田　隆彦
四捨五入わたしの顔が此処にない　島根　伊藤　寿美
世渡りのうまい男の百面相　岡山　戸田まさこ
善人の顔をしばらく休みます　愛媛　山内もとこ
サングラス外せば優しい瞳あり　大阪　畑中　節子
一心にスマホ見詰める顔寒い　和歌山　小谷　小雪

青春が火の出る顔を持ち歩く　静岡　望月　弘
覚えてはもらえぬ顔だ吠えてみる　兵庫　冨永　恭子
本当の顔を探してカメレオン　鳥取　竹信　照彦
まだ自信持てない顔だなと鏡　京都　寺島　洋子
過疎の村守り抜く顔捨てる顔　佐賀　横尾　信雄
清濁を呑んだ顔には艶がある　兵庫　山口　光久
子の笑顔接着剤になる夫婦　和歌山　酒井　京子
顔色をよむのが上手い出世組　広島　石原　淑子
菓子折の中の名刺に顔がある　静岡　佐藤　灯人
カリスマの顔も醜くする疑惑　熊本　徳丸　浩二
見栄の顔がっかりさせる試着室　奈良　古川　洋子
にこにこ笑う七十点の顔だから　大阪　吉道あかね
福の神わたしの笑顔好きらしい　鳥取　田中　天翔
苦も楽も悟った母の菩薩顔　広島　松田　栄香
失恋の鏡に向かいあっかんべ　東京　上原　稔
貧相な顔でよければ貸しますよ　静岡　竹平　和枝
七人の敵にいい顔渋い顔　兵庫　萩原　狸月
写真には苦労の顔が隠せない　鳥取　坂本とも湖
伴走の夫の顔も老いて来た　鳥取　吉田　陽子
冷やかな顔が並んだ遺産分け　静岡　佐野由利子
顔役が去りどんぐりの背くらべ　鳥取　山本ふみ子
スッピンで気楽心の自動ドア　栃木　中西　茂年

どん底を嘗めて男の顔になる　愛媛　栗田　忠士
見つめ合うだけで幸せだった恋　奈良　毛利　元子
母さんが明るい顔にしてくれる　愛知　冨田　末男
日本の顔であらせる両陛下　兵庫　太田としお
両親の大傑作はボクの顔　岡山　塩谷たえ子
善人の顔に整形したい鬼　奈良　那須　鎮彦
宿敵の笑顔に負けたなと思う　大阪　山野　寿之
僕は胸あなたは顔を見つめてる　石川　新保　芳明
激流に耐えた男の温い顔　兵庫　藤原　紘一
良い顔をしてはストレス溜めている　大阪　藤原　大子
朝じたく今日も戦士の顔にする　愛知　白石　てる
拉致の子は変わらぬままの幼顔　鳥取　中村　金祥
イケメンの頃もあったと言っておく　鳥取　岸本　宏章
たまに花買ってやさしい顔になる　大阪　吉村久仁雄
新しい顔に変えてもアンパンマン　和歌山　田畑　宏
ゴキブリが家族のように顔を出す　島根　田中　堂太
理解した顔で見ている抽象画　大阪　岸井ふさゑ
次の世は少し美男で生まれたい　大阪　江島谷勝弘
美人より笑顔こぼれる人が好き　大阪　松尾美智代
生き残り掛けて戦う野良の顔　広島　飛田　陽子
素顔へとリセットをする一人旅　和歌山　小原　敏照
老人の顔は飽きたと言う鏡　鳥取　新家　完司

化粧した顔へどなたと問い掛ける　和歌山　喜田　准一
原点にいのち輝く人の顔　大阪　岩崎　公誠
飽きっぽい顔のルーツの中にいる　鳥取　木天　麦青
この顔が好きです母が住んでいる　愛知　竹内そのみ
素顔見せあなたの嘘を聞いてみる　大阪　小野　雅美
弛みだすほうれい線を持ち上げる　愛知　西郷紀美代
開けゴマ少し笑顔で言ってみる　愛媛　郷田　みや
眉のない顔と食べてる朝ごはん　大阪　高杉　力
優しさに触れて笑顔の車椅子　宮崎　黒木　栄子
群衆の中の一つの顔である　兵庫　細川　花門
気配りの笑顔を添える介護の手　長野　近藤　魁風
マネキンが美女は私と誇張する　三重　水谷　裕子
露天風呂羅漢の顔が浮いている　兵庫　北野　哲男
本当の顔は鏡の裏に置く　鳥取　倉益　一瑤
やさしい顔すればよかった母さんに　青森　中村みのり
どの顔で苦労させぬと言うたやら　大阪　中井　萌
責任をとりたくはない顔ばかり　鳥取　牧野　芳光
遺伝子の加減乗除で出来る顔　千葉　長谷川庄二郎
バランスの崩れた顔で売っている　熊本　中原たかお
二日酔い敗残兵の顔が行く　岡山　谷内　拓庵
どの顔が素顔か誰もわからない　大阪　平井美智子
言い訳用の顔玄関で作る　大阪　井丸　昌紀

顔パスはまだ使えます天下り　岡山　岩崎　幸子
美人ではないが母似の果報者　富山　島　ひかる
こつこつと磨き上げてく僕の顔　和歌山　堂上　友紀
ひと駅で変身させるコンパクト　静岡　中田　尚
解凍のできる笑顔を模索する　宮城　菅野　實
火も水も潜り仏のような顔　大阪　石田ひろ子
仏頂面で悪いか敵に背は見せぬ　岡山　遠藤　哲平
重い荷を背負うも顔に出さぬ母　広島　中野　妙子
顔パスで木戸をくぐったのも昭和　青森　稲見　則彦
売れぬまま廃棄処分か俺の顔　大阪　中川　一男
笑顔って荷物にならぬ宝物　静岡　小林ふく子
鞦韆に人生降りたらしい顔　奈良　太田のりこ
一点を睨む無念なデスマスク　広島　鴨田　昭紀
逢える日の笑顔満開花時計　広島　日谷　寛
拍手して笑ってるのは裏の顔　岡山　小野美那子
ふる里に泣いた顔など見せられぬ　鳥取　前田　楓花
微笑みは一期一会のパスポート　愛媛　土居　久子
言うたって美男美女から売れてゆく　和歌山　柏原　夕胡
どの顔も眩しく光るボランティア　和歌山　磯部　義雄
風葬にしました昨日までの顔　佐賀　真島久美子
チャップリン笑顔の裏に見る愁い　鳥取　伊塚美枝子
ハイヒール脱ぐとキャリアもママの顔　宮崎　黒木せつよ

ふるさとは素顔になれるオアシスだ　愛媛　本田　醇子
マニュアルの笑顔ぎこちなく作る　大阪　伊達　郁夫
ネットで知り合った顔のないあなた　大阪　山本希久子
ATMの前でのっぺらぼうになる　島根　石橋　芳山
顔のない人達ばかり交叉点　島根　松本　文子
ときどきは陽に当ててやる裏の顔　大阪　中村　惠
寝顔にはきっと天使が棲んでいる　京都　西山　竹里

秀　句

善人が彫ると仏の顔になる　和歌山　三宅　保州
スッピンは守秘義務ですと洗面器　静岡　山本野次子
銅像にされると笑う独裁者　宮城　月波　与生
クローゼットに顔が十ほど吊ってある　奈良　居谷真理子
人間の顔に出会った里の駅　大阪　柿花　和夫
顔のないヒト科の群れる大都会　兵庫　藤井　宏造
疲れ切ってるアイドルたちの素顔　石川　藤村　容子
核ボタン握るヒト科の顔ですか　大阪　岩佐ダン吉
バーコード貼られた顔の並ぶ駅　京都　中林　典子
素っぴんで生きよう野の花のように　兵庫　大黒　政子

特　選

防犯のカメラにピースして帰る　千葉　日下部敦世
酸欠のビルの谷間の白い顔　宮崎　さとう一徳

軸　吟

道産子で生きて刻んだ四季の顔

顔

山本希久子　選

太陽の匂いを置いてきた笑顔　奈良　菱木　誠
どの顔も僕を信じてついてくる　佐賀　真島美智子
あの顔もこの顔ももういない冬　岡山　山下　公子
日和見をして輪郭がぼける顔　京都　西山　竹里
念入りに化粧自分を消すために　奈良　板垣　孝志
モナリザは微笑んでなどいないのに　神奈川　相原あやめ
この顔が好きです母が住んでいる　愛知　竹内そのみ
男の森のハンターになる顔だ　山口　中前　幸子
表情筋豊かに今を生きてゆく　和歌山　佐藤　倫子
日本の顔です能も狂言も　愛媛　黒田　茂代
美人ではないが困ったことはない　三重　青砥たかこ
笑顔笑顔可愛いばあちゃんになろう　大阪　小川賀世子
無印のわたしを生きてノーメーク　大阪　鈴木　かこ
泣き顔が美しすぎる不幸せ　奈良　米田　恭昌
笑い顔心の闇をこじ開ける　愛知　山本三樹夫
イケメンじゃないが退屈しない顔　大阪　鈴木いさお

向い風自己責任の顔になる　鳥取　中原　章子
マスクした目だけと話す医者の顔　兵庫　多田　雅尚
後期高齢やっと男の顔になる　北海道　浪越　靖政
神様の出来心らし片えくぼ　大阪　西出　楓楽
顔パスで今日も野良猫やって来た　和歌山　西川　千鶴
胸張って歩けば顔も晴れてくる　千葉　海老池　洋
外面をまだ整える父白寿　兵庫　長島　敏子
ほっとした顔があとがきから見える　大阪　鴨谷瑠美子
防犯のカメラにピースして帰る　千葉　日下部敦世
ままごとの五歳はすでにママの顔　大阪　横山　里子
絵手紙の中に素顔が出てしまう　大阪　木見谷孝代
遺伝子の加減乗除で出来る顔　千葉　長谷川庄二郎
アンパンマンみたいな顔で愛される　和歌山　柏原　夕胡
器量の悪いトマトにもある矜持　愛知　浅井　典子
貸し借りの顔に利息がついてくる　兵庫　古角　尋子
顔に似ず度胸があると言われてる　富山　伴　よしお
理解した顔で見ている抽象画　大阪　岸井ふさゑ
モンタージュイケメンにして自首を待つ　大阪　髙橋　律雄
グレーゾーンに群がる顔のない大人　石川　藤村　容子
顔認証整形美女がはじかれる　大阪　内田志津子
鏡よ鏡もうすぐ米寿我慢だよ　兵庫　東内美智子
冷やかな顔が並んだ遺産分け　静岡　佐野由利子

顔を上に上げても溢れそうな海　　鳥取　平尾　正人
隈取りに睨まれ凍死するモグラ　　愛媛　田中　なお
転んでも歯を食いしばるランドセル　　兵庫　能勢　利子
神様の手抜きの顔が愛おしい　　兵庫　村上　氷筆
保育所の壁に素敵なパパとママ　　兵庫　村田　博
顔のないネット社会に落とし穴　　兵庫　尾崎　一子
招く人できて息子の得意顔　　山口　三木　静江
笑顔なら誰にもできるおもてなし　　愛媛　土居　久子
顔合わすそれだけでよい仲間たち　　兵庫　中野　忠
投資した顔の劣化が止まらない　　大阪　穂口　正子
わかったという顔をする盲導犬　　岡山　大石　洋子
やわらかい顔だ笑顔が寄って来る　　兵庫　冨永　恭子
パワーある顔だ時時吹き出物　　鳥取　細田　裕花
余命告知のあとさきの眉の位置　　京都　阪部　文子
カリスマの素顔を誰も見ていない　　愛媛　永井　松柏
味のある顔には歳がちと足らぬ　　兵庫　山端なつみ
旅の空のっぺらぼうが浮いている　　鳥取　木天　麦青
独裁の国の民には顔が無い　　大阪　阿部　俊八
目が入り龍は天井うねらせる　　京都　斉藤　和子
パパの顔家路を急ぐ戦士達　　奈良　中森　勝代
人恋しい秋はショパンの顔になる　　愛媛　浜本　光子
顔認証濃いメイクにはエラー出る　　和歌山　岸本　幸彦

正直な顔だ恨みが透けたまま　　大阪　小野　雅美
似顔絵の猫は帰らぬ夕やけだ　　大阪　森中惠美子
こんな顔ですがお役に立ちますか　　滋賀　佐久間裕子
脱衣所のカゴに忘れてきた仮面　　神奈川　久保田徳子
責任をとりたくはない顔ばかり　　鳥取　牧野　芳光
土壇場で本音の顔がしゃしゃり出る　　熊本　小濱　春雪
顔のない男で生きる定年後　　徳島　小畑　定弘
どの顔にも似合いの鼻が鎮座する　　大阪　日野　愿
無一文ですが顔ならすぐ貸せる　　兵庫　糀谷　和郎
表情を少しも変えず雪を掻く　　兵庫　前川　淳
天國へ顔認証のお墨付き　　奈良　宇賀　史郎
しわしわの顔化粧水吸い上げる　　大阪　河合　陽子
不本意なままで引き継ぐ親の顔　　鳥取　奥田　由美
九割は化粧でカバーしています　　岡山　松本　藍
風葬にしました昨日までの顔　　佐賀　真島久美子
捨て猫を優しい顔が抱きあげる　　愛知　恵利　菊江
静と乱ふたつの貌を持つ大河　　大阪　佐々木満作
欲を追いいびつな顔になっていく　　長野　内山　克子
酸欠の顔で叫んでいるムンク　　岡山　安原　博
素顔へとリセットをする一人旅　　和歌山　小原　敏照
ポーカーフェイス敵は一枚上である　　鳥取　倉益　一瑤
顔中を口に合唱コンクール　　鳥取　竹村紀の治

鳥取　副井　裕　取りあえずフェイスブックで「いいね！」押す
大阪　石川　典子　尾畠さんの笑顔に翳り出ぬように
和歌山　坂部紀久子　満面の笑顔が走り込んでくる
宮城　木田比呂朗　年金でおくる余生が無表情
大阪　谷口　義　簡単ですが化粧はしています
兵庫　西口いわゑ　悩みなど微塵もみせぬバラの顔
岡山　永見　心咲　乾杯のビール童顔にはジュース
大阪　池田　純子　三角四角笑えばみんな丸い顔
岡山　谷本　正義　いい顔だ挫折何度も味わって
和歌山　福井　菜摘　いつからか妻が城主の顔になり
和歌山　古久保和子　一日を収支計算した寝顔
大阪　太下　和子　素っぴんを見られて笑顔追加する
大阪　髙杉　力　眉のない顔と食べてる朝ごはん
兵庫　山田　耕治　水槽の魚悲しい顔してる
広島　村上　和子　キャッシュレス諭吉の顔に覇気がない
愛媛　山内もとこ　何くわぬ顔で病魔の変化球
奈良　谷川　憲　またひとり昭和の顔が召されゆく
愛知　彦坂　石転　知らん顔されて益々好きになる
大阪　垣見はるみ　ドヤ顔の月がこんなに美しい
奈良　太田のりこ　鞦韆に人生降りたらしい顔
岡山　谷内　拓庵　二日酔い敗残兵の顔が行く
愛知　猫田千恵子　逆光の君は笑っているきっと

大阪　落葉　ふみ　強面がやさしい声で席譲る
静岡　望月　弘　地球儀に戦の好きなデスマスク
東京　上村　脩　柵を捨てて他人の顔になる
沖縄　多良間典男　肩書きが自信過剰の顔にする
大阪　坂上　淳司　商人の笑顔が見えていた昭和
広島　吉川美佐子　川柳の顔が馴染んできた余生

秀　句

大阪　吉村久仁雄　どの顔も幸せだった跡がある
宮崎　間瀬田紋章　深井戸を覗くと少年期の顔に
愛媛　宮尾みのり　いい顔で逝ったそれだけでも救い
鳥取　新家　完司　頼りない顔だと自分でも思う
愛媛　山本カヨ子　横顔は右から惚れてくださいね
三重　小川はつこ　雪焼けをしてはならない雪女
大阪　上嶋　幸雀　顔文字がはびこり言霊が消える
兵庫　大黒　政子　素っぴんで生きよう野の花のように
大阪　川畑まゆみ　顔見たら何も言えなくなりました
宮崎　川﨑　敬女　桜咲き少し悪女の顔になる

特　選

奈良　居谷真理子　クローゼットに顔が十ほど吊ってある
島根　石橋　芳山　ＡＴＭの前でのっぺらぼうになる

軸　吟

ネットで知り合った顔のないあなた

雑詠

赤松ますみ選

うつむいてフォトジェニックに咲く桜　茨城　毛利　由美
邂逅へなんども畳み込む夕陽　大阪　鈴木　かこ
一本の藁雨の跡風の跡　愛媛　高市すみこ
言い訳をしそうな鍋に蓋をする　愛知　石川　典子
春風がコロンと落とす寒椿　島根　川本　畔
欲という奇妙なものを飼いならす　和歌山　倉橋　悦子
頼まれた様に風花舞い踊る　大阪　髙木　道子
メタセコイアの林で会ったのは亡父　大阪　西出　楓楽
正直に転がっている茹で玉子　兵庫　野口真桜子
とか言ってだんだん伸びてくる尻尾　滋賀　佐久間裕子
ネギのような顔してネギの横に居る　京都　寺島　洋子
辛酸を舐めましたねと姫鏡　岡山　山崎三千代
三猿の胸に膨らむ不発弾　広島　北村　善昭
手を上げる僕は空気と言わさない　大阪　岩佐ダン吉
なんだろうが伸びて大きな花が咲く　兵庫　亀岡　哲子
湯気あげる緑若菜の粥の椀　大阪　大治　重信

リフォームの対角線の柱傷　奈良　徳重美恵子
黄水仙には少しだけ嫉妬心　兵庫　細川　花門
ドクダミの白さ新風巻き起こす　愛媛　越智トシ子
苦労話はこの辺で砂時計　京都　中林　典子
逆らったことも河原の丸い石　長野　丸山　宣久
捨てられる身になってみろ四捨五入　愛知　浅井　典子
病棟の深夜の雨に増す孤独　宮崎　黒木　栄子
新元号へ長い童話を書き終える　大阪　太田扶美代
人生の裏を知ってる馬の耳　兵庫　江尻　房子
別れの手紙折れたペン先から吹雪く　鳥取　倉益　一瑤
それぞれに孤独でみそ汁が冷める　愛媛　村山　浩吉
防災グッズ揃えてのほほんの日日に　兵庫　小山　紀乃
平和だが今は戦前かもしれぬ　徳島　黒田るみ子
10割3で泣いた昭和の置き土産　兵庫　青木　公輔
空からも見える大きな樹を植える　大阪　小野　雅美
ブランコを思い切り漕ぐ冬日和　大阪　中島　一彌
手さぐりで横に繋がる根を伸ばす　長野　丸山　健三
チューリップお喋り好きな園児たち　大阪　水野　黒兎
褒められて伸び叱られて節になる　大阪(故)　升成　好
Uターン新たな傾きを思う　栃木　荻原　鹿声
トンネルができて民話になる峠　福島　鈴木たけし
平和ボケした平成へ打つ楔　大阪　油谷　克己

熱い汗かいて息まく理想論
日捲りを捲れば明日が見えますか
小学生のままカラフルな金魚草
ふろふき大根言い訳は嫌いです
ルビ振って事の信疑を確かめる
送信を押せば終ってしまう恋
淡い夢ふわりとシャボン玉に乗る
生きていればの話面子もプライドも
空咳をして主張する現在地
砂時計いのちさらさら落ちる音
水たまりじゃぶじゃぶ踏んで子に帰る
虚飾捨て素顔になった昼の月
ヒゲはやし鹿鳴館にワープする
風圧に耐えて一輪咲いた花
寂しくて星を落としたのは私
励ましたつもりが友を責めていた
古稀からはポポと綿毛のように翔ぶ
幸せの真ん中にある急カーブ
ハモニカを吹いて前向くことにする
πr^2で測る仲良し度
独り居に着信音が鳴ってます
新聞社は休んでいない休刊日

愛知　鏡味しょう子
青森　稲見　則彦
大阪　森中惠美子
奈良　西澤　知子
愛媛　月原つくし
宮崎　黒木せつよ
和歌山　吉田ちづこ
愛媛　栗田　忠士
奈良　大西　將文
兵庫　大坪　一德
東京　上原　稔
三重　小川はつこ
大阪　八木　来夢
愛知　安藤　義昭
鳥取　森山　盛桜
大阪　井丸　昌紀
大阪　中川ひろ介
愛媛　兵頭　俊子
鳥取　吉田　陽子
島根　石橋　芳山
和歌山　小谷　小雪
大阪　木藤こみつ

幸せに少し自由を奪われる
好きだった魚きれいに食べる人
背もたれの角度をかえて春の曲
散り椿それがわたしの答です
生きぬいた老松へ春の労り
日めくりの一枚ごとにあるいくさ
わたくしを探して古書店を巡る
生きていることを問われる鶴と亀
日溜りをこぼさぬように持ち帰る
母としてカッコーの狡さが解る
太陽に口ひげ描くちぎれ雲
リベンジへ画布真っ白に塗りつぶす
白紙でも玉虫色の委任状
春が来るようにお酒を飲んでいる
見上げると虹が出ている出直せる
はだか木のオーラしっかり新芽抱く
一輪を咲かせて時が動きだす
こらしめて諭す仁王の力こぶ
蜂のひと刺し女は怖いラ・フランス
笑わせるから長生きをしてしまう
消印はセーフですよとオリオン座
タクシーで追っかけてくる縄電車

奈良　山田　恭正
大阪　谷口　義
京都　山本　昌乃
奈良　きむらまさこ
大阪　森井　克子
島根　岸　桂子
広島　鴨田　昭紀
兵庫　坂本　醇一
大阪　平井美智子
岡山　松本　藍
岡山　折鶴　翔
愛媛　宮尾みのり
和歌山　三宅　保州
鳥取　新家　完司
兵庫　上田　和宏
大阪　荻野　浩子
和歌山　古久保和子
奈良　中森　勝代
岡山　畑　佳余子
福島　安藤　敏彦
愛媛　郷田　みや
岡山　木下　草風

助手席で文句ばかりを言うている　大阪　三好　専平
Wi-Fiをウィヒーと読むきみが好き　石川　松谷　早苗
満月と交換日記しています　広島　瀬戸れい子
パワハラで生まれる世界新記録　千葉　長谷川庄二郎
目立ちたいから真っ先に咲く桜　和歌山　川上　大輪
本心は五年日記が知っている　岡山　坪井　新
朝やけも夕焼けも好き耕運機　奈良　那須　鎮彦
夕焼けの匂いが付いているススキ　奈良　板垣　孝志
終点に杖が一本置いてある　島根　伊藤　寿美
ノリシロへサプリメントをのんでいる　大阪　籠島　恵子
断捨離をしました旅のはし袋　大阪　森松まつお
活気づくシャーレ発酵中の恋　大阪　米澤　俶子
カーテンの隙間に届く春の音　和歌山　中西まさみ
情熱に応えてくれた水中花　兵庫　奥田　宗光
スパイラルカットしながら生きている　京都　市井　美春
ぼんやりと点いているのが私です　鳥取　牧野　芳光
平成のさくらはらはら過去となる　愛知　小林　祥司
蝶々を追いかけたまま　君は　和歌山　木本　朱夏
昨日まで名前のあった風でした　静岡　米山明日歌
独り言喋る代りの般若経　兵庫　北野　哲男
川岸に愛をこぼして行く小川　岡山　国塩志保里
ひとり寝のマリオネットは不眠症　大阪　岸井ふさゑ

満月が泡立ち草の上に出る　島根　田中　堂太
死者想う一日沖の昏いまま　大阪　日野　愿
ばらに敗けあやめに譲る黄水仙　大阪　壇　信子
ピーマンの吐息だったかオノマトペ　愛媛　浜本　光子
涙腺に飛んできたのはルリビタキ　北海道　落合　魯忠
なあ鯨ジャンプしている場合かい　大阪　谷口　東風
冬の匂いマーラー五番通ります　東京　星出　冬馬

秀句

点滴に時間の重さ知らされる　奈良　澤山よう子
自信過剰グシャリとへこむアルミ缶　大阪　原熊知津子
Uターン詩的になってゆく車窓　沖縄　森山　文切
美しい季語をあたふたさせている　大阪　美馬りゅうこ
ホスピスで輪廻の話して帰る　兵庫　谷口　修平
春一番画鋲ばかりの掲示板　大阪　原　洋志
マイナンバーあなたは僕を越えている　奈良　木嶋　盛隆
福寿草咲いて悪人生き残る　青森　髙瀬　霜石
こんなことまでも悩んでいた日記　奈良　菱木　誠
触れた手の緯度と経度を確かめる　佐賀　真島久美子

特選

日溜りで咲いているのはみな仲間　兵庫　吉村めぐみ
笑った日ばかり纏めている輪ゴム　大阪　鴨谷瑠美子

軸吟

使命感みなぎる春のパイプ椅子

雑詠

小島蘭幸選

日向ぼこ仏のような顔並ぶ　岡山　宮宅比佐恵
終点に杖が一本置いてある　島根　伊藤　寿美
あの世へは笑顔一つでいくつもり　大阪　谷　久美子
夢で会う父の背中の広いこと　兵庫　六倉　ひろ
じいちゃんと飲んでる父はおしゃべりだ　大阪　吉岡　修
日捲りを捲れば明日が見えますか　青森　稲見　則彦
梅の花一輪添えて出す手紙　宮崎　黒木　栄子
しなやかに着地点探しています　岡山　しばたかずみ
点から線線から面になり頑固　大阪　古今堂蕉子
残照の色ならわたくしが決める　愛媛　吉松　澄子
生きて良し九十三に春が来た　大阪　津村志華子
聞き役に回り静かにお茶を飲む　広島　蔀　帆子
幸せなんだね眩しいその笑顔　鳥取　前田　楓花
腹這いで猫と話せる人が好き　奈良　大久保眞澄
蜂のひと刺し女は怖いラ・フランス　岡山　畑　佳余子
歳月が琥珀色している宝　大阪　吉道あかね

女は強く男やさしく生きねばならぬ　岡山　菅田　陽子
ブーケトス受けて迷いが吹っ切れる　茨城　毛利　由美
平成の幕引くようにさくら散る　宮城　木田比呂朗
指一本触れぬがこころ燃えていた　鳥取　福西　茶子
敵味方分けて居場所を狭くする　兵庫　冨永　恭子
笑われた箇所が強みになるはずだ　青森　北山まみどり
艶やかな碁石初ういしい十歳　和歌山　上田　紀子
邂逅へなんども畳み込む夕陽　大阪　鈴木　かこ
自信過剰グシャリとへこむアルミ缶　大阪　原熊知津子
自画像に足りぬ情熱の赤冷めた青　大阪　山本希久子
団塊の根っこマルクスまだ絡む　大阪　久保田清美
こんなことまでも悩んでいた日記　奈良　菱木　誠
再生の途中独りにしておいて　茨城　佐瀬　貴子
終章はゆるり私の時刻表　岡山　遠藤　哲平
消費税増へ野菜の種をまく　大阪　出口セツ子
ドキドキが欲しくて街の風に会う　大阪　石田ひろ子
目立ちたいから真っ先に咲く桜　和歌山　川上　大輪
一滴落ちた辺りで吹っ切れた　奈良　林　ともこ
墓場まで敗者復活戦はある　福島　鈴木たけし
花愛でるゆとりのもどる三回忌　兵庫　藤原　紘一
いつの日か分ってくれる遠花火　岡山　木下　草風
笑わせるから長生きをしてしまう　福島　安藤　敏彦

一日の愚を吐くひとりのロゼワイン　大阪　宮西　弥生
初恋の顔モノクロのままがいい　岡山　塩谷たえ子
ベランダの夕日にホッと息を吐く　大阪　池田貴佐夫
時を抱くこわさぬようにこぼさぬように　愛媛　柳田かおる
姿見の中で女は枯れてゆく　宮崎　川﨑　敬女
列乱すアリは私かもしれぬ　静岡　竹平　和枝
古希過ぎてたった一つの夢を追う　大阪　齋藤さくら
夕焼けの匂いが付いているススキ　奈良　板垣　孝志
サバ缶に群がる老人の歩幅　奈良　徳重美恵子
お茶の間の上だけ雪が溶けている　滋賀　上野勝比古
新鮮なわたしを保つ好奇心　沖縄　多良間典男
生まれるも死ぬもぶっつけ本番で　大阪　前原　正美
ダークサイドぎりぎりぼくの座標軸　青森　髙瀬　霜石
深呼吸したら怒りが消えていた　長野　内山　克子
飲み勝ったことなど誇りにはできぬ　三重　橋倉久美子
遥か先彼が今日も走ってる　大阪　岩佐ダン吉
敵陣はキッチンにあり妻の乱　岡山　紫　しめの
極楽の手前で鬼に囲まれる　神奈川　久保田徳子
真剣に祈った腹が空いてくる　長野　宮尾　柳泉
まだ生きるつもりで栞はさんどく　大阪　原　洋志
哀しそうな目に冗談が乾く　大阪　藤村　亜成
一日ひとつ力いっぱい咲く椿　大阪　松尾美智代

卒寿迄生きた喜び墓参り　大阪　前川　善之
若芽すくすく世間の嵐まだ知らず　岐阜　武藤　敏子
優も可も無い満開の桜の木　愛媛　井元由喜子
力少し抜いて苦手と真正面　愛媛　佐尾　文子
酸欠の私を救うすきま風　熊本　山本あかね
頬寄せて心を寄せて老いの春　大阪　河合　陽子
百態の風に吹かれて凛と立つ　大阪　中村　惠
日溜りで咲いているのはみな仲間　兵庫　吉村めぐみ
体内に危ないものをもって春　大阪　森中惠美子
父母の遺訓わたしに傘がある　大阪　山岡冨美子
死者想う一日沖の昏いまま　大阪　日野　愿
三丁目の夕陽は母のレクイエム　大阪　鈴木いさお
記念写真ビンボケにしてほめられる　熊本　中原たかお
テーブルに今日一日が置いてある　大阪　谷口　義
ぼんやりと点いているのが私です　鳥取　牧野　芳光
さみしくて時どき傘を借りに行く　新潟　相田　柳峰
神さまの添削受けて生き延びる　兵庫　河内谷　恵
還暦の赤いベストを息子が継いだ　兵庫　藤岡　りこ
ひとり芝居大らかにひと日を畳む　大阪　小川賀世子
夢追って追って転んで現在地　岡山　田辺たかき
後期高齢誇りは老いてなるものか　熊本　平田　朝子
ぞろぞろと喫煙室に拉致される　徳島　小畑　定弘

朝になる白地図ひとつまた貰う　岡山　原　脩二
幕間に生きたあかしの木を植える　鹿児島　前田　一天
旅仲間亡父に勝る人のなし　鳥取　吉田　弘子
同じ味作れないのが男めし　大阪　内海　幸生
フォルテッシモに生きてケルンを高く積む　愛知　浅井　典子
人間に生まれ一生抱く炎　奈良　島岡美智子
討ち首も切腹もないわが先祖　鳥取　成田　雨奇
喜寿過ぎて全治しました恋病　岡山　高杉　究作
七十歳さあてそろそろ化けようか　奈良　居谷真理子
晩学のペンに発芽の音がする　岡山　宮本　信吉
わたくしを探して古書店を巡る　広島　鴨田　昭紀
綾取りのハシゴを降りて亡母が来る　島根　廣江　敦子
朝やけも夕焼けも好き耕運機　奈良　那須　鎮彦
クラス会あなた一人に逢いに行く　香川　大高　正和
ライバルの羽音が耳朶にまだ残る　奈良　笹倉　良一
逢えたのは奇跡添うたのは運命　広島　山本　恵子
10代が輝く日本の夜明け　大阪　川端　一歩
日本海の怒涛背にする朝の市　大阪　丹後屋　肇
二人居た一人が坂を下りてゆく　兵庫　奥澤洋次郎
好きじゃなかった父にだんだん似て来たわ　兵庫　山田　厚江
切っ先がこちらを向いたので笑う　大阪　山野　寿之
着飾った妻を旧姓で呼んでみる　広島　岸本　清

戦後生まれもずいぶん歳を取りました　大阪　川畑まゆみ
春風を追い抜く赤いスニーカー　宮崎　さとう一徳
喜んでいたと伝えてくれますか　大阪　平井美智子
ハモニカを吹いて前向くことにする　鳥取　吉田　陽子
青春の綻び一つ太宰読む　奈良　加藤江里子
ある日は愛ある日は哀と書く日記　愛媛　栗田　忠士

秀句

うら山の社聖地にしたアニメ　石川　藤村　容子
人間って好き生きるっておもしろい　大阪　小山惠美子
ダイエットまずエルエルを目指します　大阪　藤田　武人
人は人を愛するようにできている　鳥取　斉尾くにこ
黙祷から始まる行事増えて来た　兵庫　永田　紀恵
手をつなぎましょう一緒に泣きましょう　大阪　島田　明美
君がまぶしくて直進できなくて　大阪　岸井ふさゑ
揚げ雲雀愛に迷いはないですか　和歌山　西川　千鶴
褒められて伸び叱られて節になる　大阪(故)　升成　好
春が来るようにお酒を飲んでいる　鳥取　新家　完司

特選

生きている嬉しさ子らの声がする　兵庫　大黒　政子
宇宙船できても地震防げない　大阪　上西　啓仁

軸吟

入院の母が童になってゆく

第七回　春の川柳塔まつり
誌上大会参加者

総数７６９名
順不同・敬称略

【北海道】落合魯忠　三浦強一　浪越靖政
高橋みっちょ
【青　森】稲見則彦　高瀬霜石　辻口風来坊
中村みのり　北山まみどり　むらのひとり
【岩　手】百姓一揆　鷹觜閏雄
【宮　城】木田比呂朗　菅野　實　月波与生
【福　島】安藤敏彦　菊田信子　鈴木たけし
斎藤秀雄　鈴木由美子
【茨　城】岡本　恵　樫村日華　佐瀬貴子
毛利由美　矢野義雄
【栃　木】中西茂年　荻原鹿声
【群　馬】伊藤正美　大川光一
【埼　玉】金子育司　首藤忠平　宮本彩太郎
中島通則　中村伸子　根岸方子　前田洋子
【千　葉】海老池洋　廣瀬良麿　日下部敦世
佐々木正康　菱山ただゆき　長谷川庄二郎
【東　京】上原　稔　上村　脩　山田こいし
川名洋子　星出冬馬　川本真理子
【神奈川】菊地政勝　相原あやめ
久保田徳子
【山　梨】望月双葉
【長　野】甲野美文　近藤魁風　高見澤直美
酒井房子　島田洋審　武田香風　妻林寿子
寺田律子　中村喬彦　西沢葉火　堀田　毅
丸山健三　丸山宣久　宮尾柳泉　宮坂邦子
宮沢和子　吉原犀水　松本浩子　筒井益子
内山克子
【新　潟】相田柳峰
【富　山】岩倉博子　上田玲子　門井よし子
越前邦夫　扇谷　実　島ひかる　小西眞沙子
伴よしお　林　進　宮本海風　滋野百合子
おかのみつる
【石　川】岡本　聡　新保芳明　藤村容子
松谷早苗　堀本のりひろ
【福　井】伊藤良一　西谷公造
【岐　阜】大島凪子　藤吉政春　武藤敏子
【静　岡】石川柳寿　佐藤灯人　渥美さと子
竹平和枝　中田　尚　橋本酒楽　小林ふく子
望月　弘　渡辺健二　佐野由利子
鈴木千代見　藤森ますみ　山本野次子
米山明日歌
【愛　知】青砥和子　浅井典子　小松くみ子
安藤義昭　伊賀武久　石川典子　鈴木さゑ子
恵利菊江　沢田正司　白石てる　竹内そのみ
高浜広川　冨田末男　彦坂石転　猫田千恵子
脇田雅美　吉川　駿　小林祥司　山本三樹夫
梅尾芳香　鏡味しょう子　八甲田さゆり
西郷紀美代
【三　重】小河柳女　奥田悦生　青砥たかこ
梶　泰榮　水谷裕子　小川はつこ
北田のりこ　橋倉久美子　毎熊伊佐男
【滋　賀】上野勝比古　佐久間裕子
【京　都】市井美春　伊藤礼子　今井万紗子
北原照子　斉藤和子　阪部文子　北野クニオ
櫻﨑篤子　清水英旺　寺島洋子　渡邉真由美
都倉求芽　中林典子　西山竹里　藤井文代
桝本宏子　三宅満子　山田葉子　山本昌乃
【大　阪】稲山常男　油谷克己　安芸田泰子
阿部俊八　荒木郁子　池田純子　池田貴佐夫
石川典子　石田孝純　市川雄太　石田ひろ子
井上一筒　井丸昌紀　入江秀雄　石橋ナオ子
岩崎公誠　上嶋幸雀　上出　修　石丸美砂子
上西啓仁　上山堅坊　榎本舞夢　磯島福貴子
内海幸生　大浦初音　大治重信　出海素頓馬
荻野浩子　奥田笑成　奥　時雄　井上恵津子
落葉ふみ　小野雅美　貝塚正子　指宿千枝子
柿花和夫　籠島恵子　梶原弘光　岩口のぞみ
加島由一　金川宣子　河合陽子　岩佐ダン吉
川端一歩　川本信子　神田良子　内田志津子
楠井輝子　黒岩靖博　兒玉重信　宇都満知子

酒井紀華　坂上淳司　坂　裕之　江島谷勝弘
坂本星雨　澤井敏治　柴田桂子　榎本日の出
島田明美　島田誠一　初代正彦　大島ともこ
杉谷和雄　杉本義昭　助川和美　太田扶美代
鈴木栄子　鈴木かこ　関よしみ　小川賀世子
高木道子　髙杉　力　髙橋律雄　垣見はるみ
太下和子　伊達郁夫　立蔵信子　片岡智恵子
田中廣子　谷口東風　谷口　義　片山かずお
谷久美子　谷　英也　壇　信子　神野千恵子
丹後屋肇　恒川　博　靄田寿子　鴨谷瑠美子
寺井弘子　冨田啓二　富田保子　加山よしお
内藤憲彦　中井　萠　中井佳子　川畑まゆみ
中川一男　中崎深雪　中島一彌　岸井ふさゑ
長髙俊雄　中谷哲夫　中村　惠　木白喜久栄
中村民子　中村峰子　中山春代　木藤こみつ
西澤司郎　西出楓楽　西村哲夫　木見谷孝代
畑中節子　原　洋志　日野　愿　桐島カズ子
平賀国和　福田和子　藤井則彦　久保田清美
藤井裕美　藤田武人　藤塚克三　源田八千代
伏見雅明　藤村亜成　藤原大子　古今堂蕉子
穂口正子　本田智彦　前川善之　小山惠美子
前田紀雄　前原正美　増田隆昭　齋藤さくら
升成　好　松岡　篤　松岡重子　齋藤奈津子
水野黒兎　三村一子　都　武志　佐伯ミナ子
宮西弥生　三好専平　村上玄也　佐々木満作
村上直樹　森　茜　森井克子　嶋澤喜八郎

森田旅人　森田　麗　森　廣子　島田千鶴子
八木来夢　矢倉五月　安田忠子　鈴木いさお
山﨑珠生　山根妙子　山野寿之　鈴木ひさ子
雪本珠子　横山里子　吉岡　修　津村志華子
米澤俶子　若本安代　出口セツ子
徳山みつこ　冨山ルイ子　中川ひろ介
西川ひろし　羽田野洋介　原熊知津子
原田すみ子　肥田ハツ子　平井美智子
平松かすみ　弘津秋の子　藤島たかこ
藤原千恵子　松尾美智代　松下小枝子
宮﨑シマ子　森中恵美子　森松まつお
山内規予子　山岡冨美子　山口弘委智
山本希久子　吉内タカ子　吉道あかね
吉村久仁雄　美馬りゅうこ

【兵　庫】

青木公輔　飯田京子　井口と志子
稲角優子　井上高島　上田和宏　井上じろう
梅澤盛夫　江尻房子　大上几代　上田ひとみ
大黒政子　大坪一徳　大西重男　太田としお
岡本潮里　奥田宗光　長川哲夫　緒方美津子
尾﨑一子　亀岡哲子　河内谷恵　奥澤洋次郎
川人良種　北澤稠民　北野哲男　久保田千代
九村義徳　糀谷和郎　幸田厚子　熊谷つとむ
小山紀乃　坂本醇一　澤　良子　佐藤寿美子
澤　良兼　椙元世津　鈴木新録　住吉美和子
多田雅尚　谷内利昭　谷口修平　中岡千代美
敏森廣光　冨永恭子　中川智子　西口いわゑ

長島敏子　永田紀惠　中野　忠　野口真桜子
長浜美籠　成定竹乃　丹羽美惠　長谷川善輔
能勢利子　萩原狸月　春名恵子　東内美智子
福田好文　福田正彦　藤井宏造　松本ゆかり
藤岡りこ　藤田紀江　藤原紘一　山端なつみ
古角尋子　古橋茂子　細川花門　吉村めぐみ
堀　正和　前川　淳　丸山孔一　宮本　緑
六倉ひろ　村岡義博　村上氷筆　村田　博
森　玲子　山口光久　山田厚江　山田耕治

【奈　良】

安土理恵　安福和夫　居谷真理子
板垣孝志　上田幸一　宇賀史郎　大久保眞澄
大内朝子　大西將文　木嶋盛隆　太田のりこ
北野年子　駒居春子　五味尚子　加藤江里子
笹倉良一　佐藤辰雄　髙橋敬子　小金澤貫一
谷川　憲　中堀　優　中森勝代　澤山よう子
那須鎮彦　西澤知子　林ともこ　島岡美智子
菱木　誠　古川洋子　毛利元子　徳重美恵子
山下純子　山田順啓　山田恭正　飛永ふりこ
山本昌代　米田恭昌　渡辺富子　長谷川崇明
きむらまさこ

【和歌山】

石田隆彦　磯部義雄　打越なごみ
岩橋弘子　上田紀子　小原敏照　根田よしこ
柏原夕胡　川上大輪　岸本幸彦　坂部紀久子
喜田准一　北原昭枝　北山絹子　山東日出男
木本朱夏　楠原富香　倉橋悦子　土屋起世子
小谷小雪　酒井京子　佐藤まき　中西まさみ

佐藤倫子　杉若雅香　杉本俊枝　成瀬なる子
澄田康則　武本　碧　田畑　宏　藤原ほのか
堂上泰女　堂上友紀　西川千鶴　古久保和子
福井菜摘　福呂秀子　堀冨美子　前岡由美子
松原寿子　松本雅子　三宅保州　南方冨美代
吉田ちづこ

【鳥　取】　飯野菖子　池澤大鯰　伊塚美枝子
池田美穂　伊藤昭子　大倉孝二　岡崎美知江
大羽雄大　大前安子　奥田由美　加藤美佐子
奥山春雄　門村幸子　岸本啓子　木村美智子
岸本孝子　岸本宏章　木天麦青　後藤美恵子
倉益一瑤　新家完司　竹信照彦　斉尾くにこ
田中重忠　田中天翔　中井虎尾　坂本とも湖
中田房江　中原章子　中村金祥　田賀八千代
成田雨奇　西谷悦子　橋本　整　竹村紀の治
平尾菜美　平尾正人　副井　裕　谷口回春子
福西茶子　細田裕花　前田楓花　中原みさ子
牧野芳光　宮田風露　森山盛桜　政岡日枝子
山下凱柳　山下　京　山下節子　山本ふみ子
山中康子　吉田弘子　吉田陽子　吉田孔美子
若松由紀子

【島　根】　石橋芳山　伊藤寿美　熱田熊四郎
伊藤玲峰　内田厚子　尾原米佑　黒目ひでお
川本　畔　岸　桂子　田中堂太　篠原紋次郎
原　章峰　原　徳利　廣江敦子　竹治ちかし
中筋弘充　福間芳枝　藤井寿代　長谷川博子
松本文子　山根七七　山根雪代　三浦モナカ

【岡　山】　市田鶴邨　岩崎幸子　赤本富美子
遠藤哲平　大石洋子　大杉敏夫　小倉慶司郎
岡本余光　小野春奈　折鶴　翔　小野美那子
木下草風　菅田陽子　染山朝子　河相美代子
高杉究作　谷内拓庵　谷本正義　国塩志保里
丹下凱夫　塚元敏子　坪井　新　古山はつ子
永見心咲　畑佳余子　原　脩二　塩谷たえ子
福力明良　藤井智史　藤澤照代　髙橋由紀女
松本　藍　丸山威青　宮本信吉　田辺たかき
紫しめの　目賀和子　安原　博　戸田まさこ
山下公子　従野健一　しばたかずみ
松田龍せん　丸山ツヤ子　宮宅比佐恵
山崎三千代

【広　島】　石原淑子　岩本笑子　吉川美佐子
小畑宣之　金沢節生　鴨田昭紀　小土井珠生
岸本　清　北村善昭　小島蘭幸　瀬戸れい子
笹重耕三　蔀　帆子　若年幸子　田辺与志魚
田桑恵子　土井輝恵　飛田陽子　豊田芳香
中野妙子　野村賢悟　日谷　寛　古谷節夫
松尾信彦　松田栄香　村上和子　村田幸夫
元吉慶子　山本恵子　渡辺典子

【山　口】　有海静枝　上村夢香　坂本加代
中前幸子　三木静江

【徳　島】　小畑定弘　橋本征介　黒田るみ子

【香　川】　大高正和　川西義仁　嶋村　幸
谷本清雲　安田翔光

【愛　媛】　青野　舞　鎌倉俊一　井元由喜子
鎌田昌子　川又暁子　栗田忠士　大内せつ子
黒田茂代　郷田みや　古手川光　大河富美子
佐伯明美　佐尾文子　白尾澄江　岡山フジエ
田中なお　土居久子　永井松柏　越智トシ子
中内康男　西村寛子　浜本光子　西田美恵子
林マキ子　兵頭俊子　本田醇子　高市すみこ
山内房子　山本　毅　吉松澄子　月原つくし
星野美根子　宮尾みのり　柳田かおる
山内美恵子　山内もとこ　山本カヨ子
薬師神ひろみ

【高　知】　辻内次根

【福　岡】　石田　酎　中原由美　本田さくら

【佐　賀】　岩崎　實　坂本蜂朗　古賀由美子
仁部四郎　横尾信雄　真島久美子
真島美智子

【長　崎】　古賀直子

【熊　本】　岩切康子　小濱春雪　中原たかお
嶋村泰昭　杉野羅天　徳丸浩二　山本あかね
平田朝子

【大　分】　高木遊楽

【宮　崎】　川崎敬女　黒木栄子　黒木せつよ
さとう一徳　間瀬田紋章

【鹿児島】　茶木　薫　平瀬芙蓉　前田一天
芳　鉄心

【沖　縄】　森山文切　多良間典男

本社 四月句会

◇四月八日（月）午後一時
アウィーナ大阪

桜満開の八日、四月句会は百三十一名（内投句者八名）の参加で開催された。句会に先立ち、過日亡くなられた升成　好さん（大阪市）に黙祷を捧げた。

今月のお話は雑誌「川柳マガジン」（新葉館出版）の松岡恭子氏。題は「著名作家から見た川柳」。『かるみ』とは断じて軽薄とはちがう（太宰治）。川柳は俳句より八百倍も難しい（内田百閒）。川柳人口が少ないのは俳句より難しいから（加太こうじ）。人生の裏側から真理を追究したもの（葛飾北斎）。柳多留を少なくとも五回は読み返せ（野村胡堂）。川柳が非芸術という壁を破ろう（吉川英治）など、著名作家の見方や意見を約二十年前発行の「オール川柳」（現　川柳マガジン）から紹介されたが、たいへん興味深いお話であった。（正彦）

月間賞は木本朱夏さん（和歌山市）

（司会―真理子・隆彦）（脇取―志津子・勝弘）
（受付―ふりこ・雅美）（懸垂幕墨書―耕治）
（清記―憲彦・勝弘）

席題「胸」　岩佐ダン吉　選

五人の子育てた母のうすい胸　松尾美智代
後悔が胸から腹に下りてくる　居谷真理子
身長が三センチ減り胸重い　榎本日の出
鼻の差があって胸の差ありますか　鴨谷瑠美子
胸よりもお腹の方が前に出る　細川　花門
肩が凝るのとご自慢の胸だ　中岡千代美
帯解いて締めた乳房もホッとする　米澤　俶子
度胸さえあれば反対の一票　立蔵　信子
くに自慢胸つまらせるホームレス　長谷川崇明
返すのは苦手恩義も借金も　川端　六点
胸キューンの話コーヒー冷めたまま　油谷　克己
胸の影消えてすっきりしたカルテ　石田ひろ子
胸の奥に哀しい人を住まわせる　山田　耕治
胸の内でこんちくしょうと思う友　宮崎シマ子
胸の中住み続けてる人が居る　原田すみ子
胸襟を開いて助け合う介護　平井美智子
餓死虐め胸を痛める子どもの日　長谷川崇明
捨て科白胸におさめて逝くつもり　米田利惠子
現実が胸に落ちない悪夢です　前田　紀雄
拉致問題遠のき悲鳴胸に沁む　松原　寿子
積年の思い納めて義母を看る　山下　純子
胸に隠してあの日の罪に耐えている　森　廣子
下手なジョーク言われ胸焼け治らない　西出　楓楽
まだ少し愛があるのか胸痛む　榎本日の出
胸に一物妻の目つきが気にかかる　村上　直樹
痛い目に遭った男の厚い胸　初代　正彦
顔よりも先胸を見る癖がある　太田としお
彬の句ぜーんぶ僕の胸に住む　鈴木　栄子
世が世でも胸に咲いてる鶴彬　清水久美子
ツルアキラいつも私の胸を突く　石田ひろ子
任せろと胸を叩いた剣花坊　平賀　国和
死ぬまで胸に持ち続けてる平和論　森　廣子
胸張って君はサンゴを見れますか　澤井　敏治
辺野古ノーにも総理の胸は寄り添わず　坂上　淳司
昭和一桁胸に落ちないきのこ雲　前　たもつ
辺野古への仕業に胸は痛まぬか　堀　正和
八月の恨みが胸の底にある　鈴木いさお

佳

帰還した兵士飛び込む親の胸　中島　一彌
胸開けて春風さんを受け入れる　松原　寿子
乱切りにしたい男が胸にすむ　渡辺　富子
まかせろと胸を叩けば咳が出る　新家　完司
言い勝った胸に淋しい風が吹く　平井美智子

人

ロボットに胸の痛みがあるかしら　木本　朱夏

地

胸奥に恋人のごと鶴彬　大内　朝子

天

仮設から一年生が胸を張る　米田利惠子

軸

胸に聞け重い言葉を投げられる

兼題「恩」　中村　恵　選

おかげさまその一言で満たされる　森田　旅人
してやったやってやったと恩に着せ　木嶋　盛隆
新元号決めて恩赦のオマケ付き　長谷川崇明
改元に恩赦待ち侘ぶ死刑囚　井澤　壽峰
貸せば恩催促すれば鬼になる　大杉　敏夫
がらくたの玩具箱にも恩がある　柴本ばっは
受けた恩忘れず奮起する余生　渡辺　富子
失明を救うた母の百度石　大内　朝子
前向いて進むだけだと友の檄　坂　裕之
恩返し出世ばらいと軽く言う　松原　寿子
真っ当な道へ戻した師の言葉　萩原　狸月
急病に一期一会の旅の恩　石田　隆彦
ありがとうその一言で報われる　敏森　廣光
いただきまーす御馳走様という謝恩　初代　正彦
生かされているお陽さまの恩風の恩　松尾美智代
恩の押し売り進駐軍の粉ミルク　森　廣子
芋蔓に命つないだ恩がある　大内　朝子
鶴も亀も恩返しする童唄　伊達　郁夫
臓器提供生きた証の恩返し　敏森　廣光
輸血に感謝献血の恩返し　米澤　俶子
淋しさはきちんと恩を返される　居谷真理子
恩は恩悪には味方出来ません　油谷　克己
寒肥に応え牡丹の恩返し　中島　一彌
親の恩みんな忘れて親になり　齋藤さくら
返せない恩が白髪に皺にある　山岡富美子
核兵器持たぬ日本に恩を知る　小野　雅美
いただいた恩ですいつも温かい　指宿千枝子
この恩は忘れませんと言ったきり　堀　正和
恩に着る何と便利な言いのがれ　加川　靖鬼
顔見せるだけで出来ます恩返し　能勢　利子
報恩の萬話が子らに通じない　村上　玄也
恩知らずを見たけりゃここにいらっしゃい　大久保眞澄
二足歩行大根足に恩がある　荻野　浩子
みぞおちに返せぬ恩を溜めている　米澤　俶子
恩返ししたいお方は皆あの世　鈴木いさお
恩のある人の溢れているこの世　水野　黒兎
死語になる気配が怖い恩一字　村上　直樹

佳

包みきれずこぼしています父母の恩　柴本ばっは
恩の字がだんだんうすくなった辞書　北野　哲男
悪友の名に恩人とルビを振る　北野　哲男
誕生日かあさんの娘になれた日よ　上田ひとみ
苦しい時黙って横にいてくれた　山田　葉子

人

恩という一字なんども書いてみる　岩佐ダン吉

地

欲びへしみじみ降り積もる四恩　鈴木　かこ

天

恩人はみんな桜の木になった　新家　完司

軸

令和に返す昭和平成の恩

兼題「ぐにゃ」　内藤　憲彦　選

ぐにゃぐにゃの蛸にも生きる固い意志　村上　直樹
女か男か掴みどころのないお方　松原　寿子
男でしょぐにゃぐにゃせずに言いなさい　長谷川崇明
ぐにゃぐにゃになるまで呑んで記憶なし　鈴木いさお
イケメンにハグされ私ぐにゃぐにゃに　楠井　輝子
責任感見えぬ大臣の答弁　立蔵　信子
折れないでぐにゃって通す竹の意地　鈴木　栄子
ぐにゃぐにゃの硬貨戦災の証人　上田　和宏
ぐにゃぐにゃの阪神ですが憎めない　山崎　武彦
チーママに骨をぬかれて財布ぐにゃ　村田　博
リュウグウをぐにゃっとさせたはやぶさ2　藤井　宏造
ぐにゃぐにゃと針金盆栽を生かす　原田すみ子
ぐにゃぐにゃのハートでショックには強い　新家　完司
ぐにゃっともしゃきっともなる君の檄　飛永ふりこ
解凍のバナナは食えたものじゃない　清水久美子
右向きに傾く気配日本丸　渡辺　富子
玄関を開けてくずれる酔っぱらい　古今堂蕉子
ぐにゃっとしたもん大嫌いお父ちゃん　柴本ばっは
ぐにゃりには無縁戦争生き残り　大杉　敏夫
歳を取り頑固もぐにゃり曲りだす　石田　隆彦
休日のパパの背中に骨がない　萩原　狸月
アメとムチでは立ち上がれなくなりました　山田　葉子
漬け過ぎたナスやキュウリよ朝の顔　川端　一歩
札束でぐにゃっと心曲がりだす　小野　雅美
猫を抱き家でぐにゃぐにゃする社長　水野　黒兎

三分でお食べ下さいカップメン　太田としお
アルミ缶グニャリと恋はお開きに　平井美智子
鉄骨のすぐさまぐにゃり震度7　山野　寿之
脳みそを時々ほぐす週刊誌　伏見　雅明
コンニャクをぐにゃぐにゃ切って憂さ晴らす　榎本　舞夢
二日目のうどんのような今日の僕　古今堂蕉子
不意のキスもうぐにゃぐにゃにされちゃった　藤井　宏造
ダリの時計ぐにゃと垂れて胸を刺す　丹後屋　肇
ぐにゃっと新生児愛を独り占め　原田すみ子
こんなとこで寝るから踏んでしまうねんぐにゃよりもボキンでしたよ失恋は　大久保眞澄
よく揺れる男なんだが倒れない　上田ひとみ
　佳　岩佐ダン吉
アルミ缶ぐにゃり全没ふり返る　上山　堅坊
反論も出来ずごまかす根性なし　坂　裕之
温む田の泥の私語聞く土踏まず　阿部　俊八
一周忌済ませ味わう虚脱感　澤井　敏治
ぐにゃとした男カリッと揚げました　渡辺　富子
　人
ぬる燗でぐにゃりとしたい花の午後　村上　直樹
　地
こんにゃくのような男でほっとけぬ　大内　朝子
　天
広島がぐにゃり原爆おそろしい　荻野　浩子
　軸
ゴリ押しへぐにゃりと躱すクギの意地　太田としお

兼題「余　る」　長浜　美籠　選

賞味期限余裕あるのは棚の奥　木藤こみつ
年金で余れば預金するつもり　伏見　雅明
世の中は割り切れぬことばかりなり　伏見　雅明
ひと言の余波が尾を引くわだかまり　喜田　准一
平成の余情昭和をなだらかに　上田　和宏
年度予算余らぬように掘る道路　阿部　俊八
特売で買った野菜くさらせる　山本加お里
七十余年ともかく戦後戦せず　荒川　鈍甲
宿敵に影を踏ませておく余裕　山野　寿之
二万人も待機園児が家にいる　前　たもつ
余剰地をいっぱいにする核のゴミ　吉岡　修
余ったら心ばかりの義援金　荻野　浩子
惣菜の余りが詰まる冷凍庫　津守　柳伸
余談だと本筋よりも長過ぎる　米澤　俶子
子や孫の手に余るから墓仕舞　村上　直樹
余り物口に入れたい戦中派　清水久美子
余る子はいない三人ぎゅっと抱く　平尾　定昭
危ないなスマホ歩きが目に余る　片山かずお
二人きり昨日のおかず今日も出る　齋藤さくら
家計簿の余白で飼っているメダカ　平井美智子
有り余る球児の泥臭い闘志　田中ゆみ子
手練手管の詐欺の増長目に余る　森　廣子
食べれるのに廃棄されてるフードロス　安田　忠子
目に余る無茶な動画に世が軋む　水野　黒兎
身に余るとイチロー栄誉賞を固辞　丹後屋　肇
手に余る子育て爺が引き受ける　中川ひろ介
退屈な余生を神に返そうか　山本　進
水色が余って画いたドラエもん　鴨谷瑠美子
愛する余りつい口数が多くなる　宮崎シマ子
さよならの握手が抱いている余熱　平井美智子
食べ余し捨てるヒト科にある奢り　水野　黒兎
余りものだったね私への愛は　小野　雅美
あり余る富に血走る遺産分け　和気　慶一
割り勘の余りを持て余す幹事　片山かずお
身に余る光栄ですと貴景勝　鈴木いさお
身に余るお世辞に我をつい忘れ　藤井　則彦
可愛さが余って枯れた花の首　木本　朱夏
鬱積の発露か動画目に余る　飛永ふりこ
なるようになるさのんびり待つ余生　今井万紗子
　佳
あり余る財があっても子がいない　荻野　浩子
重ねた手余熱がときめきになった　鈴木　かこ
字余りな男だけれど好きになり　山下　純子
生きるも死ぬも神に任せている余生　中川ひろ介
梵鐘の余韻夕闇深くする　米澤　俶子
　人
余力まだあたためている固い椅子　上田ひとみ
　地
ありがとうを言える余力は残しとく　大内　朝子
　天
椿散ってもまだ情念の色のまま　荒川　鈍甲
　軸
シンプルライフ楽しみ悔い無い高齢期

兼題「ひたすら」　太田としお　選

妻の名を呼び間違えて絶句する　伏見　雅明
ひたすらに辞書を繰れども句は出来ず　上田　和宏
ひたすらに謝るだけの議員さん　喜田　准一
趣味もなくひたすら仕事だけの父　坂　裕之
良薬と信じひたすら飲むお酒　澤井　敏治
その事は隠し通して棺の中　森　廣子
梅は梅 桜は桜 僕は僕　居谷真理子
農一筋に生きると決めてUターン　片山かずお
馬鹿やったもうしませんと下げ続け　古今堂蕉子
定年後ひたすら家事で報う日日　藤井　則彦
ひたすらにプラス思考で歩みます　飛永ふりこ
聞き上手ひたすら本音じっと待つ　酒井　紀華
無事帰国ひたすら祈る拉致家族　中島　一彌
新元号ひたすら待って令和なり　榎本　舞夢
二度とせん妻にひたすら土下座する　澤井　敏治
愛か恐怖かひたすら妻を褒めまくる　吉村久仁雄
又振られただひたすらに飲んでいる　村田　博
ひたすらの願い虚しや痩せ薬　大杉　敏夫
永年勤続を誇ったことはありません　小島　蘭幸
0脚でひたすら駆けた恋もした　村上　直樹
給料日ひたすら待った若かった　齋藤さくら
結婚の一語ひたすら信じ待つ　宇賀　史郎
投票日迄はひたすら頭下げ　坂　裕之
昨日今日明日明後日芋焼酎　新家　完司

美智子様天皇支え六十年　磯島福貴子
ひたすらを生きた愛した夢を見た　平井美智子
ひたすらに歩んだ道は介護職　山本加お里
ひたすらに愛を詰め込むお弁当　木嶋　盛隆
ひたすらの盲導犬の面構え　山田　耕治
白米の夢をひたすら見た戦後　水野　黒兎
ひたすらに生き方学ぶ縄のれん　上山　堅坊
親不孝埋めてひたすら介護する　山口弘委智
イチローが努力重ねて神の技　和気　慶一
噂の火ひたすら沈黙を守る　小山　紀乃
ひたすらに生きてつまずくことばかり　木本　朱夏
一途さでいつかあなたを振り向かす　太田扶美代

佳

ひたすら稼ぎひたすら貯めて逝きはった　鈴木いさお
通帳をひたすら眺めうっしっし　小野　雅美
人として初心者のまま生きてきた　居谷真理子
妻の愚痴ただひたすらに聞き流す　鈴木　栄子
医師目指し一浪二浪三浪目　堀　正和

人

もうかりもせぬ田畑耕す父と母　三宅　保州

地

夫も子もひたすら誉めて昼寝する　田中ゆみ子

天

ひたすらに考えロダン立ち上がる関　よしみ

軸

出来るまでやれば誰でも出来るんだ

兼題「芝　居」　小島　蘭幸　選

甘く見た芝居の一行に泣いた　青木　公輔
信じます芝居で涙出せますか　村田　博
テレビドラマよりもっとドラマを持つ私　山下　純子
具合悪そうはじいちゃんのお芝居　山本希久子
鬱な日の薬は吉本に限る　米田利恵子
お見舞いで明るい芝居打ってくる　片山かずお
芝居など要らぬ令和はこの顔で　前田　紀雄
リハーサルは完璧恋をはじめよう　小野　雅美
悪役の舞台を降りてこの笑顔　萩原　狸月
八十路にも秘めた芝居があるのです　大杉　敏夫
暗転のたびにこじれていく芝居　楽原　道夫
若作り元気な振りもして八十路　山岡富美子
芝居とは思えぬアポ電の台詞　横山　里子
川柳を友とし遊ぶ夢芝居　細川　花門
春愁に鳴らぬ口笛吹いてみる　居谷真理子
オレオレに負けぬシニアの一芝居　阿部　俊八
幸せ芝居に最後までありがとう　太田扶美代
風を読み臭い芝居をしてはるね　片山かずお
安倍劇場ホラまた見えた馬の脚　岩佐ダン吉
ひと芝居打ってころりと逝きたいな　前田　紀雄
樹の役をしますと孫の招待状　大久保眞澄
私は女優家を出る時から女優　上山　堅坊
病名の言えぬ芝居がまだ続く　小野　雅美
二幕目は終ったネクタイを外す　田中ゆみ子
　　中岡千代美
　　川端　六点
　　太田扶美代

嘘泣きや芝居でふたり結ばれた　米田利惠子
一幕のドラマ果てたり花吹雪　木本　朱夏
花ちゃんと夫婦になれる村芝居　川端　六点
演技派で通した義父母の介護劇　矢倉　五月
お芝居のひとコマのようお葬式　齋藤さくら
大丈夫だいじょうぶだと言い聞かす　立蔵　信子
嘘つきましたでは芝居にもならぬ　内藤　憲彦
生まれた時から梨園の子は役者　木藤こみつ
笑わせる芝居かなしいほどうまい　鴨谷瑠美子
遠山の金さんになる花の下　清水久美子
死んだふりが近頃うまくなってきた　西出　楓楽
ヘルパーを娘と言って待っている　山田　耕治

佳

もう芝居することもない老い二人　米澤　俶子
お芝居は終わりましたと桜散る　新家　完司
愛だった遠い男の紙芝居　森　廣子
男らしく女らしくという芝居　居谷真理子
春爛漫ひとり芝居はさみしいね　鈴木　かこ

人

お芝居のような二十才の恋だった　齋藤さくら

地

好きだとは言えずにモナ・リザになった　山岡冨美子

天

半畳もあればわたしの花舞台　**木本　朱夏**

軸

最後まで芝居の下手な母でした　太田扶美代

句会燦燦

三月句会を読む　板垣孝志

溜息で妻は上手に返事する　太田扶美代
音程と強弱、顔の上げ下げ　溜息ですべてを語る　荻野　浩子
寒肥をたっぷり急がない答
待ち時間の長さが感動をより大きくする　片山かずお
上げたはずの足が敷居にひっかかる
この道のベテランは畳の縁にも蹴躓く　山下　純子
子育て終え夫育てが始まった
子育てには夢があったのだが・・・　清水久美子
チーママがくれたネクタイして帰る
出迎えは、元カレに貰ったエプロンを付けて　安福　和夫
まあまあが何時もベストと思ってる
万事のめり込まないのが長生きの秘訣　中島　一彌
卓袱台が消えて心の角が立つ
寺内貫太郎一家の卓袱台には昭和の温かさがあった　西出　楓楽
気掛かりが大きく育つ闇の底
昼は雑用で紛らわせるが、夜更けの闇は深い　矢倉　五月
家具移動する時いてほしい亡夫
『アホなこと言うな！足が無いから持てへんのや』　両川　無限
黒猫に踏まれてばかりいるピアノ
時々踏み外したように白鍵に後ろ足が触る　桝本　宏子
まだ育つ余地あるつもり喜寿の春
未使用の脳細胞は余裕綽々　百歳までは長い長い　石橋　芳山
落ちている穴は私が掘った穴
自業自得か記憶力の欠如か　見事なエピローグ

川柳塔WEB句会　兼題「書　く」

＊平抜きは到着順
＊webサイトと内容に齟齬がある場合、webサイトが正

3月例会入選句　投句数374句（188名）島田駱舟　斉尾くにこ　共選

島田　駱舟　選

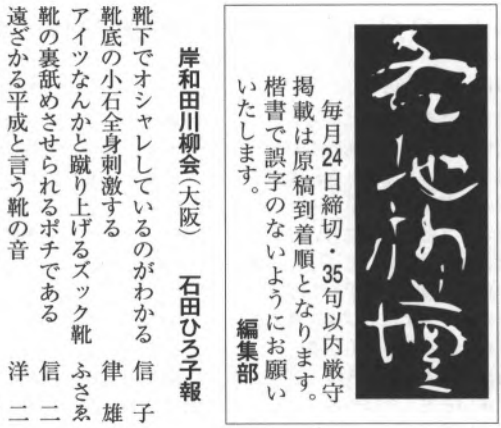
落書きが芸術性を口にする	龍　せ　ん
遺言に後はよろしくありがとう	大木　雅彦
満月に口ひげを書くちぎれ雲	折鶴　　翔
砂浜が羨む僕のラブレター	折鶴　　翔
プロポーズ返事は顔に書いてあり	やんちゃん
魔女になる決心をして「愛」の文字	松本もとこ
その度に反省文が上手くなる	おかのみつる
遺言書ケンカするたび書き換える	おかのみつる
十年前の僕から届く遺言書	山本　　進
屑篭へ愛を丸めた書き潰し	山本　　進
魂に悔いを書くのはやめとこう	はぐれ雲
花咲けばきっとあなたに出す手紙	乙川　初音
置き手紙調子悪いな誤字脱字	佐藤　彰宏
鉛筆で離婚届けを書いてみる	冬　　子
弔問の記名無沙汰を詫びながら	山川　　守
人間を止める感嘆符を書いて	森山　盛桜
広告の裏に書いても遺言書	西山　竹里
かすれゆく草書しずかな闇になる	田村ひろ子
サムイサムイと百回書けば咲く桜	新家　完司
試し書きしている　月が眠るまで	米山明日歌
春の雪ひとつ残した自己主張	柴田比呂志
親バカを育児日記に閉じ込める	たごまる子
ロボットに教えてもらう草書体	船岡　五郎
個人差があるとは書いてないお酒	臼山　　繁
何か切ない何かやさしい手紙です	山本　昌乃
書き順は上司の言ったとおりです	ナッツ池本
シナリオをまた書き直す春の恋	真田　義子
置き手紙書いてるうちに帰宅され	まみどり
我が儘をいっぱい書いている句帳	丹下　凱夫
愛の字をいくつ書いてもまだ孤独	澁谷さくら
ごはん屋と美味そうな字で書いてある	怜
恋文は美術室では書けません	い　ゆ　蘭
佳５　啄木鳥の書いた手紙に薔薇を挿す	エノモトユミ
佳４　命名の筆から雫する未来	笹倉　良一
佳３　大好きと書いて嫌いと読んでいる	牧野　芳光
佳２　学用品名前書くたび親になる	松嶋由美子
佳１　反対と書いて指紋を消してある	板垣　孝志
人　言い訳は半角文字で書きなさい	雨森　茂喜
地　違反切符してやったりと書いてある	水野奈江子
天　履歴書を書くと私が消えていく	平尾　定昭

斉尾くにこ　選

満月に口ひげを書くちぎれ雲	折鶴　　翔
OK Google 論文書いといて	雪上牡丹餅
ブロックか既読未読か問う真意	松本もとこ
灰色に塗りつぶされて星を書く	あ　や　の
尊厳死いとたおやかな草書体	板垣　孝志
人間を止める感嘆符を書いて	森山　盛桜
着地点あたりに丸を書いておく	森山　盛桜
置手紙書いても鍵は持って出る	竹中　正幸
活字より真心こもる個性文字	いいだひでき
饒舌になるパソコンで書く日記	樋口　　眞
手書きだとよく間違える衣偏	桔　梗　庵
鉛筆で書くことなんて句会だけ	武良銀茶
類推をして読む友の葉書文	フーマー
明日の僕輪郭線は書けている	高浜　広川
絵手紙へ添えた一句が光り出す	ま　さ　と
点線をたどれば見えてくる私	水木　星羅
行間を描く草書のシンフォニー	柳田かおる
書き順は上司の言ったとおりです	ナッツ池本
誓約書自署捺印をゆずらない	木田比呂朗
命名の筆から雫する未来	笹倉　良一
えんぴつに貰う樹だった日の記憶	斎藤　秀雄
孤独ってなんだろ　それからの破線	月波　与生
シュレッダーが読むあなたがついた嘘	月波　与生
欠礼の便り来る人来ない人	梶原　弘光
黒ヤギが満腹になるまで書く手紙	松島　勇象
捨てられた町が残した君の歌	浅井　誠章
性別の欄にその他と書く時代	上山　堅坊
書き留めた言葉ようやく孵化をする	丹下　凱夫
書き残すことを数える待ち時間	くみくみ
虚偽記載修正液が乾かない	颯　　爽
ごはん屋と美味そうな字で書いてある	怜
下書きの下書きをした誓約書	い　ゆ　蘭
佳５　かすれゆく草書しずかな闇になる	田村ひろ子
佳４　反省文書いても戻らない命	ま　さ　と
佳３　心から滴り落ちてペンの先	居谷真理子
佳２　「ここで笑う」とト書きのある自分史	さくら草
佳１　何か切ない何かやさしい手紙です	山本　昌乃
人　取り扱い注意と書いてある親父	松島　勇象
地　履歴書に失くしたものを書きました	尾崎　良仁
天　愛の字をいくつ書いてもまだ孤独	澁谷さくら

投句方法　【川柳塔】を検索→【川柳塔 WEB 句会】をクリック

senryutou.net　　（サイト管理　森山文切）



毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願いいたします。
編集部

岸和田川柳会（大阪）　石田ひろ子報

靴下でオシャレしているのがわかる　信子
靴底の小石全身刺激する　律雄
アイツなんかと蹴り上げるズック靴　ふさゑ
靴の裏舐めさせられるポチである　信二
遠ざかる平成と言う靴の音　洋二
定年の父の祝いにスニーカー　隆昭
逝きし娘の靴音耳に残ってる　珠子
一筆に命彬の戦ノー　ダン吉
紅筆も春色選ぶ朝化粧　侑子
筆圧の弱まる母の闘病記　義泰
一筆に込める想いか真の情　大輔
筆まめにほだされ首を縦に振る　隆雄
顔浮かべ賀状に思い筆運ぶ　和美
始末書の筆が滑れば命取り　白水
独り居の灯りはつけたまま眠る　みつ江
明かり灯し私ひとりの城にする　玲子
ピンセットではさむと灯りだす噂　しげ子
平和賞にトランプなんとちぐはぐな　英夫
長生きは嫌と言いつつ医者通い　カズ子
眉尻が上がっているがお人好し　昭
ユニークと言えなくもないトランプ氏　秀夫
コメントがいつもユニークなおみ節　喜代志
ユニークとおだてられても胸を張る　雲水
ちぐはぐな話も聞いて母介護　ひろ子

川柳塔打吹（鳥取）　斉尾くにこ報

ひと時は高価な野菜今は捨て　貴恵
安物の中から目玉さがし出す　たけ代
あがいても研いてみても安い僕　重利
通販の見た目につられまた失敗　公恵
几帳面を売りものにして設計図　清
帰省の子に整理整頓させられる　みち子
自分だけ几帳面だと思ってる　恭子
几帳面やり繰りじょうずでも赤字　久芽代
日に三度食前食後書く日記　野蒜
几帳面列車ダイヤは世界一　岳人
へそくりの場所を日記に書いておく　泰山
几帳面に鏡にうつる団子鼻　重忠
お月さま天道さまも几帳面　石花菜
几帳面春には春の花が咲く　節子
お世辞にはお世辞を倍にして返す　完司
直角に拭かねば機嫌悪くする　芳光
寒暖差三途の川も混みだした　義人
混んでいた小学校も今廃校　滋
混んでてもやっぱり恋しい縄暖簾　芙美子
お母さん極楽行きは混んでます　紀美恵
若者で優先席が混んでいる　紀の治
手の混んだ芝居とっくにばれている　龍枝
噂には良いの悪いの普通のも　玲坊
噂されそれも花かと聞き流す　悦子
あちこちの噂を拾うゴミ袋　照彦
噂より速いアマゾン宅急便　三津子
噂話止むまでリンゴむいている　美知江
シルクよりコットン安い女です　くにこ

川柳塔すみよし（大阪）　森松まつお報

戦っていますか恋をしてますか　いさお
でけへんこと増えて自分と戦うよ　美世子
覚えてる負けた相手はいつまでも　としお
癌との戦さ絶対負けぬ嫁強気　ばっは
もう一人の手強い僕と議論する　進
マドンナに抱かれしばしの休戦を　克己
スタートにプライド懸けて福掴む　志津子
ライバルの涙ポロリで不戦敗　雅美
良心の痛み映らぬレントゲン　(矢)五月
握手して互いに良心とり戻す　美籠
世界中良心持って手を繋ごう　廣子
駄菓子屋の儲けはないが子供好き　直子
良心をつらつら綴る写経会　妙子
良心を見定めている黄信号　昌紀
無垢な愛 性善説を信じたい　ひろ介
即断が熟慮のスキを突き破る　久仁雄
さあ決めた今年卒母をしてみるか　里子

顔じゃない包容力と男気と　満知子
早ばやと決めてじんわり悔んでる　俊雄
ライバルは自分と決めて影を踏む　大輔
少年の握りこぶしにある決意　満作
新元号わたしが決めるなら平和　一歩
自分では何も決められない過保護　ゆみ子
決めるにはちょっと早いと野党言い　重信
決めたのはあんた泣き事は言うな　シマ子
夫にと決めた女房の大博打　克博
旅立ちの日決まっていたらいいのにな　舞夢
無茶だとは思わなかった反抗期　宏造
しつけだと言って子供を殴る蹴る　隆昭
いじめ裁判遊びでないと断罪を　福貴子
放し飼いしたらめちゃくちゃ浮気する　久美子
めちゃくちゃにあんたが好きになりました　芳香
めちゃくちゃな毒舌やけどデリケート　ふりこ
レオパレス骨のあるとこ見せなはれ　舞蹴
バイキングめちゃくちゃ食べる誕生日　日の出

はびきの市民川柳会（大阪）中川ひろ介報

横からの攻めには弱い向こう見ず　宏造
すみれ咲く恋満開の花時計　みつこ
踊り場で小休止するもう傘寿　壽峰
厄年に虹色財布母がくれ　ちづる
無防備の無手勝流を攻め倦む　欣之
非常階段確かめてからチェックイン　いさお
階段を一歩のままの拉致被害　大子
踏み外しながら上る未来への階段　久仁雄
娘も巣立ち色紙で折る雛祭　美籠
階段を昇りつめたら空は春　清
梯子段はずす手前で妥協する　高鷲
お水取花ごしらえの色多彩　かつ美
若い若いと口を揃えて攻めている　瑠美子
攻めるより守って勝てと教えられ　専平
御互いに領海線で攻め倦む　久仁子
有り合わせで色々つくる主婦の腕　シルク
だんまりで攻めりゃ夫がご免ねと　千鶴子
不況下に輪をかけに来る消費税　紀雄
言い分を聞かず相手を攻める無知　雄太
手摺りあり風呂とトイレと玄関に　洋一
階段を踏みまちがえて医者通い　フジ
階段に悲鳴上げてる寺参り　さくら
将来を信じて渡る虹の橋　一文
余命表へ短い冬の日が攻める　泰子
落ちつけぬトイレだ壁がピンク色　まつお
攻めたてる批判の裏に愛がある　ひろ介

竹原川柳会（広島）　古田　太虚報

高度成長オリンピックも来た昭和　慶子
なごり雪ぼくの昭和の一ページ　敬子
ありがとう初恋ありがとう昭和　蘭幸
戦争ごっこしないと決めた昭和っ子　寛
到来の木の芽を合えて吟醸酒　宣之
ありがとう心優しい芽が育つ　栄香
どんな芽が出ても私の蒔いたタネ　半徳
枯れ草の布団温く温くよもぎの芽　弘子

佳句地十選　（4月号から）

川崎　ひかり　選

人間が凶器になってきた地球　ひかり
一日も笑わない日がある恐怖　黙人
お互いに我慢したからまだ夫婦　きよし
乗り継いでやっと出逢えた人と居る　万紗子
多国籍仲良く入る冷凍庫　宣子
相槌で繋ぐみごとな聞き上手　徑子
ありがとうだけを書きたい僕の遺書　宏章
ポケットの夢に触ればまだ温い　次根
夫の稼ぎ余らぬように使ごてます　千代美
八十路ですボーっと生きていいですか　正和

片山　かずお　選

ニッコリと黙って見せる薬指　ゆみ子
励まして労いも込め酒を酌む　紀の治
失意の日おろおろ歩く冬の街　富子
ふところが知り尽してる裏事情　振作
相槌で繋ぐみごとな聞き上手　徑子
お見舞いの嘘を知ってる千羽鶴　ひろ子
力まない余生ゆっくり賞味する　満作
心から味わう母のおみそ汁　雄太
子沢山母は上手に愛を分け　優子
作り笑い君も寂しい人なんだ　郁夫

摘まれてももっと強い芽を出すよ　千代美
リベラルも叫ぶこと無し平和國　一　徳
叫んでも犬の遠吠えには負ける　規　代
富士山へ叫ぶと雲が沸くようだ　笑　子
叫んでも壁が邪魔する永田町　夢　香
朝日山ときどき絶叫スポットに　淑　子
心愛ちゃんの叫び児相に届かない　輝　恵
海鳴りが男の叫び消しにくる　鬼　焼
政治家にしっかりせいと叫びたい　白　狐
頂点の椅子で叫んでいる孤独　昭　紀
セールスの電話小さな嘘をつく　歩　美
私の命も川もとろとろと　貞　子
墓じまい母がちょこちょこ夢枕　厚　子
花吹雪見事なアート池の上　幸　子
私にときどきあげているおまけ　比呂子
梅の花咲く咲く心晴れやかに　史　子
くつしたさんかたっぽへんじしてください　三歳　ちか

和歌山三幸川柳会　西川　千鶴報

穏やかな話し振りです人の幅　准　一
住所氏名告げて家族の幸祈る　宏　枝
寒風にも負けずひたすら百度石　当　代
単純なことではないと言う根雪　智　香
恵方向き平安祈る年始め　まき
従順な鬼を一匹飼っておく　日出男
進退が窮まり雪は海に降る　和　子
寒風に乗ってきそうな雪女　康　則

四世代生きた白寿の深い皺　ひろ子
盆の窪に積もる予感の雪催い　保　州
立ち直る呼び水となる思いやり　俶　子
もったいなくて寝てられぬお正月　よしこ
四コマのマンガで温い夫婦箸　幹　子
健康を念じ努力の自己管理　富　香
三が日過ぎて両手にごみ袋　起世子
平成の残雪惜しみつつ消える　義　雄
穏やかな海で日韓波高し　一　雄
おやすみなさい窓に置く月律儀者　弘　子
若水を汲んで細胞初期化する　純　子
天高く祈るかたちに実りの穂　碧
罪ゆるす根雪静かに解けて来る　菜　摘
穏やかに加齢人間らしくなる　智　三
異次元の世界で月が冴えている　次　根
心にも積もる雪あり寒椿　昭　枝
なごり雪積もるごめんと言ったのに　あき子
せめても薬横目に三が日　昇
雪だるまもう泣くものか太い眉　美枝子
雪形に田起こしの時期問うている　敏　照
真剣に祈る前途に差す明かり　八重子
穏やかになろうなろうと無縁仏　明　子
願い事星に祈って床に就く　珠　子
雪空に平和の祈り鳩が舞う　かず子
こっそりと温泉宿で雪見酒　明　宏
雪の肌褒めて小遣い少し増え　俊　介
穏やかな星で有りたいこの地球　千　鶴

城北川柳会（大阪）　近藤　正報

自己紹介長い人生一括り　千恵子
ごめんねを先に言えないもどかしさ　一　歩
キープする若さのかけら好奇心　(恒)博　郁　夫
蟻の列束ねる蟻がきっといる　満知子
すぐそこに梅桃桜待っている　北　舟
どちらもが先に逝きたい共白髪　捷　二
人の味括りきれない縄もある　宣　子
警戒に孫と一緒の縄電車　直　樹
過ぎては悪いもうやめようとまた二合　峰　子
アホ相手するのはもっと大バカだ　堅　坊
柔軟さキープしている広い海　満洲夫
先に逝く妻の無念を抱く無念　実
限りある命だ悩み皆捨てる　修
振り向いてほしいからまた吠えている　寛　昭
元号より干支になじんでいる古老　(村)博
先付けはウニとアワビで我が夕餉　満　作
前頭葉全開ペン先が弾む　榮　子
一括りしてはなるまい子の個性　和
苦も楽も春の日差しに括られる　克　己
キープしたボトルに一句添えておく　たもつ
人間の仮面かぶって虐待死　星　雨
蝶々結びのままあなたと添いとげる　麗
新元号語り部はまだ虹を追う　肇
平成は仕舞昭和一桁感無量　志華子
命明朗朝の大地を而と踏む　朝　子
母子家庭ママの気合の束ね髪

子育てへ化粧気のない束ね髪　賢子
道草も食ったさドジもあって今　俊雄
大切な出会い数数函につめ　弘委智
形容詞付けて美談で締めくくる　洋志
ありがとう春 青空へ感謝状　義昭

川柳塔なら　大久保真澄報

スワ地震度胸据えたはおばあちゃん　恭昌
民意無視腹据えかねる基地の島　貫一
我家では妻が影武者僕飾り　紀雄
上座には卑弥呼を据えて世は平和　薫
真打ちに据えられ舞台ひきしめる　光堂
君の目が本気モードだ腰据える　すみれ
腰据える覚悟いじめに耐えている　美智子
茶話のちょっと一寸が腰据える　甚之市
残り時間見据えていのち磨いてる　富子
日本の伝承香る盆梅展　萌子
春香る仏間をそっと開けておく　万紗子
土の香の野良着にもらう春野菜　崇明
水仙に利かぬ鼻よせ香を思う　敬子
紫蘇漬ける香りに混ざる亡母の声　國治
アンバランス湿布香水クラス会　怜依子
今日の鬱明日の生命として目覚め　弥生
昭和の男だ煙草もポマードも　眞澄
愛犬が馴染んでくれた加齢臭　倫
モカの香に春もほんのりご挨拶　ふりこ
耕した土の香りへ種をまく　辰雄
三寒四温もたもたしてるころも替え　ひろ介
あれこれと考えすぎる悪い癖　圭
どんくさい今は自分が言われてる　和夫
もたもたとしていたあの日あの時間　優
もたもたと出来そうもないダイエット　洋子
届かない愛が地団駄踏んでいる　のぶよし
背水の火の手へ母の浮き袋　成子
心遣い無いと怒っている地球　文聡
無人駅厚い座布団敷いてある　賛郎
洋食にお箸一膳添えてある　盛隆
うたた寝の肩に毛布をふわり掛け　展代
若作りしても座席をゆずられる　惠美子
一歩中へあと三、四人乗れるでしょ　行久
おしゃべりをしながらスリッパ揃えてる　理恵

川柳茶ばしら（愛知）　関本かつ子報

ご機嫌に桜ちらほら千鳥足　雅美
雨降りの予報はずれて邪魔な傘　まみ子
酒樽の雫に喉がきゅっと鳴る　三樹夫
ラーメンの汁がスーツをわやにする　遡行
雨の日はやっと私の休息日　美千代
春の雨新芽やさしく撫でてくれ　かつ子

わかあゆ川柳会（島根）　松本はるみ報

珍しいお客と母は大はしゃぎ　ハル子
珍しくすんなりと出たあの答え　恵美子
楽しみの予定一つに明日を生き　安子
何気ないスナップ写真にふと想ふ　はるみ
予定したやっと半分して暮れる　かつ子
古里の珍味小包母の味　昌

川柳塔唐津（佐賀）　仁部　四郎報

期待の娘異国の土になるつもり　蜂朗
当選に冷や水投票率低い　四郎
ジュゴンもう逃げてしまった美らの海　高明
国家試験研修医へと邁進し　實

富柳会（大阪）　関　よしみ報

水空気日本に帰りほっとする　新之助
観光地大阪弁が闊歩する　由夏
文を書く歳重ねても恋は恋　文重
母の通夜父しんみりと自己貶す　伸雄
けなされてポチもここぞと吠えまくる　田鶴子
ボロクソに言われ励ましだと気付く　隆充
天の句の十七文字にある矜持　寿隆
新元号新天皇に夢託す　清
年金で描く続編の海は凪ぐ　常男
シナリオを描き足してゆく八十路　よりこ
幾山河白寿の母の抱くいのち　あかり
老夫婦貶しあう程睦まじい　一文
借りたのはあなたの広く深い海　かこ
貶さずに誉めろ誉めろという時代　武人
貶されて貶して互い磨き合う　惠
足跡は真一文字に父の道　寿之
告白の春借景の石舞台　欣之
私をけなす鏡は信じない　よしみ
瞳の奥に甘い港を持つ人よ　森子

川柳塔みちのく（青森）　稲見　則彦報

真っ白な雪に落書する黄砂　ひとし
真実の愛を探すがまだ見つからず　小とみ
乱舞する弘前桜たまらない　重虎
母ちゃんの前ではいつも真顔です　則彦
未来図を描くクレヨン子に贈る　隆樹
ロボットに看取られて逝く近未来　慕情
少しずつ受け入れてゆく会者定離　美鈴
少しくらい少しくらいとゆるむタガ　吹喜
老いてきて手鏡見る日少し減り　初枝
酸欠に空気を買った吹雪の日　柳子
進化して性別不明人となる　孝子
8Kに秘めたときめき暴かれる　風来坊
少し気を抜くと気軽になる振り子　劦
吹雪花吹雪ならもう春なのに　澄子
寄り添えば鬼もポロリと目に涙　のぶよし
発言は嘘だと知っている心　規子
未来図が書けない侭でたそがれる　一呑
生きているあかし吹雪には負けぬ　龍馬
小学生吹雪でさえも楽しそう　真由美
喧嘩して足取り軽く里帰り　英子
夫婦仲たまに喧嘩も生きる薬　呑舟
ドーナツの穴から孫を見て飽きぬ　黙人
出来る事数えてみれば家事と趣味　京子
受け入れたつもりの老いを持て余す　ふさゑ
年金を孫と介護に仕分けする　花峯
政治力が村を二つに分けた道　きよし
ドクターがお世辞言ってる五十肩　霜石
プライドはもう捨てましょうススキの穂　洋子
平成の最後は妖しい口紅を買う　和香子

川柳同友会みらい（鳥取）吉田　陽子報

平成の終わり昭和の良さ思う　みどり
まだ出来る事を数えて生きるのだ　昭子
嫁に来て鬼と暮らして人になり　寿々子
半生紀過ぎた旧姓遠くなる　千恵子
格安のツアーで春に会いに行く　れい子
凍結へペンギン歩き試みる　和代
共白髪の夢は儚く花手向け　美恵子
親父ギャグ一度うけたらやめられぬ　和郎
春の風走れる靴を買いに出る　澄子
闇深く疑心暗鬼の火が灯る　健二郎
傍観者ならばどんなに楽だろう　章子
別れと言わず面会に来る身内　みち子
汗かかず座った椅子が落ち着かぬ　葵
マニュアル通り対応されて寒くなり　あゆみ
ネグレストするなら僕を産まないで　恵美代
ワンコイン貰ぎ大きな顔はせず　華蓮
話す事山ほどにある年賀状　安子
待ち伏せをする思い込みだとしても　陽子
千羽鶴は特効薬じゃありません　心咲
言葉だけ貰いで役に立ちません　游子
とっておきの友に相談してみます　扶美代
風読んだあの時僕は負けていた　ダン吉
忍耐だディスイズミーと叫ぶのだ　公弘

倉吉川柳会（鳥取）　竹信　照彦報

うば捨てとじじ捨て山が満杯だ　石花菜
大和魂捨ててしまった敗戦日　重忠
武器捨てよ世界平和の為になる　けいこ
どこからも捨てられるまで生き延びる　瑞子
徐々に捨て三途近いが免許取る　恭子
計算に強くて会計任されぬ　雄大
災害へ己忘れて救助隊　康子
夫逝きて強い女になる憂き世　由紀子
斜め右強い視線が気に掛かる　風露
高飛車に医者は決めつけ薬出す　大鯰
欲しい物すたすた歩く強い足　智恵子
国の借金付けはたっぷり若者に　龍枝
たっぷりと寝てもねむたい春うらら　鬼一
自分史に恥もたっぷり混ぜておく　美知江
たっぷりと時間はあるが金が無い　酔芙蓉
蓄えはたっぷり余命はちょっぴり　野蒜
たっぷりの愛を注いで子育てす　紀美恵
リラックスまあるい君の膝まくら　萩江
リラックス猫と一緒に日向ぼこ　日出子
リラックス出来ぬと地球蒼い顔　次男
雄大な大山眺めリラックス　祐子
子の電話くつろぐお茶の老夫婦　茂夫
たっぷりと油断をさせて落し穴　照彦

京都塔の会　山田　葉子報

晴れた日は春のひかりをスケッチしょ　文代

スケッチに取り入れている飛行雲　肇
スケッチに出る用意して春を待つ　朝子
うんざりと聞いております孫自慢　光久
来賓のマイク陳腐の数珠つなぎ　欣之
毎日がうんざりします妻の愚痴　五月
冷たい手ぼくが握っていいですか　昭
インフルエンザ新薬に助けられ　ルイ子
クラス会同じ話で盛り上がる　弥生
ココアって寒い心をほくほくに　ふりこ
相棒をペットショップへ買いに行く　福子
相談はB面にいるわたくしと　哲子
平和への願い陛下のお言葉に　満子
叫び声少なくなった運動場　弘之
早朝にラジオは叫ぶ一、二、三　泰夫
柿の木と茅葺き屋根で埋まるスケッチ　多津子
秘湯から届いたスケッチのハガキ　牛延
窓開けて隣の梅を絵にもらう　洋志
虐待の真相謎に包まれる　葉子
相槌を打たれてケチもつけられず　則彦
電話はこわい相談してねおばあちゃん　美津子
バッタリと話の長い人に合う　かずおりこ
ボクのことだちゃんづけで呼ぶばあば　万紗子
スケッチには確かにあった虹の橋　英旺
春うららスケッチブック白いまま　求芽
未完成のスケッチブックにある秘密　宏子
叫ぶよりささやく方が効き目ある　弘子
長話もういいだろうと叫びたい　忠子
叫び声聞こえて走る暗い夜　綾子

あの春がスケッチブックで甦る　北舟
花ビラと相談してる若い恋　義昭
迫る老い負けるもんかと叫びたい　弘委智

川柳ささやま（兵庫）　北澤　稠民報

春天気続いてほしい雨いらぬ　かほる
しもやけを死語にしそうな温暖化　哲男
仏さんちょっとですけど桜もち　稠民
今だよと囁くようにチャンス来る　真由
異国にて困った顔の月に会う　さゆ子
留守中の玄関アンテナ客キャッチ　幸子
篠山に丹波がついて春となり　善輔
小用も便座使えと妻は言う　剛
信じてたそんなあなたに裏切られ　重男
あれこれと迷った時は妻頼り　喜弘
お酒って不思議よ泣いたり笑ったり　良子
年重ね時計の指図遠慮する　照代
めんどうな事もコツコツ私流　美智子

川柳塔鹿野みか月（鳥取）福西　茶子報

卒業がなぜ出来たかと首ひねる　文道
あとわずか残る平成仰ぎ見る　すみれ
人間も猿も最後は天仰ぐ　盛桜
釣銭はぴったり合って当たり前　大鯰
石積んで積んで卒業式は今日　熊四郎
紙飛行機飛ばしてケリをつけました　七七
路地裏で進軍ラッパ吹いている　美ッ千
何ごとも妻を仰げば無事故なり　綾子

卒業もない希望も失せた農家です　重忠
人生の卒業はまだ先延ばし　ゆり子
トランプと安倍はぴったりその姿勢　裕
仰ぎ見る陛下目線で話される　照彦
偶然に拾った鍵で金庫開く　小鹿
一の宮巡りで仰ぐ御祭神　よしあき
初恋は卒業までにしたかった　草文
余りにもピッタリ過ぎて疑問持つ　実満
欝憤は露地の石ころ蹴って消す　茶子
ぴったりと蓋してること二つ三つ　鈴
卒業と言えば青春時代かな　好幸
東京に見たのはポストと小学校　孔美子
鳥取の未来を仰ぐ知事の夢　満
ぴったりと私あたなの影かしら　恒
あたたかい路地は私の演歌みち　一平
三億の鮪仕留めて英雄に　蟹郎
やがて来る空飛ぶ車仰ぐ日も　弘子
ぴったりと張ったつもりの隙間風　みさ子
古里の露地で育ったわらべ唄　かおる

川柳塔わかやま吟社　小谷　小雪報

拘置所を出れば帽子にサングラス　日出男
肩に重みかぶさって来る古戦場　あきこ
今日に限っていやに優しくなる夫　紀久子
オレオレと名乗る息子はここに居る　よしこ
口笛も前より息が続かない　小雪
答弁のちぐはぐ嘘を覗かせる　准一
体調の良い日は医者へ行くとする　保州

ちぐはぐな話でもめる老いふたり　徑　子
舞い上がりちぐはぐになる受け答え　冨美子
ちぐはぐと仲良くなって老いの日日　秀　子
ちぐはぐに色を重ねて出す個性　京　子
はめられて二人で暮らす泣き笑い　ほのか
嵌まったら開く耳忘れ突っ走る　まさみ
茶化されて茶化すしかない倍返し　紀　子
冷めた茶をごくり男は立ち上がる　愿
じっくりと本音を探るレモンティー　寿　子
きのう今日のことではないという茶渋　知　香
一服のお茶が空気を入れ替える　大　輪

川柳大阪　山崎珠生報

世の波を越える犬掻きにも疲れ　美　籠
憲法の番犬が要る安倍政治　紀　雄
愛犬が我が家の序列知っている　俊　雄
春の土手土筆が顔を出しました　志津子
切に祈る池江選手の再デビュー　福貴子
満開の明日へデビューを待つ桜　賢　子
父の日が楽しい人もいるのです　まつお
大好きな楽しい春がすぐそこに　芳　香
バカンスは十連休を海外で　珠　生
友にあう35年月日たつ　美世子
さくらさくら楽しみ事がまた増えた　万紗子
一人酒まわりが早いさみし酒　司
命まで奪うしつけに極刑を　蕉　子
犬死にさせてはならぬ辺野古の地　かよこ
生きること百歳の背が学ばせる　満知子
一心寺いつも賑やかいくつもり　勝　弘
犬死にを会社のためと言う上司　堅　坊
この部屋が命綱です引篭もり　昌　代
雨よ降れ花の命を播きました　一　歩

南大阪川柳会　松岡篤報

可愛い嘘場を和ませて許される　弘委智
イタズラも許すしかない孫の顔　実
勘弁して十年前の事でしょう　勝　弘
満月がきれいで許すプロポーズ　あや子
何ごとも許して夕日赤くもえ　たもつ
寿司提げて帰れば許す朝帰り　和　雄
無口だが父の背中が許してる　郁　夫
許すとは言わずに孫を抱き上げる　弘　子
許したら少し私も楽になる　ダン吉
金の要る話になると死んだふり　楓　楽
おねだりの孫ちゃっかりと爺の膝　克　己
命日は雨活字の海に溺れよう　益　子
カジノより酒に溺れる方がまし　シマ子
溺れそうで掴んだ藁がいい人で　真佐子
本好きで本に溺れるのが夢で　直　子
養老の滝なら僕は溺れたい　博
文明の波に溺れてギブアップ　志華子
定年後ますます嵌まる五七五　ばっは
文明の利器に溺れているスマホ　柳　伸
ＩＴの海で溺れている後期　栄　子
先の事考えず心軽く持つ　ルイ子
軽々とチラシに乗るな自己管理　タカ子
肩書きをカットしてから軽い背　ひさ乃
小者だな軽いジョークにいきり立つ　歌留多
虐待へ三年の刑軽すぎる　いさお
検査シロ足取り軽く帰路につく　国　和
お姫様抱っこをされて母照れる　東　風
ジョークだというが意外と本音かも　篤
プレゼント軽くて高いものが好き　昌　紀
軽い気で好きだと言って六十年　一　歩
ＩＴの波にアップアップのおつむ　恭　昌
脳みのそあっぷあっぷにいたわりを　柳右子
温暖化今に人間喘ぎだす　修
若返れアップアップとマッサージ　峰　子

長柳会（大阪）　辻村ヒロ報

噂話ばっちり合わせ開く耳　ヒ　ロ
心開き解いた友とのわだかまり　とも子
夢洲に府の予算付け賭場開く　孝
朝露に心開かれ座禅行　純　風
春が来た雨戸全開深呼吸　一　男
幼稚園消えてオープンケアホーム　正　美
九条を頑固に守る国であれ　孝　代
恋を知り頑固の殻を脱ぎ捨てる　敬　二
人生百年頑固老人いきいきと　弘　美
ついてゆく頑固な父の丸い背な　和　代
頑固さと折り合い付けて共白髪　幸　子
重荷さえ意地で支えた亡父の背な　三和子
口紅の頑固な跡に泣かされる　隆　彦
頑な老い心よ開けゴマ　ふ　み
頑な心を開いてくれた愛　淳　司
妥協せず駆け引きもせず逃げもせず　直　樹
喜寿過ぎて俺の頭もおぼろ月　たけし

趣味仲間切磋琢磨し老い知らず　洋二
困りごとニッコリ受ける正義感　光弘
箪笥には毎晩唸る金を持つ　由夏
小銭こそむだには出来ぬこの時節　千代
流石ボス話し上手で聞き上手　靖博
文豪も漫画に席を奪われる　和子
心の臓休みたいけど休めない　正博
身の内に芽吹くものあり春の水　旅人

ブラザ川柳（大阪）　穂口　正子報

頑固者お金が無いと見捨てられ　正子
借りた傘見覚えのある柄とシミ　五月
開運を成してダルマに目を入れる　久美子
坊は男炎で泣かん利かん坊　園子
そっと手を開けばいつも亡母の声　悦夫
おじいちゃん片意地張るのそこまでよ　政夫
通信簿そおーと開けた幼い日　淳司
坊ちゃんをやさしく包む清の愛　修
子供食堂笑顔いっぱいカレーの日　清乃
呆け防止易しいパズル基礎ドリル　克三
がたびしの雨戸言うこと聞きません　弘光
蜆汁頑固なヤツが二三粒　一彌
エンディングノートにまずはパスワード　和代

八尾市民川柳会（大阪）　中薗　清報

人間の甲乙つける答案紙　寿之
復興は遥か彼方の青テント　壽峰
菜の花畑黄色い帽子の天使揺れ　耀一
白黒を貫くわたくしの眉間　あかり
春一番昨日の答今日の空　涼子
悲しみを分けて担ぐと肩を貸す　卓郎
目の前にいるのに存在が遠い　恵
懸命のSOSが届かない　みどり
浅瀬から未知へと誘う広辞苑　かこ
画策に溺れたゴーン身の破滅　高鶩
維新政治悪知恵使いクロス選　紀雄
善悪の自問へ神の答案紙　欣之

ふうもん吟社（鳥取）　両川　無限報

一日があっという間に過ぎる老い　回春子
決めちゃダメ生産性で人の価値　隆浩
一人だけ生き残ったらどうしよう　天翔
少し良くなると忘れている薬　美恵子
聞くふりし良からぬ事を考える　凱柳
七癖もあると仲間が寄り付かぬ　一粋
出しゃばりのタンス預金がうずいてる　振作
幸せの死角に飢餓と言う魔物　一瑤
家背負い基地を求めたカタツムリ　とも湖
あの山に昔作った秘密基地　勲章
慰安婦も基地も戦後が終わらない　義徳
句作りはいくさ句会を基地にして　善平
晩学の基地は炬燵で四苦八苦　幸子
四畳半私の基地はここにある　鐘旭
名が出ないあせればあせるほど出ない　真理子
あせるけど息子の嫁が決まらない　昌鼓
半分はあせりの火花散るブーケ　茶人
あせったな詰めの一手が最悪だ　亨
あせらずとも明日は必ずやってくる　節子
あせるなよその言い方もあせってる　大
婚活がはかどらないで気があせる　由美子
星空は無限の夢のままでよい　妻子
焦りだすガイドの旗が消えちゃった　重忠
あせるほどズンズンさがる蟻地獄　一平
三代の年号に泣く拉致家族　毅
大空は嘘はつかない四季巡り　金祥
パイロット空飛ぶ人が酒を飲む　茂登子
五十年空気のようになる夫婦　房江
空耳とは言わせぬ言ったよねあなた　みゆき
青空に詫び言ってから嘘をつく　りんこ
空になる不安米櫃子が五人　蟹郎
大切にしよう命の空き時間　楓花
空白のページに理由など書けぬ　八千代
雑踏の街に智恵子の空がない　無限

ほたる川柳同好会（大阪）水野　黒兎報

百均もオメガも同じ時刻む　純子
一分が長く感じる待ち惚け　正子
古時計今日も元気に時刻み　柳童
リハビリのメニューをこなす鳩時計　一
花時計お日様を連れ香り連れ　一弥
デジタルは遅刻するのも秒単位　孚彦
砂時計見て暮すのは気分楽　信男
チューリップが伸びて整う春の庭　春代
祈りの朝非常持ち出し整える　順子
夢入れて心のパズル整える　美佐子
来客にあわて整頓する茶の間　奈津子
花を活け軸取り替えて水を撒く　守啓

抱きあげる野に置き去りのぬいぐるみ　久子
お迎えが来ている何と可愛い子　則彦
やっと春野にレンゲ咲き熊も出る　黒兎
本棚の本と当時を振り返る　桂子

あかつき川柳会（大阪）　**山本　昌代報**

9条を過去のものにはしたくない　(櫻)秀夫
島に橋しまが道路になりました　敏子
もうひと花咲かそうとカモさがす　和
橋桁に流した罪の引っ掛かる　みつ江
ゴーン保釈十億円の出所は　(田)廣子
吊り橋を渡る心地の奇数月　里子
この町でバケツリレーをした記憶　武
六島を四島にして大義捨て　太郎
安倍の辞書真摯は無視とあるらしい　直子
アルバムの亡き妻今もにこやかだ　万作
不愉快な過去には触れぬ縄のれん　堅坊
あの頃の君はセーラー服のまま　ひろ介
美しき言葉に秘めた落とし穴　高鷲
望郷の亡母の形見のお針箱　壽峰
春見つけたつくしタンポポいぬふぐり　たもつ
四季通じ京都を語る渡月橋　和雄
過去の夢どれも叶わず夢のまま　紀子
渡れない橋を揺らしているのです　ふさゑ
ときめきといっしょにあける雛の箱　理恵
美しい誤解があっていま二人　史郎
年老いた美しさにはかなわない　郁子
過去形で話すみな星になる　紀乃
年度末工事で眠れないモグラ　浩子
干し草に転びもつれた若かった　ばっは
過去の事引っ張り出して妻優位　満知子
もう過去にしばられまいよ春だもの　朝子
餅箱に明治五年と祖父の文字　克己
吊橋で揺られ悟った我が度量　福貴子
弁当箱妻の愛情味に出る　善之
極楽橋渡ると梅の真っ盛り　一歩
民意無視工事続ける基地辺野古　常男
着物縫い直して着る母の過去　惠美子
スーパームーン彼に電話をしてみよう　千代美
吊り橋のおかげで祖谷は観光地　喜代志
嘘も不正もみんなでやれば強くない　鈍甲

川柳塔さかい（大阪）　**内藤　憲彦報**

遠出してランチ楽しむ老夫婦　廣子
うなぎは飽きた寿しも飽きたしカケウドン　敏治
ナニクソの時は大盛りスパゲティー　憲彦
ランチより何が何でも握り飯　富夫
草原の牛は運命知っている　佳子
拉致家族恨んで余りあるさだめ　誠一
運命とつぶやく鎮静剤にする　五月
残り火が燃える運命線が伸びる　堅坊
悪戯な神が運命もてあそぶ　俶子
運命と机並べたランドセル　進
運命の出会いであった資本論　愿
ベートーベンの第五烈しく打ち鳴らす　八千代
歩くのは遅いが確と前を向く　ひろ子
また遅刻目立ちたがり屋かも知れん　美津子
戦争になってからではもう遅い　時雄
手遅れですと大きな声でお医者さん　としお
のらりくらりと一強が逃げ回る　みつこ
三分の遅延許せる春の駅　妙子
遅いけどお化粧だけはばっちりと　舞夢
運命と思い込まずに努力する　玲峰
改名をしても運命変わらない　朝子
チョコレート三つもらった女運　扶美代
短命もさだめと医師に言い切られ　雅美
明日のこと何もわからんけど元気　和夫
運命と他人は軽く決め付ける　さくら
汗かかぬ男運命論を吐く　ダン吉
将来は役者と決まっている梨園　玄也
あの時に大きな津波来なければ　志津子
運命と見きわめ見つめ覚悟する　唯教
堺では刀刃物は宝です　光雄
淋しさは神の試練だ闘いだ　ゆみ子
最後まで仮面のままで玉の輿　雅明
桜咲き寒の仕込みの樽開ける　憲好
歳月に過去を許され助けられ　輝子
さて老後限りある生楽しまん

西宮北口川柳会（兵庫）　**藤井　宏造報**

樹の芽吹く万の命に引継いで　弘委智
一本の道を愚直に生きている　野鶴
歳月はあっあっあっで桜かな　勝弘
父の絵の少女はわたし赤い傘　哲子
老木も生きているぞと新芽だし　紀華
立ち読みの出来る本屋がまた消える　利子
平成の最後のVへ四股を踏む　宣子

よいしょして築いた地位は渡せない　新録
苦労人よいしょに軽く乗ってやり　盛夫
励まされよいしょもされてこの程度　恭子
坐るも立つもよいしょこらしょどっこいしょ　弘子
五月一日午前零時に正座する　和宏
謹んで差し上げますが粗品です　健彦
ふる里の山はとっても聞き上手　美津子
故郷の山は黙って立っている　洋次郎
悲しみより喜び多い子沢山　りこ
病室に朝日が入り山越える　宏造
苦しさの峰の彼方に富士の山　浩司
山頂に立つと羽ばたきしたくなる　千賀子
パパの髪娘がひどく気にしてる　光久
銀髪をなびかせ今日も御出席　正彦
この辺で最後の恋と致します　ひとみ
世渡りの上手い奴ほど担がない　一徳
平凡な亡父の言葉にあった意義　迪
癒やすのは自分と気付く長い道　千代
出来ぬより出来ている事感謝して　敦子
億年をハヤブサが解く春の夢　邦男
今の世に謹むなんて死語かしら　弘子
病癒え一山越えた生きてやる　みよし
栄光も失敗も過去未来を生く　伯備
凍て付く冬たえて仮設の八年目　野薫
わたくしに小野小町と言う夫　良種

川柳あまがさき（兵庫）　大浦　初音報

アポ電に金の無いのが察知され　英坊
過ぎ去れば好い事だけが目に浮かぶ　たみえ
稀勢の里白い回しで胸を貸す　厚江
大吉の運を生かして宝くじ　柳明
蟹がネギ背追って運よく酒も来た　菊江
良き夫巡り会ったと感謝する　(入)修平
俗念を去って気ままな一人旅　初音
バリウムは苺味でも飲みにくい　新録
庭に鶯今日はいい事ありそうだ　公子
言い訳によく使われる運なんて　雄次
去り際に甘い言葉を置いて彼　真桜子
美女なのに愛嬌なくて虫つかず　(高)千賀子
毛髪が名残惜しげにまた一本　純
未来志向なれど過去から抜け出せず　正彦
巣立つ君意気揚揚と去っていく　りこ
出し惜しみする程の知恵持ってない　(竹)千賀子
今日もまた元気な白髪生えてくる　こみつ
ふかふかの椅子で孤独に耐えている　紀華
優しくてイケメンなのに金がない　紀恵
みぎひだり影追いかける春の宵　ヨシエ
追わないで私はこれでいいのです　ひとみ
近頃は妻と張り合う物忘れ　(谷)修平
盲導犬役割終えて去る余生　ひろ介
生新子売り場に並びやっと春　宏造
縄文の春に土偶は子を孕む　万彩
運と金すべてこの世で使い切る　良種
黒髪の想いをさらりグレイヘア　哲夫
修理より買換しろと電器店　正和
この先は明るい言うがもう八十　祐康
断捨離を決めた頃から惚けはじめ　靖鬼
踏まれても踏まれてもオレ生きてきた　勝弘
近況は言わずと解る顔の艶　美籠
なるようにしかならないと焦らない　かずお
両陛下勝手気儘に暮しませ　つな子
一つずつ忘れて純になっていく　芳香

川柳さんだ（兵庫）　村田　博報

大方の悩みは金で片がつく　好文
母さんは悩んだ顔を見せません　順子
妻の焼きもちケアに夫を行かせない　喜弘
悩むのは止そうと思う子の寝顔　武彦
娘が嫁ぎ繋ぎ手のない墓終い　つな子
嫁ぎゆく娘の行く末が気にかかる　美籠
孫連れて不満を吐きに来る娘　祐康
日向ぼこ祖母のお膝で猫昼寝　雄太郎
ロードショウ眠気マックス妻の肘　厚子
呑み放題六十分は忙しない　正和
よその娘の何時の間にやら子を抱いて　ゆかり
米朝が世界裏切り席を立つ　健二
さっきまでいも虫だった蝶の舞　晃
早よ起きやもう春やでと修二会の火　ひろ介
ストレスが或る日突然降ってくる　洋次郎
倦怠期朝から笑顔出せません　宣子
歯ぎしりといびきを連れて行く旅行　万彩
避けきれぬ彼女の涙ミサイル級　寅男
ひなかけば絵筆は孫の顔になる　一子
顔認証素顔の私ブザー鳴る　富夫
独り居に句会浴場友が居る　美智子
家中を舞台に踊る独り者　堅坊

焼きたてと言うが昨日の事らしい　修平
雑草にも学術名がちゃんとある　利子
アンパンマンみたいな嫁がやって来た　久美子
拉致家族希望の海は今日も時化　紀恵
その時もあなたが傍に居て欲しい　ひとみ
出来るならＤＮＡはキムタクを　千代美
命名に親の望みを一字入れ　雅尚
セラピー犬笑顔いっぱい連れてくる　千賀子
補欠でもよろしと絵馬に希望校　哲男
ご希望の値段で葬儀出来ません　花門
乳房はるこの喜びにある希望　優子
見捨てたりしません君が熟すまで　恭子
年金は小遣い全部使い切る　義徳

川柳ねやがわ（大阪）　**籠島　恵子報**

趣味の会集まる人は皆元気　ルイ子
サイフォンの炎揺らいで春の雷　茜
水たまりの虹へ涙をそっと拭く　星雨
待ちわびて今感涙の呱呱の声　賢子
里の老母ひっそり暮す低い屋根　朝子
餌を撒き集まるじゃこは俺のもの　秀雄
ひっそりと春の蝶呼ぶ崖の百合　弘一
集まれば病気年金孫の事　祥昭
孫九人囲まれ喜寿のバースデー　高鶩
幻想の海ひっそりと月の影　壽峰
校庭の記念碑今日は花が舞う　麗
和裁習い今はちっとも和服着ず　さち子
3・11瞬時に街は無呼吸に　仁
春雷が素早く脱がす冬衣　信子

撚り合って命助ける綱になる　寿子
万博にかこつけカジノ大投資　鈍甲
子供減りお堂もひっそり秋の風　薫
砂浜に春を印した指の先　弘委智
土堤つくし集めて春のお惣菜　尚世
情念がほとばしってる朱の着物　武彦
プライドの繕いばかりして暮れる　郁夫
心まで干からびさせたさようなら　修
煽りなどせずに平和な車間距離　かすみ
常温保存されてのっぺら棒になり　恵子

六甲川柳会（兵庫）　**奥澤洋次郎報**

正直な人だ笑顔が作れない　美津子
方言は生れ育った地の誇り　忠志
バラの風呂ひととき姫になる私　千賀子
産地採れたて訛り味つけ道の駅　弘
味噌汁へ一味添えるきざみ葱　美穂
とつぜんにムードこわした父の喝　弘華
ムードにはワインと気障に決める人　正彦
年寄へ席を譲るは小学生　義明
流れ星この年になりなに祈る　邦子
チャンスにも期待抑える虎フアン　浩司
イカナゴを炊いたんが好き神戸っ子　廣光
懐の暖い日は元気です　哲男
ほっこりする句会で元気もらってる　利子
温もりの孫の手離すバス乗場　恭三
にじり口入るとこからお茶の味　狸月
だ行ざ行の区別つかない国訛り　洋次郎
両首脳チャンス逃した核廃棄　憲三

幸せをつかんだチャンス運しだい　じろう
お遍路に尽くす接待あったかい　博
譲られた座席に残るあったかさ　美恵子
菜の花を愛でて匂って酢みそあえ　芳江
頬杖の高さで見詰めあうふたり　和郎
風向きが変った刹那打って出る　光久
世渡りの上手な風を待つ綿毛　武彦
ヴィヴァルディ前頭葉へ春が来た　道子
老いらくの恋のチャンスにアメくばる　ひろし
折りたたみ出さずに入る君の傘　盛夫
一念発起昨日と違う声が出る　和宏

川柳塔まつえ吟社（島根）**相見　柳歩報**

そよ風にギギギと鳴いている我家　芳山
真実に会うまで鳴らすハンドベル　寿代
パトカーの音に起こされ事件かな　輝山
電子音出来たできたと賑やかな　邦代
ゴング鳴るオレはいつでもチャレンジャー　柳歩
泥臭い文章書いて悦に入る　豊仙
消臭剤椅子に撒きたい永田町　雪代
香水に「顔に合わねばよせ」とある　瑞人
トランクス綻び見つけ尻を縫う　青帆
まとまらぬ家族の意見縫い合わす　米估
そのうちに忘れてほしい口を縫う　ゆき
ガムテープ貼りたいとんでもない場所　美智子
合格の貼紙すぐに電話する　久絵
孫からの切手ななめに貼って来る　静枝
十三回忌障子貼りかえ迎えます　モナカ
トイレにも名言貼って思考部屋　あきら

イチローが打つ音響け春が来た　知恵子
十割で打った蕎麦から切れていく　とも子
出る杭は打たれると言う出てみるか　弘充
飲み過ぎだ相槌ばかり打っている　みちを
鍬を打つこともないのに鍬がある　徳利
打ちのめせ議場で昼寝してる奴　草庵

岩美川柳会（鳥取）　山下　節子報

懸命に生きて原石玉になる　一瑤
言い過ぎた後でハッスル詫びている　一粋
大金を積んでも釣れぬ玉の輿　一平
九十二歳私の命シャボン玉　重忠
目の玉が気になる俺の目は茶色　弘六
毛玉だらけだ野良猫もわたくしも　完司
玉石を混ぜた私の宝物　茶子
春がすみ貴方はっきり見えません　美恵子
かすむ目に眼鏡かけても役立たず　たぬ
初曾孫老いもハッスル会いに行く　菖子
ポッケから久しぶりねと五円玉　敏子
泣き寝入り許すな辺野古拉致北方　公子
負けて泣く勝って涙の握手する　振作
同窓会ドレス新調するつもり　真理子
ハッスルの後遺症かな医者通い　彰夫
ドナー急増嬉し涙がとまらない　雅女
ハッスルして財布が軽くなりすぎた　千代
飴玉をしゃぶらせ腹の裏探る　凱柳
嬉し泣き今年は見たい拉致家族　天翔
泣き止んだところで遺産話する　幸安
金たまる玉買わされて拝んどる　蟹郎
泣き声で自己主張する赤ん坊　節子

川柳藤井寺（大阪）　太田扶美代報

秘書官は記憶失い出世する　勝弘
平成の記憶の中に両陛下　シルク
私かて努力はしてるそれなりに　まつお
義理チョコを貰って義理チョコを返す　紀雄
初恋の記憶はいつも未完成　絹子
忘れたい忘れられない日の記憶　キーキー
晩学のペンが此の頃山である　弥生
覚えてはいるが黙っていてあげる　美代子
風のまま漂うように昨日今日　俊雄
古希迎え母の想いにたどりつく　育代
飽きるほど暮らすと息も合ってくる　信二
杉め桧め今年も嫌な時期である　進
春一番ビクともせずに芽吹く樹々　ばっは
それなりにあった凹凸今寸胴　ちづる
和む記事ハズキルーペで探す日々　みつこ
可もなく不可もなくわたくしを生きる　あかり
同窓会それなり歴史刻みおり　喜代子
それなりにお年召された両陛下　いさお
失いかけた記憶の底に京言葉　瑠美子
それなりの関係ですよ彼女とは　光男
それなりの眼光ですが元刑事　清
逃げ足の早い記憶に音をあげる　俶子
それなりに妻にサービスしています　一歩
米を研ぐまだらな記憶研ぐように　みつ江
それなりの筋が通った口答え　六点
それなりに無理をしている若返り　典子
それなりの自己主張する三歳児　ひろ子
記憶では去年の今日は豆ご飯　扶美代

きゃらぼく川柳会（鳥取）後藤　宏之報

今さらに上等なチョコ仏壇に　令位子
寒い朝布団が僕を離さない　久直
色ごとをさらりと言える夢のなか　宏之
ジョーク言う医者が真顔で話してる　章
月旅行今のところは未定です　紀の治
気になって話を聞きに行く見舞い　恵子
へたな句で私は裾を飾ります　美智子
早春に恥ずかしそうに鳴く鶯　美佐子
初詣願いとどいて手を合わす　菜々
飛んで飛んで飛んで飛んで杉花粉　美穂
畑の野菜白菜大根かご重い　美草
梅の香に巡る古城の夢を追う　ゆたか
楽だけど雪が恋しと言って見る　汪
私を活性化する酒を飲む　雨奇
暖冬に梅の花まで弾んでる　多美子
三寒四温ぼちぼち咲こうかと桜　千代
若者と距離を縮めるコンサート　治代
弾まない気持ち体温低すぎる　日枝子

大山滝句座（鳥取）　新家　完司報

新元号桜吹雪に躍り出る　麦青
若者に夢を託して新元号　楓花
公平で公正な世の新元号　雄大
ややこしや新元号の歳勘定　みちを
あの世にもきっとあるはず甘い酒　凱夫

酒好きの医者は話がよく解る　紀の治
生まれてからこれまでずっと雨の中　芳光
甘すぎるピントでそれなりに美人　正人
腐ったリンゴ回り続ける観覧車　寿代
甘かった金色の馬車未だ来ず　八千代
おしゃべりをしましょうグラス重ねましょ　くにこ
永田町遠い沖縄甘く見る　照彦
甘いもの辛いものより石清水　石花菜
ロシア産イクラまがいを食べている　幸子
アポ電で甘い汁吸う殺人鬼　裕
死神がそろそろですと甘く言う　由紀子
安倍さんもプーチンさんも大嫌い　けいこ
早口言葉連続三回が限度　風露
生命の連鎖の中に俺もいる　道唱
死期迫る飼い猫甘い声で鳴く　重忠
夕陽見て甘くささやき妻ゲット　清明
秋田犬ロシアに行って幸せか　久子
ロシア人パズルのように車積み　鈴野
広すぎて掴みどころのないロシア　規雄
ザギトワを見てコマネチを思い出す　希楽良
ロシアから愛の手紙が届かない　完司

豊中もくせい川柳会(大阪)初代　正彦報

身構える捕手のタッチをすり抜ける　肇
痒いとこ届かぬとこが増えてきた　求芽
笛太鼓無くても踊る調子者　歌留多
酔うて良し酔わんでも良し花見酒　公子
阿波踊り自分がするとタコ踊り　健三
老いの身で大金の嘘に踊らされ　多美子
塩分を少し足したいこの会議　英三
春めいて心も踊る外出着　時子
補聴器でフムフムフムと聞き上手　健二
塩漬けの失恋時に顔を出し　(伊)武彦
ショッパイな喧嘩のあとの味噌汁は　廣光
春の彩気ままに使うわが余生　きらり
ひら仮名で書けばするりと嘘が出る　美佐子
あと少しへ結び直そう赤い靴　(永)玲子
自らを律してあすへ以下余白　ヨシエ
廻り寿司パネルに踊る孫の指　弘
華やかに生きてひっそりピンコロリ　堅坊
一線を守り立ち位置ゆずらない　野鶴
欲しいのは幾つになっても母のハグ　(岩)玲子
自分史に川柳道が花添える　(福)正彦
聞き上手あなたの側は温かい　千鶴子
海のしずく命の始まりは秘密　久子
居酒屋のシメは塩を利かせたサバ寿し　宏子
わたくしはお塩目立たず役に立ち　見清
艶やかに季節彩る花吹雪　美籠
塩漬けにされた企画が泣いている　光久
お友達のままでいようと躱される　(山)武彦
ホームではフォークダンスにみな笑顔　(初)正彦
子を育て自分の器試される　葉子
向上の糧にもなった嫉妬心　則彦
スマホデビューひらがな踊る父の指　雅美
お母さまそこは傷口ご無体な　道子
春風に自転車の妻若返る　黒兎
親の手をするりと抜けて子は巣立つ　美智代

翠洋会(大阪)　大久保真澄報

食卓の所定の位置に鍵財布　千枝子
喜びの春の祝いで財布泣く　宣子
ポイントカードばかりが財布厚くする　敬子
スーパーの特価日探す痩せ財布　善之
財布に紐口にチャックをつけている　蕉子
春風や財布も軽く身も軽く　浩二
桜色のシール合格おめでとう　ふりこ
字の書けぬ母シールで届く春便り　舞夢
孫の便り必ずシール二つ三つ　げんえい
半額のシール貼るのを待つ夕餉　弘子
半額シール待つネクタイの無表情　恭昌
私小説ここら辺りでとどめとこ　志華子
澄んだ目の盲導犬は裏切らぬ　希久子
すみませんもうしませんと裏切られ　行久
老いらくの恋過呼吸か窒息か　眞澄
いらんもんはいらんと言うて返される　義昭
温度差のある夫婦にも花吹雪　富子
免許返納ためらっている歳と足　大子
裏道の昭和レトロがしゃべりだす　弘美
風邪ひいた心を癒す桃の花　すみ子
くぎ煮見てもう一年が経ったのか　和夫
催花雨に神の恵みを感じつつ　満作
十連休年金者にはノンシャラン　理恵
彼岸の入り何故か身近になる香り　桃花
婆ちゃんも変身したい時がある　楓楽
十連休主婦忙しくなるばかり

川柳雑誌社・川柳塔社創立95周年記念

第25回 川柳塔まつり

と　き　**2019年9月28日(土)**

開場：午前11時　出句締切：正午　開会：午後1時

ところ　**ホテル・アウィーナ大阪　4階　金剛の間**

大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12（近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車）　電話 06-6772-1441

《同人総会・議事》午前10時より

2018年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
2019年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

《各賞表彰式・記念句会》

表彰式　路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞

おはなし	「路郎という山」	川柳塔社	楽原道夫 氏
兼題	「支える」	川柳塔社	川上大輪 選
	「ハート」	川柳塔社	木本朱夏 選
	「いきなり」	川柳塔社	新家完司 選
	「街・町」	川柳宮城野社	雫石隆子 選
	「待つ」	番傘川柳本社	田中新一 選
事前投句	「　酒　」**(8月30日必着)**	川柳塔社	主幹 小島蘭幸 選

◎各題2句・勝手ながら欠席投句は拝辞させて頂きます
出句締切　正　午（午後5時頃終了予定）　※各題の「天」位に賞呈
◎会　　費　2,000円（当日頂きます）ご昼食は各自でお済ませください
◎　呈　　記念品

《懇　親　宴》

と　き　2019年9月28日(土)　午後5時～7時

ところ　ホテルアウィーナ大阪　3階　葛城の間

☆会　費　7,000円　先着申込み 130名様

＊事前投句および懇親宴のお申込は**チラシに刷りこみのハガキ**(ご希望の方は事務所)にて8月30日(金)までに本社事務所宛、お送りください。

＊懇親宴のご送金(句会費除く)は同封の振込用紙でお願い致します。

主催　川柳塔社
大阪市天王寺区大道1丁目14−17−201
〒543-0052　☎・FAX 06−6779−3490
振替 00980−4−298479

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳 たちばな	15日(水) 13時45分締切 印象吟・上・抜く・自由吟	立花公民館(尼崎市塚口町3-39-7) 阪急塚口駅北へ10分 〒661-0953 尼崎市東園田町3－49－5　藤井宏造
岸和田 川柳会	18日(土) 14時締切 漫画・香る・さわやか ベンチ	岸和田市立総合センター 南海電鉄「岸和田」駅東へ5分 〒596-0076 岸和田市野田町2－33－19　中岡香代
川柳塔 みちのく	18日(土) 17時締切 散る・離・セーフ	弘前市御幸町13-1「大成小学校地域交流室」℡0172-36-6614 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛　℡0172-36-8605
川柳 ねやがわ	19日(日) 13時締切 得意・ゆっくり・逢う 自由吟	寝屋川市　産業会館 〒572-0063 寝屋川市春日町9－9　高田博泉
川柳 藤井寺	19日(日) 14時締切 背負う・いじわる・席題 共選	藤井寺市生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0007 藤井寺市林5－8－20－303　鈴木いさお
豊中 もくせい 川柳会	20日(月) 13時50分締切 地図・揺れる・浅い 自由吟	豊中市立中央公民館　3F 阪急宝塚線「曽根」駅　徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5－26　初代正彦
川柳 さんだ	21日(火) 13時締切 人気・贅沢・スポーツ・狙う 自由吟	キッピーモール（JR三田駅前） 〒669-1545 三田市狭間が丘5－10－19　谷　祐康
川柳塔 すみよし	25日(土) 14時15分締切 理由・光る・どんどん	住吉区民センター2階　集会室4 〒580-0026 松原市天美我堂3－130－2－404 森松まつお
和歌山 三幸 川柳会	25日(土) 13時15分締切 子供・母	和歌山商工会議所　4階　第3会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
はびきの 市民 川柳会	26日(日) 14時締切 丁・生きる・ベスト	陵南の森公民館 近鉄南大阪線「高鷲」駅下車　北東へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8　徳山みつこ
西宮北口 川柳会	26日(日) 創立45周年記念川柳大会 詳細は本誌4月号65ページ参照 差点・閃く・うっとり・情報・駆ける・繋ぐ	西宮市立中央公民館 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プレラにしのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602　梅澤盛夫
川柳 ふうもん 吟社	26日(日) 13時締切 自由吟・ありのまま・居場所 無効・席題	開発ビル　2F　砂場事務所　鳥取市片原1－107 〒689-0202 鳥取市美萩野2－171－3　中村金祥
南大阪 川柳会	27日(月) 18時30分締切 節目・反る・きっと・雑詠	大阪市立住まい情報センター　5F　研修室 メトロ谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京都 塔の会	27日(月) 14時締切 ピント・難・はみだす	ハートピア京都　京都市中京区烏丸丸太町 地下鉄「丸太町」駅⑤出口すぐ 〒607-8231 京都市山科区勧修寺堂田70－16　桝本宏子

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6779-3490）へご連絡ください。

5月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳 とんだばやし 富柳会	4日(土) 14時締切 恋・どうも・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0043　富田林市南大伴町4-1-10　池　森子
倉吉 川柳会	4日(土) 14時締切 するする・拾う・弁当・席題	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072－17 谷口次男
川柳塔 まつえ 吟社	4日(土) 13時30分締切 増加・大胆・自慢・外	松江雑賀公民館 〒690-1223 松江市美保関町笠浦222－1　相見柳歩
川柳塔 な　ら	8日(水) 14時締切 スパイ・ざわざわ・互角	奈良市立中部公民館　4F 奈良市上三条23-4　近鉄「奈良」駅④番出口　徒歩5分 〒633-0054 桜井市阿部787　安土理恵
あかつき 川柳会	10日(金) 14時締切 記念・広い・青・時事吟	大阪保育運動センター（新谷町第1ビル2F） メトロ「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2－312　前田紀雄
川柳大阪	11日(土) 14時締切 やっぱり・夜・熱い	メトロ・長堀鶴見緑地線　京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-11-6　山崎珠生
城北 川柳会	11日(土) 14時締切 いちいち・列車・凛凛しい 自由吟	旭区老人福祉センター　3F メトロ谷町線「千林大宮」駅③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14　江島谷勝弘
六甲 川柳会	11日(土) 14時締切 恥じる・元気・譲る・自由吟	六甲道勤労市民センター　5F　E室 JR「六甲道」駅南隣　メイン六甲内 〒657-0011 神戸市灘区鶴甲4－11－11　上田和宏
川柳塔 打吹	11日(土) 13時30分締切 テーブル・肉・いきなり 席題	倉吉市上灘町9　上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637－3　牧野芳光 方 川柳塔打吹　事務局
八尾市民 川柳会	12日(日) 14時締切 更衣・ばりばり・取る・雑詠	八尾市安中町3－5－1　渋川・安中集会所 JR「八尾」駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2－1－7　土田欣之
川柳塔 わかやま 吟社	12日(日) 14時10分締切 兼題＝囲む・拒む・近い 課題吟＝情	和歌山商工会議所　4階　和歌山市西汀丁36 兼　題　〒649-6253 岩出市紀泉台366　藤原ほのか 課題吟　〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 乗原道夫
ほたる 川柳 同好会	14日(火) 13時30分締切 波・苦い・折句=とよな(か)	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール蛍池　蛍池駅前ビル　5F 〒561-0813 豊中市小曽根2－4－1　水野黒兎
川柳塔 さかい	14日(火) 14時締切 考える・才能・折句：こうふ	東洋ビルディング　4F 堺東駅北西改札口から2分 〒599-8103 堺市東区菩提町5－171　矢倉五月
川柳 あまがさき	14日(火) 14時締切 捨てる・芽・のびのび 自由吟	尼崎市女性センター・トレピエ　2階 阪急武庫之荘駅南へ5分 〒661-0953 尼崎市東園田町3－49－5　藤井宏造

柳界展望

わす

★平成30年度「川柳塔わかやま吟社四賞」。

葵水賞　山東日出男
耳鳴りは神様からのメッセージ

課題吟賞　小谷　小雪
どの形にもなる相棒のタオル

★「第23回川柳展望全国大会」は、4月14日ホテルアウィーナ大阪で開催。参加者138名、同人成績。

秀　句　上田ひとみ
私は神さまなんていい出した

秀　句　藤井　宏造
切らないとキリトリ線の意味がない

★「第7回卑弥呼の里誌上川柳大会」は参加者761名。同人成績。

特　選　谷口　義
モンローはリアルおばあさんもリアル

特　選　高瀬　霜石
ともだちが倒れたぼくは傾いた

特　選　平井美智子
美しく飾る私の泣き所

▽**出　版**△

○小島蘭幸句集『樹齢千年もう美しくなるばかり』。新葉館「川柳作家ベストコレクション」B6判P95。定価1200円＋税。

▽**訃　報**△

○島田誠一（常任理事・茨木市）さんが4月10日に逝去。享年75。葬儀には新家完司理事長、西出楓楽相談役、常任理事多数が参列した。

○升成好（同人・大阪市）さんが3月18日に逝去。享年83。

▽**訂正とお詫び**△

○4月号、P112段目2行目、挑戦そこから何か動き出す→**そ・し・て**・挑戦そこから何か動き出す

▽**削　除**△

○2月号、P16上段9行目。3月号、P80下段21行目の句　クラス会みんな上手に化けているは、作者本人の申し入れより削除。

▽**新誌友紹介**△

羽曳野市　**大坂有一郎**
紹介者　徳山みつこ

津山市　**尾原　洋子**
紹介者　高橋由紀子

日向市　**黒木　栄子**

美作市　**岡本　余光**

常任理事会＝4月8日
①同人・誌友拡大について②第25回まつり進捗状③定例確認事項。
次回常任理事会＝5月7日㈭AM10時～

新同人紹介

大石洋子（おおいしようこ）
―推薦　蘭幸・完司・千代子推薦

中島一彌（なかじまかずや）
―淳司・直樹・隆彦推薦

中掘優（なかぼりゆう）
―理恵・富子・恭昌・眞澄推薦

藤澤照代（ふじさわてるよ）
―蘭幸・完司・千代子推薦

第19回　生駒市民川柳大会

日　時　6月15日（土）　12時開場
会　場　生駒市コミュニティーセンター
（セイセイビル内）近鉄生駒駅より南へ3分
〒630-0257　生駒市元町1−6−12
TEL0743−73−0500
事前投句　「新　た」　松本　柾子　選
ハガキで1句　（出席者に限る）
5月25日（土）消印有効
宿　題　「遺　産」　大久保眞澄　選
「羽ばたく」　木村　利春　選
「素　直」　竹村　穏夫　選
「切り開く」　前中　知栄　選
「ほのぼの」　毛利　元子　選
出　句　各題2句（出席者に限る）
締　切　13時
会　費　1500円（発表誌呈）
事前投句先　専用ハガキまたは普通ハガキにて下記まで
〒630−0222　生駒市壱分町1487−30
小金澤　貫一　宛
問合せ先　小金澤寛一　TEL0743−77−6793
主　催　生駒番傘川柳会

はばたき川柳会
10周年と会報120号記念誌上大会

兼題と選者　（各題2句）
「　鳥　」
新家　完司　選
牧野　芳光　選
両川　無限　選
福西　茶子　選
斉尾くにこ　選
「　縁（えん・えにし）」
金築　雨学　選
竹治ちかし　選
石橋　芳山　選
奥田　勝子　選
長谷川博子　選
投句締切　5月31日
投　句　料　1000円　（切手不可）
問い合わせ・投句先
〒693−0042　出雲市外園町349
熱田熊四郎　宛
電話・FAX　0853−28−0023

第3回　全国誌上川柳大会

兼　題　「自由吟」
2句詠　8名による共選
選　者
奈良　一艘　　井上　一筒
くんじろう　　新家完司
笹田かなえ　　米山明日歌
八上　桐子　　樋口由紀子
用　紙　所定の用紙または便箋・原稿用紙
参加費　一口　1000円（切手不可）
＊何口でも参加可能
賞　ポイント制として上位10位まで呈賞
締　切　6月30日（日）（当日消印有効）
投句先及び問合せ先
〒690−0001　松江市東朝日町206−7
石橋芳山宛　TEL090−2003−5846
主　催　松江川柳会

第17回　鈴鹿市民川柳大会

日　時　6月23日（日）　午前10時開場
会　場　鈴鹿市中江島町18−28
東樽(トウダル)鈴鹿店　TEL059−388−1000
☆近鉄白子駅西口より北へ徒歩12分
会　費　2000円（ドリンク・昼食・発表誌呈）
席題発表　午前11時
兼　題　各題2句・締切12時・開会13時30分
席題A「当日発表」　共選
大野たけお　選
山本　鈴花　選
席題B「当日発表」小林信二郎　選
宿　題「欠ける」三村　舞　選
「侍(さむらい)」荒川八洲雄　選
「自由吟A」橋倉久美子　選
「自由吟B」新家　完司　選
（☆自由吟は共選ではありません。別々の句をそれぞれの選者に提出のこと）
事前投句　「未　練」　青砥たかこ　清書選
ハガキに2句・住所・雅名記入
（欠席投句拝辞）
締　切　5月31日（消印有効）
〒510−0213　鈴鹿市南旭が丘1−6−3
吉崎　柳歩　宛
主　催　鈴鹿川柳会

編集後記

★清冽な泉を抱いて大樹かな　　薫風

★令和元年五月一日発行の川柳塔をお届します。表紙をご覧頂きましたか。前田尋画伯の鯉のぼりが「令和」の大空を泳いでいます。「令」には「命令・司令・政令・禁令」のお固いイメージと、「他人の親族に対する敬称。令兄・令嬢・令夫人」の淑やかな例も。「令和の令は命令の令ではなく美しいの令」だとテレビで教えられました。

★古い時代には人心を一新するためにも改元が行われたという。新しい元号のもつ言霊の力を恃んだのであろう。「れいわ」の清々しい響きに、老人にも若者にも希望の持てる時代であるよう期待している。前号にも触れたが改元詐欺が横行している。狙われるのはいつも高齢者だ。世の中が大きく変わる時こそ、細心の注意が必要だ。心したい。

★某月某日、第七回「泉大津市オリアム随筆賞」の表彰式に参加。私が表彰されるのではない。選考委員の講評をお聞きするために泉大津市まで足を運んだのである。選考委員は木津川計・難波利三・眉村卓・有栖川有栖の豪華な顔触れ。諸先生方の講評を一口でいうなら「エッセイに嘘があるのはだめ。八〇パーセントは事実を書く」ことらしい。川柳にも通じることかも知れない。第八回募集締切りは九月二八日必着。詳しくは泉大津市役所ホームページまで。

★五年後にお札の顔が変わるという。一万円札は渋沢栄一、五千円札は津田梅子、千円札は北里柴三郎。千円札の代名詞の福沢諭吉は川柳にもたびたび詠まれているが「柴三郎」では句にならないなあ……とのボヤキを聞いたような。ところでの二千円札ってどうなったのでしょう。どこかで太平の眠りを貪っているのでしょうか。

（朱夏）

○編集に携わるようになって4年余り。校正の度に、先輩の方々の博識ぶりに衝撃をうけています。

○俳句を嗜まない私には季語の知識も意識も薄く、慌てて辞書や歳時記を繰る始末。皆さんは、そういう語も難無く使って作句されています。調べた私はまた一つ賢くなったと自らを慰めるのです。

○漱石のような作家は、造語も、誤用と思われる漢字の使用も通用させてしまいます。塔誌では、明らかな誤字以外は、作者の想いに添うようにしています。

○作家でもない、私のような若輩者は「正しい言葉」を「正しい用字」で表現することを求められます。私は師から、勝手な造語は使うな、六割以上の人がわかる言葉で表現せよ、と教わりました。一読で共感できることは大きな喜びだと思います。

○一方、難解な句に出会って向き合う時間も貴重だと思えるようになりました。編集の仕事のお陰でしょうか？

（眞澄）

ひとこと

「70の手習いで」

娘に「70の手習いで」、パソコン教室に通ったらと言われ、その教室に通う折り「川柳」に出会いました。古い本からサラリーマン川柳まで図書館で読み川柳に惹かれました。

その後、郷土の川柳会に入り、投稿するうち賞に恵まれ、選者の竹信照彦先生と知り合い、「川柳塔の誌友」になることを勧められ、今年2月から入会しました。

今、名前入り川柳に凝っております。これからは「誌友」更には「同人」を目指して頑張りますので宜しくお願いいたします。

（私の句）

子を想うひろみ五十路は夢多し

会うたびに心惹かれる亜規の月

（伊藤　嘉昭）

「川柳塔」への投句について

(1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。

(2) 愛染帖・檸檬抄・一路集・インスピレーション・ナビ（印象吟）への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。

(3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。

(4) 各欄への投句数および**投句締切期日の厳守**をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から15時までにお願いいたします。

川柳塔誌**新規**購読申込書

年　月　日

きりとりせん

氏名	
住所	〒　－
電話	－　－
紹介者	

○　○　年　月から半年　５０００円
○　○　年　月から一年　９８００円
} 該当の方に○をつけて下さい

〒543-0052
大阪市天王寺区大道1丁目14番17号　花野ビル201
川柳塔社（電話　０６－６７７９－３４９０）
振替　００９８０－４－２９８４７９

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい

本社５月句会

とき　５月７日㈫　13時開場・13時40分締切
ところ　アウィーナ大阪　４階　金剛の間
天王寺区石ケ辻町19－12　電06・6772・1441
おはなし「川柳塔誌でふり返る平成」　鈴木いさお氏
席題「　　」　出口セツ子選
兼題「　絵　」　山崎武彦選
「疑　う」　上田ひとみ選
「どうぞ」　中川ひろ介選
「派　手」　西出楓楽選
「時　代」　小島蘭幸選
（各題2句以内）
会費　1000円　**投句料**　500円（切手可）

本社６月句会

7日(金)　午後1時から
兼題「計　算」「　手　」「うきうき」
「噛　む」「我　慢」

作品募集

7月号発表（5月15日締切）

川柳塔（8句）　小島蘭幸選
水煙抄（8句）　西出楓楽選
愛染帖（2句）　新家完司選
檸檬抄「添える」（2句）　川端一歩共選
　　山岡冨美子
インスピレーション・ナビ（2句）　大西泰世選
「　虫　」　澤井敏治選
「知　る」　坂本加代選
初歩教室「内　緒」（3句）　居谷真理子担当
初歩教室「内緒」は8月号発表

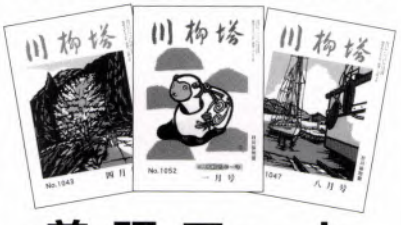
8月号
檸檬抄「普　通」
一路集「荒れる」「　湯　」
初歩教室「つなぐ」

川柳塔WEB句会のご案内

課　題「英　語」　なかはられいこ　川上　大輪　共選
締　切　5月20日　**発　表**　5月25日頃
投句料　無　料
インターネットで「川柳塔」を検索しWEB句会をクリックしてご投句ください。

定価　八百円（送料98円）
半年分　五千円（送料共）
一年分　九千八百円（同）
二〇一九年（令和元年）五月一日発行
発行人　小島和幸
編集人　木本朱夏
印刷所　美研アート
発行所　川柳塔社
〒543-0052　大阪市天王寺区大道一―一四―一七　花野ビル201号室
電話（〇六）六七七九―三四九〇番
振替　〇〇九八〇―四―二九八四七九番

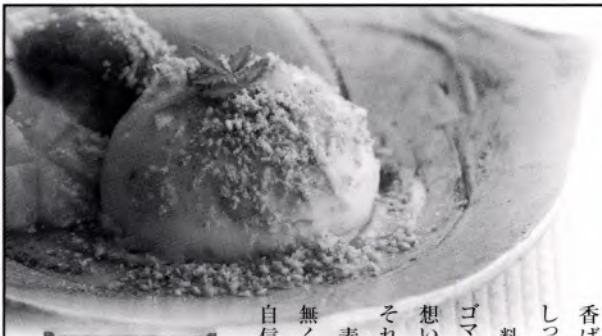
川柳・俳句・エッセイ・小説
新聞・広告・ポスター・伝票等
あなたの思いをかたちにします。



美研アート
〒531-0061 大阪市北区長柄西1-1-10
TEL（06）4800―3018
FAX（06）4800―3028
Eメール　bikenart@ea.mbn.or.jp
ホームページ　https://www.bikenart.com
※事務所移転につき住所・電話番号が変わりました。

令和元年　五月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻一一〇四号　川柳塔　五月号
定価　八百円＋税（送料　九十八円）

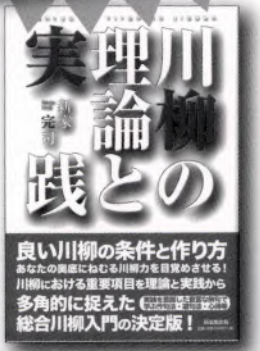
オニザキの プレミアムロースト
つきごま
杵つき製法の「すりごま」



袋を開けた瞬間に広がる、香ばしい薫り。舌と記憶にしっかりと残る、深いコク。料理をより美味しくするゴマを作りたい、真っすぐな想いから生まれた逸品。それが「プレミアムロースト」。素材本来の良さを余すこと無く引き出した、オニザキの自信作をお届けします。

株式会社 オニザキコーポレーションセールス
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング
TEL（フリーダイヤル）0120-30-5050

お待たせいたしました！
第四刷出来！



川柳の理論と実践

新家完司・著

ご注文は下記へ、ハガキかFAXにて。
お支払いは到着後で結構です。

実践を意識した豊富な例句で学ぶ作句法・選句法・心得
初心者はもちろん、中級者やベテランにも役立つ

〒689-2303　鳥取県東伯郡琴浦町徳万597　新家完司
326頁。送料＋消費税＝2,000円　FAX 0858-52-2449

雑誌 05703-5